

# 坂田

—新潟県柏崎市西山町坂田・坂田遺跡発掘調査報告書—

2009

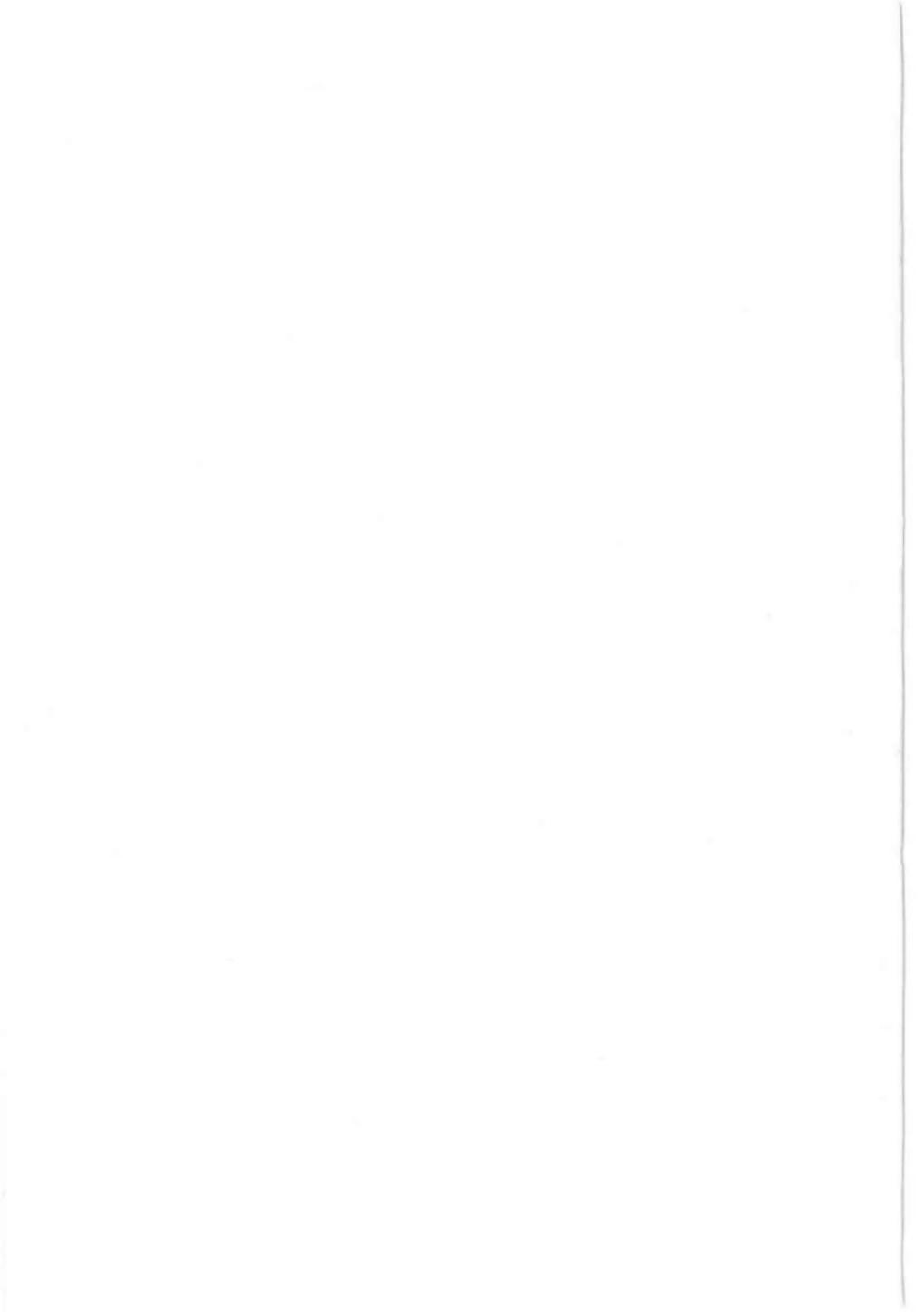
柏崎市教育委員会

# 坂 田

—新潟県柏崎市西山町坂田・坂田遺跡発掘調査報告書—

2009

柏崎市教育委員会



## 序

柏崎平野北部に位置する柏崎市西山町坂田地区は、曾地丘陵から流れ出す坂田川を挟んで水田が広がる稲作地帯です。また、西山町地域で最も多くの戸数を誇る大きな集落でもあります。この地区では、多くの遺跡の発掘調査を行い、様々な成果をあげています。弥生時代の大型のヒスイ製勾玉も、この坂田地区内の坪之内遺跡で発見されました。

坂田遺跡は、この地区のほぼ中心に位置し、古くからその存在が知られ、弥生時代から中近世まで、様々な時代の遺物が見つかっています。この遺跡では、平成17年度には場整備事業に伴う発掘調査が行われ、大きな成果をあげています。今回の発掘調査は、市道柏崎杉本線の道路改良工事に伴うもので、遺跡の南端にあたる部分を調査しました。調査の結果、平安時代の大きな溝から文字が書かれた墨書き器が多く出土しました。この他にも、建物跡や井戸跡などが見つかり、平安時代・中世の集落跡の一端を垣間見ることができました。

本調査は、広大な遺跡のほんの一部に過ぎませんが、このような発掘資料の積み重ねが、地域の歴史や文化の解明をしていくために欠かせません。調査の成果を本書により報告することで、郷土に対する興味や愛着がわくことの一助となり、文化財保護に対する認識を深めていただければ、この上ない幸いであります。

最後になりましたが、この度の発掘調査が無事終了できたことは、ひとえに地元坂田地区の皆様と、事業主体であります柏崎市都市整備部のご理解とご協力の賜と思っております。また、調査に参加していただきました作業員の皆様、本事業に格別なるご助力とご配慮を頂いた新潟県教育委員会の各位に対し、ここに深甚なる謝意を表する次第であります。

平成21年3月

柏崎市教育委員会

教育長 小林和徳

## 例　　言

1. 本報告書は、新潟県柏崎市西山町坂田字瀬戸・蓬田・下沢田地内に所在する坂田遺跡の発掘調査記録である。
2. 発掘調査の原因となった事業は、交通通信施設市道柏崎杉本線整備事業であり、柏崎市都市整備部都市整備課の依頼を受け、柏崎市教育委員会が主体となって発掘調査を実施した。
3. 発掘調査は平成20年4月8日から平成20年6月12日まで実施した。整理・報告書作成作業は、柏崎市西山町西山の柏崎市遺跡考古館西山整理室にて、現場作業に引き続き実施した。
4. 発掘調査で出土した遺物及び調査の過程で作成した記録類（図面・写真類）は、すべて一括し、柏崎市遺跡考古館で保管・管理している。
5. 出土遺物の注記については、坂田遺跡の略号として「SKT」を用い、調査区名、遺構名や層序などを併記した。
6. 本報告書は調査担当の中島の指示のもと、調査員の室星が中心となり作成した。本文の執筆は中島・伊藤・室星が下記の通り分担して行い、編集は中島が担当した。なお、第V章第1節は柏崎市遺跡考古館品田高志氏とともに、検討を重ねた。

第I章・第II章・第V章第2節1、3、第3節・写真図版……………中島義人

第III章・第IV章・第V章第1節・遺構属性表・遺物観察表・図面図版……………室星尚史

第V章第2節2……………伊藤啓雄

7. 本書掲載の図面類の方位はすべて真北である。磁北は真北から西偏約7度である。

8. 発掘調査から本報告書作成に至るまで、事業主体者である柏崎市都市整備部都市整備課及び、元坂田地区の関係者等から様々なご理解とご協力を賜った。記して厚く御礼申し上げる次第である。

石橋夏樹 垣内光次郎 阪田友子 品田高志 田中亨 鳴海忠夫 二ノ宮吉栄  
新潟県教育委員会文化行政課 柏崎市都市整備部都市整備課（五十音順）

## 調　　査　　体　　制

調　　査　　主　　体　　柏崎市教育委員会（教育長 小林和徳）

總　　括　　遠山和博（教育総務課長）

管　　理　　庶　　務　　末崎 章（教育総務課埋蔵文化財係長）

調　　査　　担　　当　　中島義人（教育総務課埋蔵文化財係主査・学芸員）

調　　査　　員　　室星尚史（教育総務課埋蔵文化財係準職員）

発掘作業員　押見久美子・加藤留美子・齊藤幸次・田中由昭・長谷川孝志・星野夏江

　　牧修・牧和子・牧由利子・若林敏美

整理作業員　池田文江・稻原真弓・白川智恵・新野直美・西谷良子・西村敦子・森広美

　　山岸サチ子・山崎和子

## 目 次

I 調査に至る経緯 .....	1
II 遺跡の位置と環境 .....	2
1 遺跡の位置と地理的環境 .....	2
2 歴史的環境 .....	3
III 遺跡と遺構 .....	6
1 坂田遺跡の概観と調査区 .....	6
2 調査の経過 .....	6
3 遺構・遺物の検出状況 .....	7
4 遺構各説 .....	8
a. 建物跡    b. 構列    c. 井戸    d. 土坑    e. 溝状遺構    f. 柱穴	
IV 出土遺物 .....	12
1 遺物の概略 .....	12
2 遺物各説 .....	12
V 総 括 .....	17
1 坂田遺跡の平安時代の様相 .....	17
1) 坂田遺跡出土古代土器の編年的位置付け .....	17
2) 遺構の性格と出土土器の様相 .....	20
3) 胎土B・C類の土器について .....	20
2 試掘調査と採集遺物から見た坂田遺跡 .....	22
1) 坂田遺跡試掘調査の成果 .....	22
a. 調査成果の概要    b. 試掘調査出土遺物    c. まとめ	
2) 坂田遺跡（“館屋敷”）採集の遺物 .....	26
a. 鳴海忠夫氏採集遺物    b. 旧西山町教育委員会保管遺物    c. 平成20年度採集遺物    d. まとめ	
3 調査成果のまとめ .....	32
1) 遺跡の概観 .....	32
2) まとめと今後の課題 .....	32
引用参考文献 .....	33
遺構属性表 .....	34
遺物観察表 .....	36
調査報告書抄録 .....	

## 挿 図 目 次

第1図 柏崎平野の地形分類図と坂田遺跡の位置 .....	2
第2図 坂田遺跡の位置と別山川流域の遺跡（1:75,000） .....	4
第3図 坂田遺跡出土土器組成 .....	18
第4図 坂田遺跡出土無台杯法量分布図 .....	18
第5図 坂田遺跡2区・5区主要遺構出土遺物 .....	19
第6図 坂田遺跡5区SD158・2区SD3出土遺物種別分布図 .....	21
第7図 坂田遺跡試掘調査トレンチ・遺物採集地点配置図 .....	23
第8図 坂田遺跡試掘調査出土遺物 .....	25
第9図 坂田遺跡（“館屋敷”）採集土器・陶磁器 .....	27
第10図 坂田遺跡（“館屋敷”）採集鉄滓 .....	30

## 表 目 次

第1表 坂田遺跡出土土器数量表 .....	18
第2表 坂田遺跡試掘調査結果一覧表 .....	24
第3表 坂田遺跡試掘調査主要出土遺物・“館屋敷”主要採集遺物一覧表 .....	31

## 図 版 目 次

### 図面図版

- 図版1 坂田遺跡の位置と周辺の地形
- 図版2 調査区の位置とグリッド配置図
- 図版3 造構全体配置図
- 図版4 造構全体図1
- 図版5 造構全体図2
- 図版6 造構全体図3・基本層序
- 図版7 造構個別図1
- 図版8 造構個別図2
- 図版9 造構個別図3
- 図版10 造構個別図4
- 図版11 造構個別図5
- 図版12 造構個別図6
- 図版13 遺物実測図1
- 図版14 遺物実測図2
- 図版15 遺物実測図3
- 図版16 遺物実測図4
- 図版17 遺物実測図5

### 写真図版

- 図版18 坂田遺跡周辺空中写真
- 図版19 造構完掘写真1
  - a. 調査前全景 b. Y8完掘
  - c. Y8完掘 d. Y9・10完掘
  - e. SD157完掘 f. Y9・10完掘
  - g. X12・13完掘 h. SD150～SD155完掘
- 図版20 造構完掘写真2・基本層序
  - a. X11・12完掘 b. V13・14完掘
  - c. S14・T14地山切土部分 d. S14完掘
  - e. U14基本層序② f. V8基本層序③
  - g. W13基本層序④ h. Y10基本層序⑤

- i. Y8・9基本層序⑥ j. Y8基本層序⑦
- 図版21 造構個別写真1
  - a. SE93遺物出土状況 b. SE93A断面
  - c. SE93木材出土状況
  - d. SE93木材出土状況 e. SE93完掘
  - f. SE93C断面 g. SE59断面
  - h. SE59完掘
- 図版22 造構個別写真2
  - a. SE145断面 b. SE145完掘
  - c. SD65遺物出土状況 d. SD65断面
  - e. SD65完掘 f. SK76断面
  - g. SD65・SK76完掘 h. SD158断面
- 図版23 造構個別写真3
  - a. SD158遺物出土状況
  - b. SD158墨書き土器出土状況
  - c. SD158完掘 d. SD158完掘
  - e. SD85断面 f. SD85断面
  - g. SD157遺物出土状況 h. SD157断面
- 図版24 造構個別写真4
  - a. SD71断面 b. SD107断面
  - c. SD137断面 d. SD154・SD155完掘
  - e. SD139・SD141・SD144完掘
  - f. SD139・SD141・SD144完掘
  - g. SP54断面 h. SP87断面
- 図版25 出土遺物写真1
- 図版26 出土遺物写真2
- 図版27 出土遺物写真3
- 図版28 出土遺物写真4
- 図版29 出土遺物写真5
- 図版30 出土遺物写真6

## I 調査に至る経緯

坂田遺跡は、柏崎市西山町坂田字蓬田・瀬戸・下沢田に所在する。遺跡は、別山川支流の坂田川左岸の河岸段丘上から曾地丘陵西側に伸びる淨土山の裾に至る沖積地にかけて、東西300m、南北780mに広がりを見せる。現況の標高は、24mから27mほどである。

坂田遺跡の存在は古くから知られており、須恵器・土師器・珠洲焼・弥生土器などが採集されていたが、本格的な調査などは行われたことがなかった。鳴海忠夫氏は、坂田集落センターの西側に隣接する畠地の地割と、採集された中世遺物の詳細な検討から、この地に中世の館が存在したものと考察した(鳴海1992)。坂田遺跡で本格的な調査が行われたのは、この地区で県営のほ場整備事業が計画されたことが契機であり、平成16年度から坂田遺跡を始め、周辺の広い範囲で試掘・確認調査を行った。この調査により、部分的にではあるが、坂田遺跡における遺構・遺物の分布を把握することができた。出土した遺物は、古代・中世に属するものが多く、大型の溝や土坑、ピットなどの遺構が検出された。遺跡の範囲は当初想定されたものより南側に広がることも判明した。この調査結果を受けて、一部で記録保存のための発掘調査が行われた(柏崎市教育委員会2007)。

市道柏崎杉本線は、坂田遺跡南辺の淨土山の裾を縫うように走り、坂田地区の東西を結ぶ路線である。沿線には民家が多く建ち並び、児童・生徒の通学路として、また、集会所への往来等にも用いられる重要な生活路線として利用されている。しかし、道幅が狭くカーブがきついことから見通しが悪く、安全確保のための道路改良が強く望まれていた。そこで、過疎地域自立促進計画に基づき、過疎対策事業として道路改良が平成17年度から行われることになった。この改良工事は道路を北側の水田内に拡幅するものであった。この拡幅範囲の一部は、ほ場整備事業に伴う発掘調査区に隣接するもので、遺構の広がりが確認されている。このため、柏崎市教育委員会は工事の担当部署である柏崎市都市整備部都市整備課と遺跡の取り扱いについて協議を行った。この結果、道路拡幅範囲が坂田遺跡に及ぶ部分については、現状保存は困難なため、記録保存のために発掘調査を行うこととなった。調査対象範囲の工事は平成20年度に行う計画のため、発掘調査は平成19年度の後半に行うこととした。しかし、平成19年7月16日に発生した新潟県中越沖地震により、柏崎市教育委員会が手がけていた他の事業の進行に大幅な変更が生じ、発掘調査に着手することができなくなってしまった。そのため、担当課と協議し、当該区間の工事着工前の平成20年度に調査を行うことで了解を得ることができた。

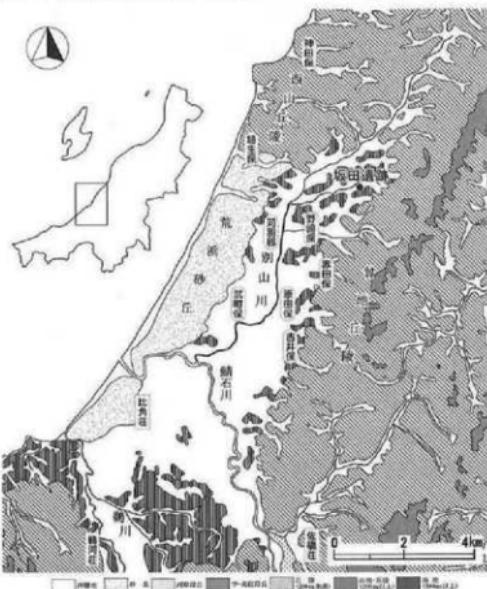
文化財保護法に伴う通知等は、第94条第1項の規定による埋蔵文化財発掘の通知を平成17年11月30日付都第252号で柏崎市長が新潟県教育長へ、第99条の規定による発掘調査に着手する旨の報告を平成20年4月4日付け教総第503号で新潟県教育長に行った。坂田遺跡発掘調査は平成20年4月8日から開始し、平成20年6月12日に現場作業を完了した。整理作業及び報告書作成業務は引き続き行った。

## II 遺跡の位置と環境

### 1 遺跡の位置と地理的環境

**柏崎平野概観** 柏崎平野は新潟県のほぼ中央に位置し、鯖石川と鶴川の主要河川により形成された塵海沖積平野である。平野の周囲は東頸城丘陵の一部に囲まれ、信濃川水系の新潟平野、関川水系の頸城平野とは隔てられる。鯖石川と鶴川は米山・黒姫山・八石山の刈羽三山に源を発し、平野を三分するように西へ流れて日本海に至る。坂田遺跡が所在する柏崎平野北部の沖積地は、別山川沿いに形成される。別山川は柏崎市西山町別山字甲戸の蘭蛇沢（おかばにざわ）に源を発して、旧西山町と刈羽村を縦貫するように南西方に向かって流れ、鯖石川に合流する。別山川の東側は東頸城丘陵に連なる曾地丘陵が、西側には荒浜砂丘に端を発する西山丘陵が並走する。この両丘陵は、褶曲構造が発達し、その背斜軸に沿って吉井・西山・関原などの油田やガス田が形成される。別山川下流域では沖積地が比較的広く形成されるが、上流に近づくにつれて西山丘陵と曾地丘陵の間が狭まり、独立した段丘が数多く形成されることにより、平地は著しく狭くなる。両丘陵には樹枝状の谷が数多く形成される。

**坂田地区と坂田遺跡周辺の地形** 柏崎市西山町坂田は、別山川の支流の一つである坂田川を挟んで位置する。坂田川は曾地丘陵の地蔵峠付近に源を発し、丘陵裾に樹枝状の狭い開析谷を形成し、西山町五日市地内で別山川に合流する。坂田川の両側には曾地丘陵から伸びる低位丘陵と独立した段丘が点在し、その間を縫うように沖積地と河岸段丘が形成される。坂田遺跡は坂田川左岸の河岸段丘上の字下沢田・瀬戸・蓬田に広がる。遺跡の南側は曾地丘陵から伸びる淨土山と呼ばれる小高い丘に接する。遺跡の現況は水田や畑が大部分であり、一部は東側の宅地に広がる。平成17年度から開始された県営ほ場整備事業に伴い、一部で発掘調査を行った（柏崎市教育委員会ほか2007）。今回の調査地点は遺跡の西南端に位置し、ほ場整備事業に伴う調査における2区に隣接する。



第1図 柏崎平野の地形分類図と坂田遺跡の位置

## 2 歴史的環境

### 縄文時代～古墳時代

別山川上流域では、縄文時代前期前葉以降、砂丘上や独立段丘上などで集落遺跡が見つかっているが、沖積地では明確な集落の痕跡は認められない。弥生時代中期以降、別山川流域の沖積地において遺跡が多く分布するようになる。下谷地遺跡を始めとした吉井遺跡群は、別山川下流域の丘陵から離れた沖積地中央部に位置する。弥生時代後期になると丘陵の近くに集落が営まれるようになり、丘陵上に立地する防衛的な集落の西谷遺跡等も出現する。

古墳時代では、前期に吉井行塚古墳群が現れるが、後続する古墳は見つかっていない。古墳時代前期の遺跡で集落の状況が把握できる調査事例はないが、刈羽大平遺跡と高塙A遺跡で土器類がまとまって出土している。古墳時代中期の遺跡では礼坊遺跡・戸口遺跡・枯木(A)遺跡・山ノ脇遺跡などがあり、後期の遺跡には戸口遺跡・吉井水上II遺跡・畠田遺跡・宮ノ前遺跡・高塙B遺跡などがある。

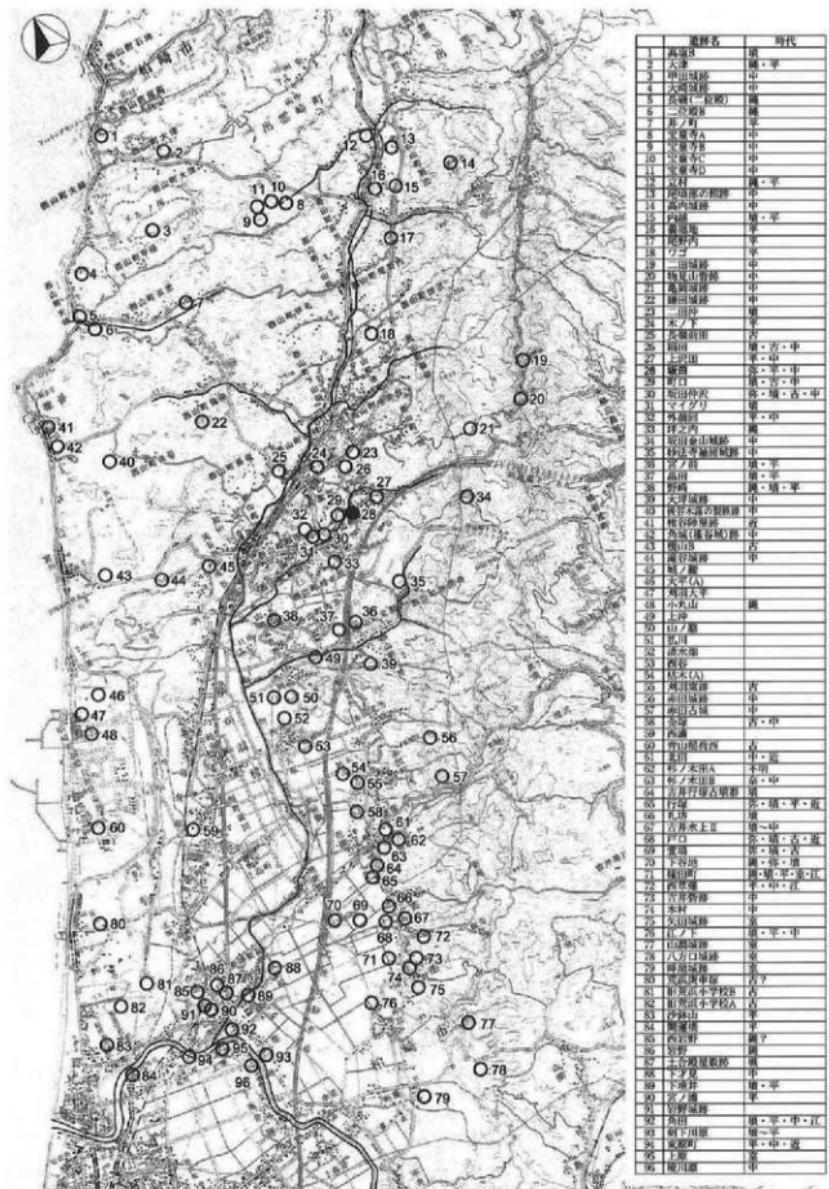
### 古代

越の国が分割されて越後国が成立するのは、庚寅年籍が作成される持統4年(690)頃であったとされる。成立当初の越後国の領域は阿賀野川以北であり、柏崎平野は越中国に含まれていたと見られる。その後、大宝2年(702)に頬城郡・古志郡・魚沼郡・蒲原郡が越後国に編入された。古志郡の成立當時における郡域は明らかでないが、柏崎市、刈羽村、出雲崎町、長岡市等が含まれていたと見られる。郡衙などの政治的な中枢施設は、長岡市(旧三島郡和島村)八幡林遺跡や下ノ西遺跡付近などの発掘調査成果から、島崎川流域に所在していたと想定される。三嶋郡の成立は9世紀前葉頃とされ、古志郡から分割されたものである。三嶋郡の郡域も明らかでないが、別山川と島崎川の分水嶺となる低い丘陵が、郡境の一部であろうと想定され、現在の柏崎市と刈羽村の大部分がこれにあたると考えられる。

承平年間(931～937)に成立した『倭名類聚鈔』により、三嶋郡には「三嶋」「高家」「多岐」の三郷が存在したことがわかる。三嶋郷は鶴川下流域、高家郷は鮒石川中流域と長鳥川流域、多岐郷は別山川上・中流域にあたるという考えが一般的である(金子1990)。延長5年(927)の『延喜式神名帳』には、三嶋郡の御嶋石部神社・物部神社・鶴川神社・多岐神社・三島神社・石井神社の6社が記載される。多岐神社は柏崎市西山町別山の多岐神社に比定され、物部神社は柏崎市西山町二田の二田物部神社であると見られる。御嶋石部神社と石井神社の比定地も西山町内に存在するが、これらには他にも論社がある。『延喜兵部式』に記載される北陸道の駅名では、三島駅・多太駅が三嶋郡内に比定される。これらの所在地も明らかとはなっておらず、諸説があるものの、三島駅は鶴川下流の柏崎市大字堀に、多太駅が柏崎市曾地の多々神社に近い吉井遺跡群周辺を指す考えが主である。古代北陸道は、柏崎平野北部で別山川左岸の曾地丘陵の麓を北上して島崎川流域に至るものと想定されている。

### 中世

『吾妻鏡』文治2年(1186)3月12日条では、柏崎平野に比定される中世莊園に「佐橋莊」「宇川莊」「比角莊」がある。佐橋莊は鮒石川中流域と長鳥川流域、宇川莊は鶴川流域一帯と鮒石川下流左岸域、比角莊は鶴川下流右岸域から鮒石川下流左岸域に比定される(柏崎市史編さん委員会1990)。中世莊園は柏崎平野の南部を中心に展開しており、柏崎平野北部では存在が知られない。この地域で



第2図 坂田遺跡の位置と別山川流域の遺跡 (1 : 75,000)

は野崎保・神田保・赤田保・原田保・武町保・吉井保・埴入保などの国衙領が点在していたとみられるが、中世にまでさかのぼる史料が残らないものが多い。野崎保は天和3年(1683)「刈羽郡寺尾村検地帳」に記載されており、西山町五日市に野崎の地名が残る。現在まで残る「刈羽」の地名は『明月記』正治元年(1199)9月22日条に「刈羽郷」と記載されるのが初現で、正平12年(1357)の鎌倉二階堂覚音寺領文書では「刈羽郡」と記載されている。中世の文献資料は、柏崎平野南部では多く残されているが、西山町域ではほとんど残されていない。そのため、当地域における支配者層の姿は明らかではない。鎌倉時代以降、刈羽村の赤田古城を中心に赤田氏が所在し、その後、上杉家臣の斎藤氏が赤田城を拠点にしたとされる。西山町と刈羽村の境の大坪城と滝谷城は斎藤氏の城郭とされる(鳴海2006)。

### 古代・中世の遺跡

別山川流域では古墳時代前期から後期にかけて遺跡数が増加していくが、古代初頭から前期にかけての様子は不明な点が多い。7世紀代の資料は、宮ノ前遺跡、町口遺跡等でわずかに遺物が出土している程度である。8世紀代では、海岸部の井ノ町遺跡や別山川左岸の枯木B遺跡等で遺物が出土しているが、集落の様相は不明である。当地域では9世紀代に遺跡数が増加していく。当期の遺跡は別山川左岸の丘陵裾部や独立段丘縁辺の沖積地に多く、別山川右岸や海岸部でも遺跡が確認されている。発掘調査が行われた遺跡には、海岸部の井ノ町遺跡、別山川左岸の宮ノ前遺跡、山ノ脇遺跡、枯木A遺跡等がある。井ノ町遺跡は西山丘陵西麓の海岸から深く入り込む谷地に所在する遺跡で、旧河道の縁に大型の柱を持つ掘立柱建物が検出され、大量の遺物が出土した。宮ノ前遺跡は別山川支流の妙法寺川が形成する開析谷に位置し、大型の掘立柱建物と小型の建物が柱筋を揃えて配置され、多量の灰釉陶器が出土した。9世紀後半から10世紀前半の開発領主層の存在が想定される。山ノ脇遺跡からは鶴尾が出土しており、寺院もしくは在地有力者との関連が想定される。枯木A遺跡は、刈羽窯跡に隣接する遺跡である。これらの他にも、坂田遺跡より上流に位置する尾野内遺跡やワゴ遺跡、海岸部の大津遺跡、別山川右岸の長嶺前田遺跡等がある。

中世の遺跡は上沢田遺跡、宮ノ前遺跡、払川遺跡、山ノ脇遺跡などの集落遺跡、内越遺跡・宝童寺遺跡群といった製鉄関連遺跡で発掘調査が行われている。上沢田遺跡では土器・陶磁器類とともに、精錬鍛冶・鍛錬鍛冶に伴う遺物や、剣物の未製品等の手工業関連遺物が多く出土した。鍛冶関連遺物にはスマキ状圧痕が付く羽口も含まれる。宮ノ前遺跡では13世紀代から16世紀代の国産・輸入陶磁器とともに、漆器や碗形鍛冶滓、剣物未製品などが出土した。これに対し、内越遺跡・宝童寺遺跡群では当期の集落跡は見られず、製鉄関連遺構が見つかっている。特に宝童寺A遺跡では製鉄に関連したと見られる木炭窯が30基以上存在したと見られる。放射性炭素年代測定の結果、11世紀から13世紀頃に製錬が行われていたものと見られる。奈良・平安時代には、柏崎平野の南部丘陵で製鉄が盛んに行われていたが、中世になると別山川上流域から島崎川流域に製鉄の中心が移っていくようである。別山川流域には中世山城も多く確認される。西山丘陵上には南から岩野城跡・滝谷城跡・後谷城跡・大崎城・甲田城が並び、曾地丘陵上には吉井砦跡・吉井黒川城跡・赤田古城跡・赤田城跡・大坪城・妙法寺袖浦城跡・坂田金山城跡・亀岡城跡・二田城跡・高内城跡等が存在する。

### III 遺跡と遺構

#### 1 坂田遺跡の概観と調査区

1) 坂田遺跡の概観 坂田遺跡は、坂田川左岸の谷底平野に立地する。本遺跡近辺の谷底平野は狭い沖積平野で、緩やかに西へと下り、坂田川左岸の丘陵裾と接している。本遺跡が立地する沖積地（標高約27m前後）は、北側の現坂田集落周辺の微高地とその南側の低地からなる。このことは、更正図からも読み取れ、北側の微高地（字下澤田付近の畑地）は、福蔵院付近で蛇行し段丘裾と接していたと推測される。また、遺跡南側の低地（字蓬田、瀬戸付近の水田）では、更正図の地割が北西方に向連なるが、これは現在の背後の尾根筋を反映したものと推測でき、現地形で段丘裾の微高地と谷を交互に形成する。坂田遺跡は、このような沖積地東西の微高地や低地に広がり、遺跡の南側で段丘裾と接している。

今次調査は、市道柏崎杉木線の改良工事に伴うもので、丘陵裾と開析谷の入り口部分にあたるS字に蛇行した地点に当たる。平成17年度に行われた調査地点のすぐ南側を調査した。調査の便宜上、平成17年度調査で1～4区の調査に対し、本年度調査区域を5区として、平成17年度調査区の2区南側を調査した。調査地点の現況は、水田である。

2) グリッドの設定 今次調査の面積は、約278m<sup>2</sup>であるが、市道改良工事のための調査であったため、幅の狭い長距離の調査区である。直線距離で約100mになる。

前回調査時に、長距離の調査区全てに統一的なグリッド（10m×10m）の座標系を設定した。グリッドは、東西方向に1～45のアラビア数字を、南北方向にA～Zのアルファベット（大文字）を付し、北西からA1・A2・・・と呼称した（大グリッド）。今次調査のグリッドは、前回調査に使用したものと同じグリッドを採用した。今次調査区は、南西側がZ7グリッド、北東側がS15グリッドにあたる。発掘調査では、大グリッドを1～25の小グリッド（2×2m）に区分し、遺物取り上げ等に用いた。なお、大グリッドは、国家座標を基準に設定し、Z7グリッドでX=160.170、Y=23.880の値を示す。

3) 基本層序 坂田遺跡5区では、第I～V層が確認されている。第III層・第IV層が遺物包含層で、第V層が構造確認面である。第I層は、道路路肩に伴う表土である。第II層は、水田耕作土で、2層に細分される。第IIa層は、耕作土の表土で、第IIb層は、耕作土の床土である。第III層の遺物包含層は、2層に大別できる。第IIIa層はしまりがあり粘性の強い灰色粘土で、第IIIb層はしまりがあり粘性の強い暗灰色から黒褐色を呈する粘土で、少量の木炭粒を含む。第IV層は、基本層序③でのみ確認されたもので、灰色を呈する粘土層で、少量の木炭粒を含む層である。第V層は、青灰色から緑灰色を呈する粘土層で、一部砂質を呈する。

#### 2 調査の経過

坂田遺跡の発掘調査は、平成20年4月4日に着手し、平成20年6月12日まで調査を行った。発掘に携わった調査員は延べ92人、作業員は延べ369.5人となった。

坂田遺跡5区は調査の便宜上、南西部を5区-1、北東部を5区-4として4区画にわけ調査を実

施した。具体的な区分けは、5区-1が調査区西端からSD65まで、5区-2がSD65からSD101まで、5区-3がSD101からSD133の地山が削平されている地点まで、5区-4は地山が削平されている地点から調査区北端までである。

調査は、埋め戻しの順序を考え、5区-1・5区-4、5区-2・3の順で調査を行った。調査は、それぞれ並行して行った。以下では、区分けした調査区ごとに経過を述べる。

5区-1は、4月4日より着手して、30日まで延べ15日間実施した。4月4日、調査区の設定と資材搬入を行う。8日、表土剥ぎを開始する。10日、現場作業スタッフを動員し、本格的な発掘調査を開始した。15日、遺構確認と検出状況の撮影を行い、午後から遺構発掘を行う。完掘は、土層観察を行い、遺構カードの作成が済んだところから実施した。16~23日まで、遺構発掘を継続し、併せて図面や個別写真等の撮影を行う。22日、完掘撮影を行う。23日から、残っていた図面の作成と基本土層の確認等の記録作業を行う。26日~30日、記録作業が終了し、埋め戻しを行う。

5区-4は、4月15日から着手して、5月13日まで延べ14日間実施した。4月15日、先に表土のみを掘削して、地盤の乾燥を図る。17日、表土剥ぎを本格的に開始する。耕作土の下はすぐに地山になっていた、水田の開墾により地山まで削平されていた。包含層が残っていたのは、北端の延長5mほどのみであった。22日、地山が掘削されている範囲が、概ねU14グリッドまでと確認できたため、表土剥ぎを終了する。25日、遺構確認と地山削平の状況を撮影した。遺構発掘と土層確認等の記録作業を行う。5月1日、完掘撮影を行う。9日、記録作業を終了し、埋め戻しを行う。

5区-2・3は、4月16日から着手し、6月11日まで延べ25日実施した。5区-3は、調査区が最も狭くなる地点で、重機の進入ができない所であった。このため、延べ20mほどを、作業員の手作業による表土剥ぎを行った。W13グリッド付近は、調査区脇に電柱が立っているため、電柱の転倒防止のため表土剥ぎは行わず調査から除外した。5月15日、5区-2・3西側の検出状況の撮影を行い、発掘作業を開始する。16日、5区-3北側の検出状況の撮影を行い、発掘作業を開始する。23日、5区-3北側の完掘撮影を行う。撮影後、残っていた図面の作成と土層確認等の記録作業を行い、埋め戻しを行う。6月3日、5区-2の完掘状況の撮影を行う。4日、5区-2の残っていた図面の作成と基本土層の確認等の記録作業を行い、埋め戻しを行う。9日、5区-3西側の完掘状況の撮影を行う。10日、残っていた記録作業を行い、坂田遺跡5区の発掘調査を終了した。12日、発掘に使用した資材の搬出等を行い、調査の全工程を終了した。

### 3 遺構・遺物の検出状況

坂田遺跡5区で検出した遺構は、総数で163基になる。内訳は、井戸(S E)3基・土坑(S K)2基・溝状遺構(S D)28基・柱穴(S P)101基である。他は発掘した結果、凹みや搅乱、欠番になつたもののが29基ある。柱穴101基のうち、根固めと柱痕が明確に確認できたものは、20基である。これらの遺構は全て、基本土層第V層上面から検出した。

調査地点が2区と接していることから、遺構の配置や遺物の出土状況は、概ね2区の調査と同じ様相を示す。柱穴は、本来配列を持った掘立柱建物跡を構成したと考えられる。5区西側に集中的に検出され、東側での検出は少数である。溝状遺構(S D)は、SD158から東側で特に多く検出している。5区中央は、溝状遺構と井戸が主体で、柱穴は少数である。5区北東のU14グリッド付近から北側は、東側から伸びる尾根の先端にあたり、水田と道路の開発によって地山まで削平されている。溝とビッ

ト各1基を確認したのみで、ほとんどの遺構が削平されたと考えられる。

なお、遺構・遺物の記述で前回の発掘調査区である2区と併せて記述を行うに際して、前回調査の遺構番号及び遺物番号の前に2区を付し、5区に関する記述では特に明示しないこととする。

#### 4 遺構各説

##### a. 建物跡

想定した建物跡は、3棟である。今回の調査区は狭小で、年度の異なる調査区をまたいで確認されたため、平面図上から復元したものである。

S B 1 (P 1:2区 S P 24・P 2:S P 47・P 3:S P 52・P 4:S P 60・P 5:2区 S P 29)

Y 8・9グリッドで検出した。想定した柱穴は7本で、このうち5本が確認できた。さらに2区の北側へ延長するものと考える。2区と5区の調査区間に、1本ずつ柱穴を持つ可能性がある。桁行3.3m、梁行3.8mの2×2間で、面積は約12.54m<sup>2</sup>である。主軸の方向は、西偏23°である。覆土は、P 2・3は暗褐色粘土、P 4は暗青灰色粘土である。深さは、確認面より35cmから40cmで、底面の標高は23.3m前後である。柱痕は確認できなかった。

S B 2 (P 1:S P 94・P 2:S P 96・P 3:S P 100・P 4:S P 102)

X 11グリッドで検出した。想定した柱穴は4本で、5区の北側にさらに延長する。しかし、2区に該当する柱穴が無いことから、調査区で完結すると考えられる。桁行0.9m、梁行2.3mの1×2間で、面積は約2.07m<sup>2</sup>である。主軸は、東偏9°である。覆土は、P 1・4は灰黄褐色粘土、P 2は暗灰色粘土、P 3は暗青灰色粘土である。深さは、概ね25cmから30cmで、底面の標高は23.5m前後である。柱痕は確認できなかった。P 3がSD 99・101を切るため、SD 99・101よりS B 2が新しい。

S B 3 (P 1:2区 P 42・P 2:2区 P 73・P 3:2区 P 1・P 4:S P 90)

X・Y 10グリッドで検出した。想定した柱穴は10本で、このうち4本が確認できた。桁行5.1m、梁行3.8mの2×3間で、面積は約19.38m<sup>2</sup>である。主軸の方向は、東偏80°である。覆土は、P 4が暗褐色粘土で、他は不明である。深さは15cmから20cmで底面の標高は23.5m前後である。柱痕は確認できなかった。P 2が、2区SD 2を切ることから、2区SD 2とSD 85より、S B 3が新しい。P 4から須恵器と土師器の細片が出土した。

##### b. 棚列

S A 1 (P 1:S P 120・P 2:S P 117・P 3:S P 112・P 4:S P 111・P 5:S P 134)

V 10グリッドで検出した。想定した柱穴は5本である。長さ5.4mで、主軸の方向は東偏27°である。南西側に延長する可能性がある。覆土は、P 2が灰褐色粘土で、それ以外は褐灰色粘土である。深さは10~22cmで、一定ではないが、底面の標高は概ね23.7mである。P 1から須恵器杯蓋(No.1)が出土した。

##### c. 井戸(S E)

S E 93 Y 10グリッドで検出した。遺構の平面形は上端で南北2.8m×東西2.4mの楕円形を呈し、下端では南北1.9m×東西1.6mの楕円形を呈す。遺構上端の西側は、深さ3~5cmほどの浅いテラス状に平坦面が広がる。

覆土は、大きく3層に分かれる。上半は黒色土層が堆積し、下半は緑灰色土層が厚く堆積する。最下層には黒褐色土層が薄く広がる。上層の黒色土（第1～4層）は、腐植物と緑灰色粘土の小ブロックを含む。下層の緑灰色土（第5層～）は、地山に由来すると見られる粘土が主体となり、上層と同質の黒色土のブロックを少量含む。一部に緑灰色砂を含む。最下層の黒褐色土層の堆積は厚さ5cmほどと薄く、腐植物を多く含み、緑灰色粘土が混ざる。

遺物は、上層の黒色土と下層の緑灰色土の境から須恵器・土師器共に多く出土した。No.3は下層の緑灰色土層から出土した。須恵器は有台杯・無台杯・長頸瓶・甕、土師器は無台碗・鍋が出土した。須恵器無台杯の1点と土師器無台碗1点に墨書きが施される。最下層の黒褐色土と下層の緑灰色土下部の最下層に近い部分から、用途不明の板状や棒状の木製品（No.21～25）が折り重るような状態で出土した。

完掘した底面付近の壁面に、加工痕のある棒状の木が5cmほど飛び出るように刺さっているものを検出した。この棒状の木が井戸の構築に関係するものかを確認するために、断ち割りを行った。その結果、枝などの自然木を多く包含する土層が水平方向に続くことが確認され、刺さっていた木も奥で二股に分かれていることから自然木であると判断した。このため、井戸を掘削する時に地中から出てきた自然木を切り落としたものと考える。

S E59 Y9グリッドで検出した。平面の形状は、南北1.3m×東西1.1mの楕円形で、深さは1.2mである。覆土は、第1層は褐灰色粘土で、第2層から第4層まで暗灰色粘土である。全体的に、しまりが強く、木炭粒を含む。

遺物は、須恵器の壺類と見られる体部の細片と、摩滅した土師器の細片が出土した。

S E145 X12グリッドの調査区中央の最も狭い地点で検出した。南北両側の上端は、調査区外に続いている。検出された範囲では直径1.6mの円形を呈すると見られる。深さは1.8mである。覆土は概ね2層に分かれ、第2層が黒褐色粘土である以外は概ね黒色粘土である。質感は、全体的にしまりが弱く、粘性が非常に強い。地山土の粒と腐植物を多く含む。

遺物は、須恵器の有台杯と長頸瓶、土師器の柱状高台皿底部、白磁皿（No.26～28）等の土器類と板状・摘み状・円盤状の木製品が出土した（No.30～34）。第2層から出土した須恵器長頸瓶の他は、第5層から出土した。

#### d. 土坑（SK）

5区で検出されている土坑は、SK76・106の2基である。

SK76・SD75 Y9グリッドで検出した。南側は調査区外に続いている。平面の形状は、ほぼ直径約1.6mの円形を呈し、深さは約0.4mである。SK76の覆土は、第1層が黒色粘土、第2層が黒褐色粘土、第3層が暗緑灰色粘土である。全体的にしまりが強く、粘性が強い。

遺物は、第2層から多く出土しており、須恵器の無台杯と甕、土師器の鍋と長甕がある（No.35～40）。SD75は、幅21cm、長さ55cm、深さ5cmの浅く三日月状に曲がる溝で、南端でSK76と切り合いを持つ。覆土は、暗褐色粘土である。擾乱の可能性がある。須恵器無台杯（No.41）が出土した。

SK106 W13グリッドで検出した。幅60cm、深度18cmを測り、平面円形の深い土坑である。覆土は、暗褐灰色粘土である。須恵器無台杯が（No.41）出土した。

#### e. 溝状遺構（SD）

SD65・SP66・SP67 Y11グリッドで検出した。SD65は、幅88cm、深さは最大で20cmの溝であ

る。北側の調査区壁へ向かって徐々に浅くなり、2区への延長は認められない。南側は、調査区外に延びる。S P 66・67は、直径約30cm、深さ約15cmのピットである。S D 66の覆土は、灰色から暗赤灰色粘土である。S P 66の覆土は暗赤灰色粘土、S P 67の覆土は黒褐色粘土である。遺構の切り合いかから、S D 65が古くS P 66が新しい。S P 67は、覆土が黒褐色粘土で、S D 65とは異なる様相を示していることから、S P 66・67はS D 65に伴うものでは無いと考えられる。

S D 65東側の立ち上がりから、須恵器有台杯(No.43)と土師器長甕(No.44)が出土した。S P 66からは、須恵器有台杯(No.45)が出土した。

S D 158 Y11グリッドで検出した。幅3.4mで、壁面の立ち上がりに段をもつ溝である。2区S D 3からつながる遺構で、延長4.3mが確認され、さらに北側へ続くものである。南側は、5区調査区南壁付近で深さ5cm前後と浅くなっている。遺構の南端に近いと見られる。5区北側の調査区付近で深さ約45cmとなり、その南側は一段深い平坦面が南へ続く。S E 93・S P 159に切られる。覆土は、暗緑灰色から緑灰色の粘土である。5区調査区北側壁では、土層観察から、2区S D 3と同様、青灰色から暗青灰色粘土である。

遺物は、No.59以外は、北側の落ち込みから出土しており、須恵器の有台杯(No.46)と無台杯(No.47～59)、土師器の無台碗(No.60)と小甕(No.61)がある。須恵器無台杯には、墨書が施されているものがある。

S D 85・S D 92・S D 157 Y10グリッドで検出した。S D 85は、2区S D 2とS D 92に繋がり、2区と5区の境付近で東側に大きく広がる。幅は、S D 85で1.1m、2区S D 2とS D 92部分で、3.0mほどになる。確認された延長は6.3mで、南北方向にさらに伸びるものである。覆土は、上層が黒褐色粘土で、下層が暗緑灰色粘土である。包含層の上面から掘り込まれており、新しい時代のものの可能性がある。須恵器と土師器の細片が出土している。

S D 157は、幅3.4m、深さ36cmで、南北に伸びる。覆土は、オリーブ黒色を呈する粘土で、緑灰色地山土の粒と木炭粒を含む。遺物は、遺構中央から多く出土した。須恵器には杯蓋と無台杯(No.62～66)があり、無台杯の底部外面には判読不明の墨書が書かれる(No.66)。土師器は、無台碗(No.67)と器種不明の細片がある。

S D 157がS D 85・92に切られる。周辺のピット類は、S D 157を切る。

S D 99・S D 101・S D 103・S D 160 X11グリッドで検出した。S D 99とS D 101は概ね直交する。覆土は、S D 101のみ暗褐色粘土で、他は暗青灰色土である。P 100・102はS B 2のP 3・4にあたる遺構である。S D 99・101は、S B 2柱穴のS P 100に切られる。

S D 101から、須恵器無台杯(No.70)が出土した。

S D 71 T14グリッドで検出した。幅71cm、深さ6cmの深い溝である。5区北端から検出した遺構で、周辺にはS P 72以外は遺構は見られない。U14から北側の旧地形は、東側から伸びる尾根先端に当たる微高地であったと見られ、開墾により地山まで掘削されたため、本遺構も上部が削平されていると考えられる。

S D 107・S D 137・S P 108・S P 109 V13グリッドで検出した。南北方向に主軸をもつ延長の長い溝である。S D 107は、幅約30cm、深さ約10cmの深い溝である。S D 137は、幅約40cm、深さ約15cmである。いずれも底面は凸凹が無く平坦である。S D 137が、S D 107に切られ、S D 107は、S P 108に切られる。

2区S D 18は遺構の幅が異なるが、同様の主軸を持つ遺構である。これら3基の溝は、東側の微高

地から、畝状遺構群のある中央低地に向けて緩やかに傾斜している。

S D 107から、須恵器甕（№71）と土師器の細片が出土した。

S D 139・S D 141・S D 144 X12グリッドで検出した。覆土は、S D 139は暗緑灰色土で、S D 141は灰色から黄灰色土である。これら2基の溝は、主軸の方向から、2区S D 4の延長上に位置するが、覆土の様相が異なることから、別の遺構と考える。S D 144は、包含層の上部から掘り込まれる。

S D 141から須恵器の杯蓋（№72）と無台杯の底部の細片が、各1点ずつ出土した。

S D 147 X12グリッドで検出した。覆土は、灰色粘土である。第V層の上面で検出したが、調査区壁の観察から第III b層包含層の中間から遺構の落ち込みが確認され、他の遺構より新しいものと考えられる。遺物は出土していない。S D 147がS P 148に切られる。

S D 150・S D 151・S D 152・S D 154・S D 155 W12・13グリッドで検出した。深度の浅い溝状の遺構である。S D 154の底面は凹凸が顕著なこと、いずれも主軸が概ね並行することなどから、畝状遺構と考える。覆土は、S D 150・152・154・155が青灰色から緑灰色を主体とし、S D 151が灰色とオリーブ黒色を主体とする。

S D 150・154から土師器の細片が各一点、S D 155から須恵器無台杯（№73）が出土した。

S D 105 W13グリッドで検出した。幅40cm、深さ12cmの浅い溝状の遺構である。S D 155との間が、未調査で不明な点もあるが、S D 150を始めとした5本の溝群と同様の主軸で、形態及び規模が類似することから、畝状遺構であると考える。遺物は出土しなかった。

#### f. 柱 穴 (S P)

柱穴に分類した遺構は、全部で101基である。このうち、根固めと柱痕が明確に確認できたものは、20基である。多くは掘立柱建物を形成した柱穴だろうが、建物構成が確認できないものが多い。

覆土は黒色土を主体とするものが多い。他に暗青灰色土を主体にするもの（S P 29・S P 136など）や、灰色土を主体とするもの（S P 15・S P 86など）がある。

S P 54 Y 9グリッドで検出した。南側半分は調査区外に広がり、ほぼ円形の平面形が想定できる。直径58cm、深さ46cmである。柱痕は、黒褐色粘土で、根固は緑灰色ブロックを含む黒褐色粘土である。遺物は出土しなかった。

S P 87 Y 10グリッドで検出した。直径36cm、深さ22cmである。黒褐色粘土の柱痕と、根固は2層に分かれ黒褐色土と緑灰色粘土である。須恵器甕の体部破片（№74）が出土した。

S P 15 Y 7グリッドで検出した。直径31cm、深さ5cmである。覆土は、灰黄色粘土である。須恵器杯蓋（№75）と土師器の細片が出土した。

S P 88 Y 10グリッドで検出した。直径20cm、深さ29cmである。覆土は、暗褐色粘土である。須恵器甕（№76）が出土した。

S P 80・81 Y 9・10グリッドで検出した。S D 157を切る。S P 80は、直径37cm、深さ40cmと深いものである。S P 81は、長さ16cm、深さ10cmである。覆土は、S P 80が黒褐色粘土、S P 81が褐灰色粘土である。

S P 80から土師器の細片が出土し、S P 81から須恵器の無台杯（№77）と土師器の細片が出土した。

## IV 出土遺物

### 1 遺物の概略

坂田遺跡5区では、遺構覆土や包含層から多量に出土した。土器類では、平安時代の須恵器・土師器が多く、中世の遺物も出土している。耕作土や周辺からの表探遺物には、近世の肥前焼と考えられるものが少數ある。この他に、木製品や鉄製品、製鉄に関連する遺物も出土している。

遺構覆土から出土した土器は、器形復元が可能なものは、できる限り図化に努めた。

平安時代の須恵器には、食膳具と貯蔵具がある。食膳具は、杯蓋・有台杯・無台杯の3種類である。貯蔵具は、甕と長頸瓶の2種類である。このうち、杯蓋・甕・長頸瓶は、個体数が少なく、全形が復元できるものは見られない。

須恵器無台杯は胎土の観察から、4種類に分類した。最も多かったのがA類(小泊)としたものである。非常に細粒の白色粒が特徴で、透明粒子と海綿骨針を含むものである。これらのうちの多くは佐渡小泊窯跡群で焼成されたものと考えられ、無台杯全体の19点44.1%を占める。B類(産地A)は、胎土に白色粒子と褐色粒子と骨針を含み、A類と比べるとやや粗い胎土である。器面は丁寧に仕上げられ、ロクロナデによる凹凸はほとんど見られず、底部の切り離し痕も丁寧になで消される。法量は、口径13.3前後、底径7.6cm前後、器高3.9cm前後で概ね一定する。焼成は硬質だが、還元が不十分で底部は酸化状態である。口縁部に重ね焼きの痕跡が明瞭に残る。全体の8点18.6%を占める。C類(産地B)は、1mm前後のやや大きい白色粒と黒色粒が含まれるのが特徴で、焼成は不良で軟質である。底部のみの破片資料で、全形がわかる資料はない。D類は上述した以外のものである。14点32.6%である。

土師器は、食膳具と煮炊具がある。食膳具は、無台碗があり、煮炊具では小甕・長甕・鍋がある。

中世の遺物で、遺構から出土したものは、土師器皿の柱状高台と白磁皿である。他に、包含層から珠洲焼が出土している。

近世以降の遺物は、包含層から出土した肥前焼がある。

### 2 遺物各節

#### 建物跡・柵列出土遺物（No.1）

復元できた建物跡を構成する柱穴で、遺物が出土したものはSB3P3（2区SP1）のみである。2区調査の報告でされている遺物で、口径13.6cmの有台杯の口縁から体部の破片である。柵列の柱穴で遺物が出土したものは、SA1P1（5区P120）からのみである。1は、須恵器杯蓋の体部破片である。内外面にロクロナデを行った後、外面天井部にロクロケズリを行う。

#### S E 93（No.2～25）

3と8と21～25以外は、上層の黒色土層の下部、下層緑灰色土との境付近から出土した。3は、下層の緑灰色土から出土した。8と21～25は、最下層の黒褐色粘土層との境付近、下層の緑灰色粘土層の下部から出土した。

2は、須恵器有台杯の口縁部から体部である。口径12.8cmで、体部は直線的に立ち上がり、内外面はロクロナデによる凹凸が顕著である。

3～10は、須恵器無台杯である。全て内外面ロクロナデ、底部ヘラ切りを行う。3は、口径11.6cmで、口縁が外反する。7は、口径が13.4cmとやや大きく、直線的に伸びる。4・5・10は胎土A類、9は胎土B類である。3・6～8は胎土D類である。

11～13は、土師器無台碗である。11・12の器表は剥離しており、調整は不明である。11の口縁部はロクロナデを行う。13は、口径15.6cm、底径6.2cm、器高5.6cmと大型である。内面ロクロナデ、外面下半部はロクロケズリを行う。底部外面は丁寧なナデを行い平坦である。

10・13の底部外面に、墨書が書かれる。10は、摩滅しており不明瞭であるが、書体から「猿口」と考えられる。13は、判読不明である。

14・15は、須恵器長頸瓶である。14は、体部から底部が残り、包含層から出土したものと接合した。内外面ロクロナデを行い、内面はロクロの凹凸が顕著に残る。底部内面は、あばた状の凹凸が著しい。肩部外面は、降灰を受け自然釉が薄くかかる。15は、口縁部の破片で内外面ロクロナデを行う。口縁端部は、外端を外側につまみ出す。

16から18は、須恵器甕である。16・17は、外面の叩き目は平行で、内面の當て具痕は同心円である。18は、上半と下半が接合しないものの、胎土と調整から同一個体と判断した。口径34cm、残存高は40.3cmである。口縁部から頸部は、ロクロナデの凹凸が顕著である。体部外面の叩き目は擬格子で、内面の當て具痕は上半部が同心円で、下半部は擬格子である。体部外面には平行タタキの後に、輪積み痕を消すためのナデが部分的に行われる。体部の所々で大きく焼膨れをおこしている。

19・20は土師器鍋である。19は、口径42cm、残存高13.2cmである。口縁部はロクロナデにより外反し、端部は丸く収める。体部の調整は、外面は格子タタキ、内面は同心円當て具を行う。体部外面に煤が付着する。20は、内外面にロクロナデを行う。口縁端部は外反して丸く収める。

21～25は、板状もしくは棒状の木製品である。木材を割った分割材と考えられる。木取りは、22のみ芯持ちで、他全ては芯去りである。上下に切断面を残す。

#### S E 145 (No.26～34)

29のみ、第2層の黒褐色粘土から出土し、他は第5層の黒色粘土層から出土した。

26は、土師器皿の柱状高台である。底径は5.8cmである。内外面はロクロナデ、底部は回転糸切りを行う。外面は、変色し黒色を呈する。

27は、白磁の有台皿である。口縁部と底部は接合しないが同一個体と見られる。口径12.0cm、底径5.8cm、器高3.6cmである。内面と外面高台付近まで施釉される。高台は、逆台形状にケズリダシを行い、内端接地である。

28は、須恵器有台杯の底部である。体部外面はロクロナデ、底部内面は不定方向ナデ、底部外面はヘラ切りした後に不定方向のナデを行う。高台は、やや内側に付き、内端接地である。高台径は8.2cmである。

29は、須恵器長頸瓶の肩部である。内外面ロクロナデを行う。内面はロクロナデによる凹凸が顕著である。

30～32は、板状木製品である。裏面と側面はほぼ平坦であるが、表面のみに、鉈状工具で削ったような深さ1mmにも満たない浅い凹みが不規則に並ぶ。33は、摘み状木製品である。両側面に凹みを

持つ。34は、円盤状木製品である。幅31.6cm、厚さ2.8cmである。厚さは、端部が1cmで、中央が2.8cmと、中央が厚く上面に膨らむ。裏面はほぼ平坦で、被熱のため炭化している。表面は、鑿状工具で削ったような加工痕が残る。中央に、一辺1.2cmの方形の穿孔がされる。

#### S K 76 (No.35~40)

35~38は、須恵器無台杯である。37以外は、胎土A類である。37は、内外面にロクロナデを行い、外面はロクロナデによる凹凸が顕著である。口縁端部がやや外反する。

39は、土師器鍋の体部である。にぶい橙色を呈し、外面は平行叩き、内面はヨコナデを行う。

40は、土師器長甕の底部である。調整は磨耗していて不明である。底径は9.0cmで、体部外面は変色し、黒褐色を呈する。

#### S D 75 (No.41)

41は、須恵器無台杯である。口径13.2cmで、内外面ロクロナデを行う。体部から口縁端部まで直線的に立ち上がる。

#### S K 106 (No.42)

42は、須恵器無台杯である。口径13.0cmで、内外面ロクロナデを行う。口縁部はやや内傾し、口縁端部を丸く収める。

#### S D 65 (No.3・44)

43は、須恵器有台杯である。口径10.2cm、底径5.8cm、器高5.1cmで全形の2/3ほどが残る。有台杯で、器形が完形に復元できたものは43のみである。内外面ロクロナデ、底部ヘラ切りを行う。高台は、外端接地である。

44は、土師器長甕の底部である。底径9.4cmで、体部内面ロクロナデ、体部外面の調整は劣化のため不明である。底部は回転糸切りを行う。底部は、厚さ2mmと薄い。

#### S P 66 (No.45)

45は、須恵器有台杯である。口径12.5cmで、体部はほぼ直線的に立ち上がる。内外面はロクロナデを行い、凹凸が顕著である。

#### S D 158 (No.6~61)

59以外は、すべて北側の落ち込みから出土した。

46は須恵器有台杯である。口径13.0cmで、直線的に体部が立ち上がり、口縁端部は外反気味である。

47~59は、須恵器無台杯である。全て、内外面ロクロナデ、底部ヘラ切りである。48・49・53・59は胎土A類、52・54~58が胎土B類、51が胎土C類と考えられる。その他は不明である。当遺構から出土した無台杯のうち、半数に墨書きが施される。墨書きは、53・56が「猿口」、54・55が「主」カ、57は判読不明、58が「田」カが書かれる。

60は土師器碗である。底部のみの破片で、劣化が激しく調整がほとんど残っていないため詳細は不明である。底径は、5.6cmである。

61は土師器小甕である。口径10.9cm、底径5.6cm、器高8.6cmで全形の2/3ほど残る。劣化が激しく調整が不明な点もあるが、内外面ロクロナデで、口縁部は屈曲して垂直に引き伸ばす。底部内面はロクロナデの凹凸が顕著である。底部外面は摩滅していて調整は不明である。外面の口縁から体部までは、変色し暗褐色である。

#### S D 157 (No.62~67)

62・63は須恵器杯蓋である。62は、体部のみの破片である。内外面にロクロナデを行う。63の口径は14.2cmである。内外面ロクロナデで、口縁端部が屈曲してほぼ垂直に下がる。

64~66は、須恵器無台杯である。64は、口径12.2cm、底径7.2cm、器高3.6cmである。口縁部が外反し、内面のロクロナデは凹凸が顕著である。体部は、直線的に立ち上がり、底部外面はややくぼむ。65は、底径7.5cmの底部のみの破片である。66の底部には、墨書が施されているが、判読はできない。66が胎土A類、他は不明である。

67は土師器無台碗である。劣化が激しいが、内外面はロクロナデ、底部は回転糸切りを行う。

#### S P 83 (No.68・69)

68は須恵器有台杯である。口径14.5cmで、内外面はロクロナデを行い凹凸が顕著である。体部は直線的に立ち上がる。

69は須恵器無台杯である。底径8.4cmで、劣化のためロクロナデ調整はほとんど残っていない。底部はヘラ切りを行う。胎土C類である。

#### S D 101 (No.70)

70は須恵器無台杯である。口径13.2cm、底径9.0cm、器高3.5cmである。内外面はロクロナデで、底部はヘラ切りを行う。体部の立ち上がりは急である。

#### S D 107 (No.71)

71は須恵器甕である。内面は格子当て具で、外面の調整は、降灰を受けて調整は不明である。

#### S D 141 (No.72)

72は須恵器杯蓋である。体部のみの破片だが、摘みの付け根が一部残る。内外面はロクロナデで、天井部外面はロクロケズリを行う。天井部外面のケズリは丁寧で、ほぼ平坦である。

#### S D 155 (No.73)

73は、須恵器無台杯である。底部はヘラ切りを行い、底径は7.8cmである。胎土B類である

#### S P 87 (No.74)

74は須恵器甕である。外面は擬格子タタキ、内面はロクロナデの後にタテハケを行う。

#### S P 15 (No.75)

75は須恵器杯蓋である。内外面ロクロナデ、天井部外面にはロクロケズリを行う。

#### S P 88 (No.76)

76は須恵器甕である。外面は擬格子タタキ、内面はロクロナデの後タテハケを行う。内面は還元色を呈するのに対し、外面は酸化色を呈する。74と76は、調整と胎土から同一個体の可能性がある。

#### S P 81 (No.77)

77は、須恵器無台杯である。口径12.8cmで、内外面はロクロナデを行う。体部は直線的に立ち上がる。  
包含層出土遺物 (No.78~114)

78~80は須恵器杯蓋である。78・79は、内面にロクロナデ、天井部外部にロクロケズリを行う。80は、口径15.0cmで、口縁端部が内側に屈曲し、端部を丸く收める。

81~84は須恵器有台杯である。81は、高台径は7.9cmである。高台の高さは1.5cmを測り、他の有台杯よりやや高く、外端接地である。83は、高台が欠損している破片である。内面はロクロナデ、底部はヘラ切りを行う。還元が不十分でにぶい褐色を呈する。

85~95は、須恵器無台杯である。92・93・95以外は、全て胎土A類である。93は底部と体部の境に明瞭な段ができる。94は、口径12.0cm、底径7.8cm、器高2.5cmである。内外面はロクロナデで、外面はロクロナデの凹凸が顕著である。底部外面はヘラ切りを行い、「禾」カの墨書きが書かれている。95は、底径7.0cmで、底部はヘラ切りを行う。底部外面に、「猿口」の墨書きが書かれるが、軟質のため、器面が磨耗していて墨書きの遺存状態は悪い。

96~98は、土師器無台碗である。97は、口径14.2cm、底径6.2cm、器高3.8cmである。外面はロクロナデの凹凸が顕著で、内面は劣化のためロクロナデはほとんど残っていない。底部は回転糸切りである。

99は須恵器長頸瓶の肩部である。内外面はロクロナデを行う。内面はロクロナデによる凹凸が顕著である。肩部外面に、降灰による自然釉がかかる。

100・101は、須恵器甕の体部である。外面は平行タタキ、内面は同心円当て具である。

102・103は、土師器鍋である。102は、口縁部から頸部の小片で、口縁端部は面を持つ。103は体部である。調整は外面は平行タタキ、内面は同心円当て具である。

104~110は、株洲焼である。片口鉢の口縁形態から、吉岡氏の編年（吉岡1994）のⅢ期～Ⅳ期と考えられる。

104は、壺類の口縁部と考えられる。口縁端部は、下に屈曲する。

105は、壺類もしくは瓶類の底部である。体部の内外面はロクロナデである。内面のロクロナデの凹凸が顕著である。体部外面は、ロクロナデの後に櫛描きにより施紋される。施紋の下部は、ナデにより消される。底部の切り離しは回転糸切りである。

106~108は、甕もしくは壺類の体部である。外面に平行タタキ、内面に当て具痕が残る。106・108のタタキ目は3cmあたりに11本、107は3cmあたり10本である。

109・110は、片口鉢である。内外面はロクロナデを行う。109の卸し目は、幅1.8cmに14本で1単位である。口縁端部の面は外傾し、口縁部の形態からⅢ期の所産と考える。110の卸し目は、8本以上で1単位となる。口縁端部は、水平な面を持ち先端を突出させる形態で、Ⅳ期と考えられる。

111は肥前系陶器の皿である。口径11.0の小型の皿である。胎土はにぶい褐色を呈し、内面から口縁部外側にかけて灰色の釉薬を施す。

112~113は、鉄関連遺物である。包含層上面から出土しており、時期は不明である。

112は、鎌と見られる。長さ7.9cm、幅2.6cm、重さ17gである。上下は欠損する。

113は、用途不明の鍛造製品である。長さ11.6cm、幅1.3cm、重さ28gである。下部に直径0.5cmの穿孔がある。上部は欠損する。

114は、鍛冶滓と考えられる。重さ42gで、酸化土が少量付着する。メタルの反応はない。

# V 総括

## 1 坂田遺跡の平安時代の様相

柏崎平野における平安時代の集落跡は、多くの事例が挙げられる。坂田遺跡が所在する別山川流域では、2箇所の区域での遺跡の分布が認められる。刈羽村枯木遺跡や北田遺跡のある赤田・吉井周辺と、刈羽村払川遺跡や西山町宮ノ前遺跡のある刈羽村西谷・西山町北野周辺から坂田・二田地区周辺が挙げられる。西山町周辺は、8世紀後半から10世紀前半にかけて、別山川左岸の沖積地で遺跡の数が増加し柏崎平野北部の中核的な地域となった可能性がある。

### 1) 坂田遺跡出土古代土器の編年的位置付け

坂田遺跡では、平安時代の遺物が溝と井戸からまとまって出土した。これらの一括遺物の編年的位置付けを行うに当たって、定量出土している須恵器無台杯、特に胎土A類とした佐渡小泊産と考えられる遺物を中心に行った。

記述に当たっては、前回の発掘調査区である2区と併せて記述する際、前回調査の遺構・遺物番号の前に、2区を付し、5区に関する遺構の記述では、特に明示しないこととする。また、両調査区を跨いで延長が確認できた2区SD3と5区SD158は、SD158として記述を行うこととする。

坂田遺跡で出土した土器は、食膳具には、杯蓋・有台杯・無台杯・無台碗がある。貯蔵具は長頸瓶・甕・煮炊具は小甕・長甕・鍋・甑が出土している。食膳具では、須恵器食膳具が多く、土師器食膳具は極少量である。

器種構成は、須恵器食膳具を主体に、土師器食膳具・煮炊具・須恵器貯蔵具が一定量伴う構成である。出土土器の総数のうち63.53%が須恵器食膳具で構成され、須恵器無台杯だけで43.65%を占める。この他の器種は、土師器食膳具は無台碗のみで8.29%、須恵器貯蔵具が13.81%、土師器煮炊具は14.36%である。

胎土A類の佐渡小泊産と考えられる無台杯の中では、口径12~13cm、底径7~8cm、器高3cmの資料が多い。口径と器高はほぼ一定だが、底径が7cm前後と8cm前後の2種類が確認できる。2区SD1では底径8cm前後が主体となり、小泊窯跡群の中でも古い下口沢窯跡に見られる資料である。SD158では、胎土A類では下口沢窯跡に類似する資料が多く、胎土D類では底径7cm前後のものが多くなることから、2区SD1より新しくなると考える。SE93は、出土した土器の様相からSD158とほとんど変わらない時期と考えるが、遺構の切り合いからSD158より新しい。

これらの一括遺物を、春日氏の編年（春日1999）と、佐渡小泊窯跡群の編年（坂井他1991）を基にして検討する。下口沢窯跡は、9世紀前葉から中葉に相当する窯跡である。新潟古代土器編年では、それまでの食膳具の大半を須恵器が占める様相に変化が見られ、土師器・黒色土器食膳具が定量出土する時期とされている。また、佐渡小泊産の須恵器が越後国内に流通し始める頃とされる。坂田遺跡では、食膳具では須恵器が多く、土師器は少數であり黒色土器は出土していない。須恵器無台杯では、佐渡小泊産と考えられる製品と、在地産と考えられる製品が定量出土している。

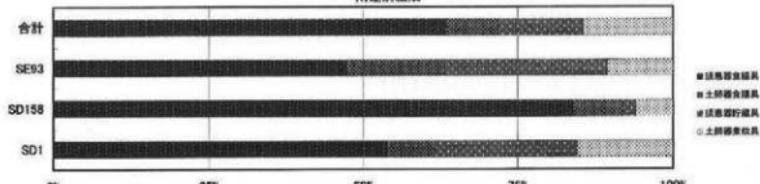
坂田遺跡の出土遺物は、9世紀前半の八幡林遺跡I区出土土器や、井ノ町遺跡SK12出土土器に類似が見られ、宮田遺跡SD346のように食膳具の大半を土師器無台碗が占める9世紀後半には下らない

△	食器具						貯蔵具			煮炊具				合計
	須恵器				土器		須恵器		土器					
	杯 蓋	有 台 杯	無台杯		無 台 碗	長 頸 瓶	壺	小 豆	長 甕	鍋	瓶			
胎 土	A	B	C	D										
SD1	2	1	3(0)	1(0)	0(0)	0(0)	1(0)	2	1	0	2	0	0	13
SD158	3	4	18(5)	8(7)	1(0)	8(1)	4(1)	0	1	2	0	1	0	50
SE93	0	1	3(1)	1(0)	0(0)	4(1)	3(0)	2	3	0	0	2	0	19
合計	15	21	35(9)	11(7)	2(0)	31(2)	15(1)	12	13	4	14	7	1	181

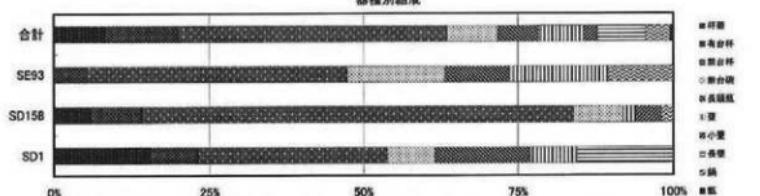
\*括弧内の数字は各土器の点数を示す。

第1表 坂田遺跡出土土器数量表

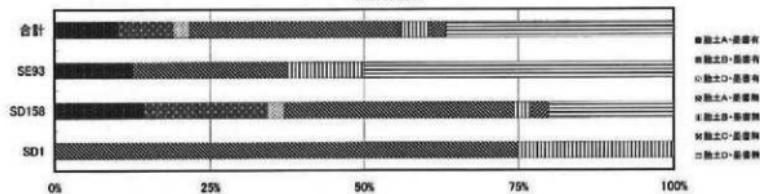
用途別組成



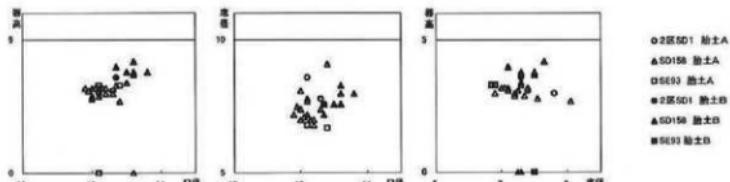
器種別組成



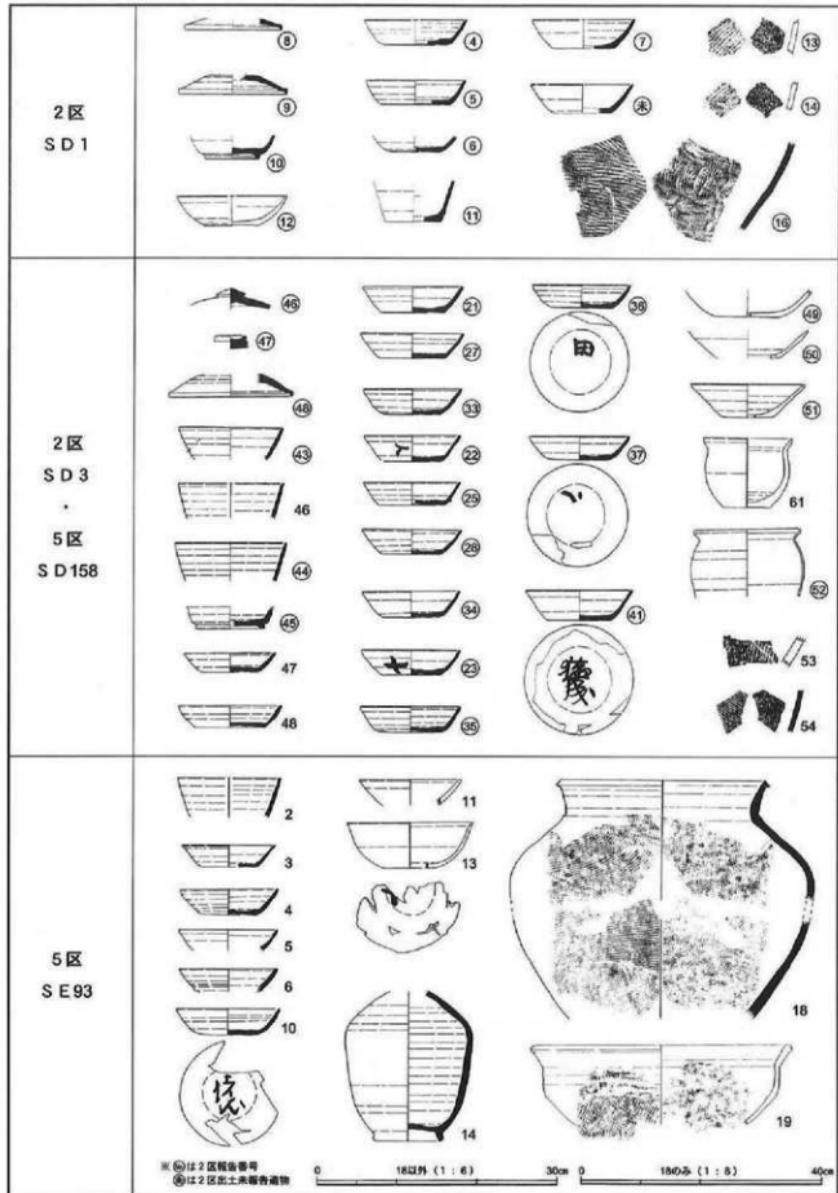
無台杯組成



第3図 坂田遺跡出土土器組成



第4図 坂田遺跡 出土無台杯 法量分布図



第5図 坂田遺跡2区・5区主要遺構出土遺物

と時期と考える。宮ノ前遺跡のⅠ期では、食膳具における須恵器の比率が高く、須恵器食膳具のほとんどが佐渡小泊窯跡群のカメ畑窯跡に類似することから、坂田遺跡は宮ノ前遺跡の前段における遺跡と考える。

## 2) 遺構の性格と出土土器の様相

S D 1は、黒褐色粘土とオリーブ灰色粘土を覆土に持つ、幅の広い溝である。5区に延長は確認できず、2区の北側に延長するとみられる。住居跡の可能性もあるが調査区が狭く不明な点が多いことから、検出した平面と断面から溝として分類した。出土している土器は、須恵器の杯蓋・有台杯・無台杯・甕・瓶類と、土師器の無台碗・長甕がある。須恵器無台杯の形態から、9世紀前葉頃と考える。

S D 158は、青灰色から緑灰色の地山に類似する粘土を覆土に持つ、幅の広い溝である。遺構の配置から集落域と耕地を区画した溝と考える。坂田遺跡の中で最も多く遺物が出土しており、出土土器の総数181点中50点が出土した。食膳具を中心廃棄したと考えられ、出土した土器の92%が食膳具で、このうち須恵器無台杯が70%を占める。坂田遺跡から出土した須恵器無台杯の79点中35点44.30%がS D 158から出土している。遺物は、遺構床面からの出土は無く、床面より少し浮いた状態で出土している。溝を掘削してから、一定期間空いて廃棄したものと考える。

S D 158は、北側が未調査の遺構で、今後の調査が行われたとすれば、さらに多くの遺物が出土すると考えられる遺構である。今回出土した土器には、完形に復元できるものではなく、出土土器の大半を占める須恵器無台杯は、全て口縁部が一部欠損するものばかりである。現時点では、調査したS D 158からこの欠損した部分の口縁部は確認できなかったため、口縁部を一部割ってから廃棄していた可能性が考えられる。

出土した土器は、全ての器種において散在するように分布し、据え置いたような出土状況は確認できなかったことから、遺構内に区別なく廃棄したと考える。

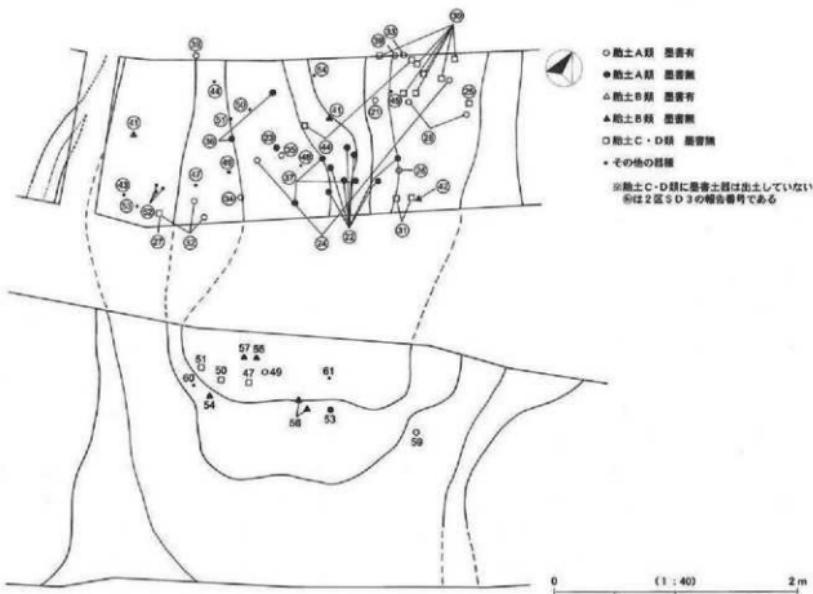
また、墨書き土器が多く出土し、S D 158から出土した無台杯35点中13点に墨書きが施されている。書かれている文字は「猿口」5点、「主」2点、「田」2点、「十」「人」各1点、判読不明のものが1点である。古代以来の日本の農耕儀礼では、山の神を農耕神・田の神(歲神)として迎え入れるところから始まるという観念が一般的であったとされている。その際に、水田周辺やその境界付近で山の神を迎える祭り(祭礼)と宴を行うが、これと「猿口」の墨書き土器の出土地点を関係させるならば、「猿口」の墨書き土器は、山の神やその使者の代役として墨書きされたという可能性があると考え、山の神を耕地に迎えるための祭宴で使用された可能性があると指摘している(田中2007)。

これらのことから、S D 158の土器群は他の一括遺物とは異なった性格を持ち、食膳具を中心廃棄した状況と墨書き土器の量から、祭祀に使われたものと考える。しかし「猿口」の墨書きが示すものが何であるかは現時点では不明であり、資料の増加を待ってさらに検討する必要がある。

S E 93の一括遺物は、Ⅲ章で述べたように、上層の黒色土層の下部から出土した。上層の黒色土は徐々に堆積したものと考え、上層の黒色土が堆積してゆく過程で廃棄されたと考える。食膳具・貯蔵具・煮炊具が一通り出土し、器形が復元できる個体は少ないことから、ゴミ捨て場としての性格を持つと考える。

## 3) 胎土B・C類の土器について

坂田遺跡2区・5区で出土した須恵器無台杯は、胎土の特徴から4種類に分類した。



第6図 坂田遺跡5区 S D 158・2区 S D 3出土遺物器種別分布図

胎土B・C類に分類した製品は、在地産か他地域からの搬入品かは、現時点で該当する窯跡が確認されていないため不明である。

周辺で調査が行われている須恵器窯跡は、柏崎市の雨池古窯跡のみで、この他に、刈羽村枯木A遺跡から刈羽窯跡と考えられている遺物が出土している。胎土B・C類とした遺物は、これら2箇所の窯跡の製品と比べても、胎土が異なることから、別の窯跡の製品と考えられる。

胎土C類に分類した遺物は、底径7.0cmと8.4cmの底部破片が2点のみで、SD 158とSP 83から出土した。胎土D類のその他不明の窯跡に分類することも可能であったが、1mmほどのやや大きい白色粒と黒色粒を含む胎土が特徴で、他のものと明確に異なる胎土であったため分類した。軟質で器壁の劣化が激しいため、底部の切り離しはヘラ切りであること以外は不明である。共伴して出土した胎土A類の年代から、9世紀前葉から中葉のものと考える。

胎土B類に分類した遺物は、細片等を含めると、全部で15個体確認できる。法量は1種類で、口径13cm、底径7.7cm、器高3.8cmである。ロクロナデを丁寧に行い、器壁の凹凸はほとんど見られない。底部の切り離しはヘラ切りで、切り離し痕をナデ消している。重ね焼きを行い、口縁外端部は黒褐色から暗赤褐色に変色する。底部の還元は不十分で、にぶい橙色の酸化色である。器形や調整、底部の酸化状態などから、全て同時に焼成された製品と考える。

確認された器種は、無台杯のみで、他の器種は確認できない。15個体の無台杯のうち、7個体に墨書きが施されており、これらは全てSD 158から出土している。

胎土B類の無台杯はSD158の他に、2区SD1・SE93・SD155から出土している。2区SD1では、計4点出土しており、2区No.7との他の未報告資料に、口径12.6cm、底径7.2cm、器高3.5cmのものが1点と、口径12.8cmの口縁部と、底径7.8cmの底部の破片が各1点出土している。SD158からは8点、SE93からは、底部破片と細片の2点が出土している。SD155からは、底部破片が1点出土した。

同様の胎土の遺物は、現時点で坂田遺跡以外では確認されないことから、極限られた狭い範囲で流通していたと考える。

胎土B類は、胎土A類のNo.53に書かれている「猿口」の墨書きが、胎土B類のNo.56・2区No.42にほぼ同じ書体で墨書きされていることから同時期のものと考えられ、共伴する胎土A類の年代から9世紀前葉から中葉の製品と考える。ただし、今回確認できた遺物は同時に焼成した製品と考えられることから、9世紀前葉から中葉の間で一度のみ操業した窯跡と考える。

これらの製品の技術系譜は、現時点では不明である。9世紀前葉から中葉にかけての周辺の窯跡では、類似する窯跡は確認できない。越後の須恵器の特徴をみると、大きく北陸系のものと東海・信濃系のものに分けられるが、胎土B類はどちらにも属さないものと考える。周辺地域では類似する窯跡が確認できることから、遠隔地からの技術移入が行われた可能性が高いと考えるが、現時点では不明である。

古代越後の土器生産は、8世紀前半に急速に発展し、須恵器の杯類が日常の食膳具として急速に普及する（坂井1999）。生産規模はそれぞれ異なるが、郡ごとに生産が行われたとされ、律令体制下での生産・流通は、郡司層が関与していると考えられる（坂井1989）。9世紀前半になると、佐渡小泊窯跡群の製品が流通し始め、消費遺跡では在地産と佐渡小泊産の須恵器が共伴して出土する。9世紀後半になると、佐渡小泊産須恵器の流通量が増え在地産須恵器を凌駕していき、在地での須恵器生産は土師器へ移行する。この背景には、在地窯の経営主体であったとされる郡司層の衰退が考えられる。操業年代を9世紀前葉から中葉と想定した胎土B類を焼成した窯跡は、在地における須恵器生産の最終段階に操業された窯跡と考える。経営主体は、郡司層の衰退にともない力をつけてきた在地の領主層などが考えられるが、その生産規模は小さく流通範囲も狭いと考える。

現時点で、胎土B類を焼成した窯跡は確認されておらず、坂田遺跡では、特にSD158の祭祀に関わる製品として胎土B類の無台杯を使用したと考える。

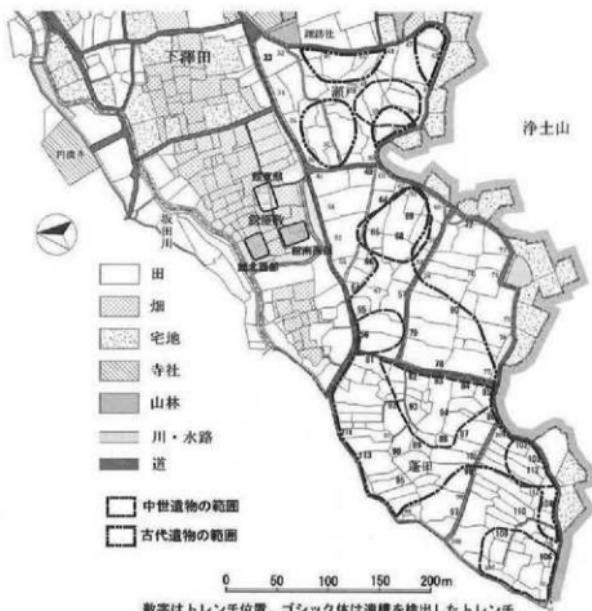
## 2 試掘調査と採集遺物から見た坂田遺跡

坂田遺跡は東西300m、南北780mの約130,000m<sup>2</sup>という広大な遺跡範囲が推定される。坂田遺跡における2次にわたる本発掘調査は、遺跡の南端部分のごくわずかな範囲を対象としたものであった。坂田遺跡では、弥生時代以降、中世に至る様々な時代の遺物が採集されている。また、は場整備事業に先立ち、坂田遺跡の広範囲で試掘調査も行った。これら本発掘調査以外の資料は、今まで公表する機会を得なかったものであるが、坂田遺跡の動向を検討する上で欠かせない資料である。ここで、これらの資料を提示したい。

### 1) 坂田遺跡試掘調査の成果

#### a. 調査成果の概要

試掘調査は上沢田遺跡の確認調査とともに行われた。対象となった範囲は、坂田遺跡の想定範囲の



第7図 坂田遺跡試掘調査・遺物採集地点配置図

概ね南半分にあたる、主要地方道高浜・堀之内線の南側部分で、対象面積は約96,000m<sup>2</sup>であった。調査トレンチは第32トレンチから第114トレンチが該当する。第7図は明治年間に作成された土地更正図に、試掘トレンチの位置と、次項で述べる表採遺物の採集地点を記したもので、図中の数字は試掘トレンチの位置を示す。坂田遺跡は字下沢田・瀬戸・蓬田に広がりを見せ、試掘調査は字瀬戸・蓬田において行った。試掘調査の成果は第2表の通りである。全83トレンチのうち、58カ所で遺構もしくは遺物が確認された。検出された遺構にはピット・土坑・溝等がある。ピットは直径20cm~40cm前後の円形のものである。土坑には、径1m前後の隅丸方形のものと、直径1mを超える円形の井戸となりうるものがある。溝は、幅30~40cmの細いものと、幅1m以上のものがある。遺構覆土の掘削は行っていないため、それぞれの遺構の所属時期は不明である。

#### b. 試掘調査出土遺物（第8図）

試掘調査では多量の遺物が出土しており、特に古代と中世の遺物が多く出土している。また、土師器の小片も多いが、これらは摩滅が著しい小片が多い。古墳時代に遡る可能性もあるが、時期の特定に至るものは少ない。ここでは、時代や時期が特定されそうな遺物を中心化した。

古代の遺物は19点を図化した。1~6は須恵器杯蓋である。1・2はボタン状の摘みをもつ。2は天井部に広くクロケズリを行い、内面に籠記号が施される。3・5は天井部から肩部にかけて広くクロケズリを行う。4~6の口縁端部の折り返しは短い。7~9は須恵器無台杯である。7・9は

Tr	吉墳・古代	中世	製鉄	道標
33				ピット5
37	須有台杯、土小			
39	土無台碗・甕			
40		珠片口		
42	土無台碗			
45	土甕・小			
46	土小			
47	土小			
48		珠片口V期		
49			横1	
54	土小		ピット3、土塙1	
55	須甕・土小		ピット4	
56	土小	土塙2	ピット2	廣大
57	須無台杯、土小多			
59	土小6	白研皿底	般泥津	
61	須甕		般泥津	
64	土小		廣大	
65	須甕		廣大	
66	土多(赤彩有り)		ピット3、土塙1	
67	須蓋・無台杯4、土			
68	土小4		廣大	
69		珠片口	般泥津	廣小
70	須甕、土小	珠片・甕	般泥津	
72	須無台杯			廣大小
75	土小			
77	須無台杯・甕、土無台碗・小			
78	土小多		ピット1	
79			ピット1	
80	須甕、土小3		廣大?	
81	土小		ピット3、土塙1	
82	珠甕		廣小	
83	須甕、土小	須甕・甕甕	廣大、力形土坑	
84	須甕、土小	越前口	般泥津	廣大?
85	土小	珠甕、白研皿	般製品	廣大小
86	土小		ピット1	
87	土小9	須蓋4・片口	ピット3、廣中	
88		須甕1	ピット3、廣小	
89	須無台杯		ピット4	
90	土小・土小		ピット2、廣小	
91	須甕、土小		般泥津	
92	土小		廣小	
93			廣中・大	
94			土塙・廣小	
95	土小		ピット1	
97			ピット1	
99	土小2		ピット4	
100			ピット2、廣小	
102	須無台杯、土小	須蓋・甕・片口、須甕、青研皿	ピット2、土塙1	
103	土小	珠甕	ピット1、土塙1	
104	須蓋・無台杯、土小		ピット5、土塙1	
105	土小			
106	土小	須口・呑口	ピット2	
108	土小			
109		珠甕	ピット3、廣小	
110			ピット2、廣	
112	須蓋・有台杯、土小	須蓋・片口	ピット4	
113			ピット2、廣小2	
114	土小		廣中	

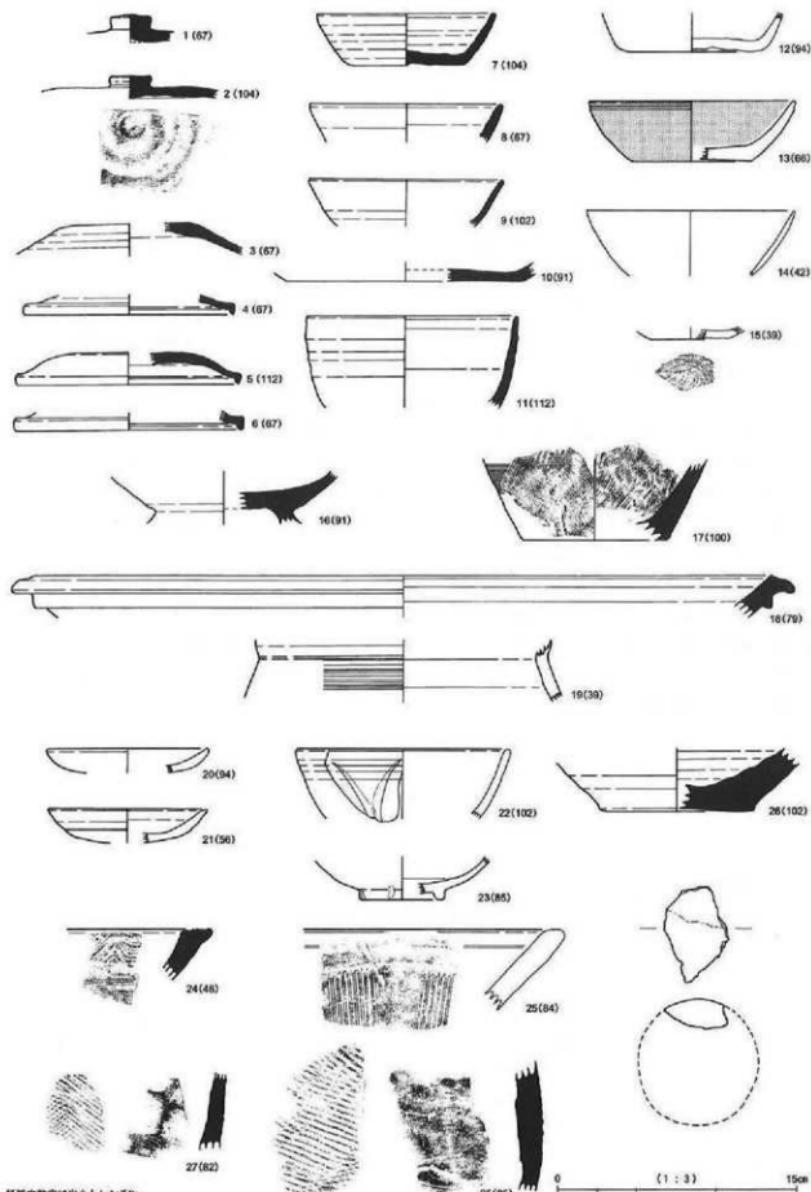
\* 土: 土師器 瓢: 水差器 瓢: 瓢箪 宽: 宽器 瓷: 小・小片

第2表 試掘調査結果一覧表

体部と底部の境に沈線が巡る。22は青磁碗で、体部に片切彫による連弁紋を持つ。23は白磁皿で、底部内面に圓線が巡る。施釉は高台内部に及ぶ。24は珠洲の片口鉢で、口縁端部は若干内傾し、波状紋が施される。25は越前の擂鉢である。赤褐色を呈し、内面に幅29mmに9目の鉤目が深く施される。26・27は珠洲甕で、26は底部の破片である。底部の糸切り痕は消される。27は体部破片で、外面にやや細めの叩き具痕が綾杉状に並ぶ。28は珠洲甕の体部である。焼成は軟質で、外面の叩き具痕は幅が広い。中世の遺物にも、時期差が認められる。土師器皿は13世紀から14世紀代に位置付けられ、白磁皿は13

佐渡小泊窯産とみられる。9は7に比べて器壁が薄く、口縁部が大きく開く。8は灰白色を呈し、器壁が厚く、体部の開きは小さい。10は、須恵器の無台盤か。底径12cm前後と大型で、外面の底部全面と体部下半にヘラケズリを行う。内底面には不定方向のナデを行う。11は須恵器有台杯で、口縁部は内湾気味に立ち上がる。佐渡小泊窯産と見られる。12・13は土師器無台杯である。12は外底面がヘラ切り未調整で、体部はわずかに開きながら立ち上がる。13は外面に薄く赤彩が残る。口縁部は内湾し、外面の口縁端部の下が窪み、凹線状を呈する。底部外面は摩滅により不明瞭であるが、回転糸切りを行っているようである。14・15は土師器無台甕である。いずれも焼成は良好である。14は、器壁が薄く、外面体部下半にヘラケズリを行う。16は須恵器壺の底部である。高台は太く、外側に大きく開く。体部の立ち上がりは丸みを帯びて大きく開き、外面にロクロケズリを行う。17は須恵器瓶類と見られる。外面体部にカキメを施した後、体部下端にヘラケズリを行う。内面は全体に縦位のハケメを施す。18は須恵器甕の口縁部である。口径45cm前後の大型のものである。口縁端部は外側に引き出し、その下に一条の突帯を巡らす。19は土師器長胴釜の頸部である。ロクロ成形によるもので、体部上端にカキメを施す。これら、古代に属する遺物には、坂田遺跡5区などとほぼ同時期にあたる9世紀前半代のもの他に、2の須恵器杯蓋、12・13土師器無台杯などの8世紀中葉から後半頃に位置付けられるものがある。

中世の遺物は10点を図化した。20・21は土師器皿である。いずれも手づくね成形によるものである。20は体部と底部の境が不明瞭で、口縁端部は内湾する。21の口縁部は、ヨコナデを行うことにより薄くなり、



括弧内数字は出土トレンチ番。

第8図 坂田遺跡試掘調査出土遺物

世紀頃の所産と見られる。青磁碗は14世紀中葉から15世紀前半頃のものと見られる。珠洲は壺の体部破片が吉岡氏の編年のⅢ期からⅣ期頃、片口鉢がⅧ期と見られる。越前の櫛鉢は16世代と見られる。

これら、土器類の他に製鉄に関連する遺物も出土している。29は轆の羽口の破片である。直径は7.5cm前後に復元され、外面に調整痕は見られない。胎土に径2mm前後の礫とスサを少量含む。外面の一部が被熱により黒色に変色する。この他に少量であるが鍛冶滓も出土している。

### c. まとめ

坂田遺跡の試掘調査では、古代では8世紀後半頃から9世紀前半の遺物が、中世では13世紀代から16世紀代までという、時期幅がある遺物群が確認された。これらの遺物を古代と中世に分けて、その出土地点のまとまりを整理したのも第8図に記した。古代に属する遺物は、対象地の西半部に大きなまとまりがあり、遺物の出土量も多い。今回の発掘調査区である5区は、この遺物出土範囲の西南端に辺り、南側に丘陵の裾が近接することから、9世紀代の集落の縁辺部に近いものと見られる。中世の遺物は、数トレンチでまとめて出土する傾向を見て取ることができる。また、5区調査区の中で、中世の遺物が出土したSE145付近にもまとまりがあり、発掘調査の成果と整合する。古代と中世の遺物出土範囲のあり方は、それぞれの時代における集落形態の違いを反映している可能性がある。ここでは検出された遺構の時期が明らかとなっていないため、遺物と遺構の関係については検討を行わなかった。今後は、遺構の時期の検討により、さらに遺跡の様相を明らかにできるであろう。

## 2) 坂田遺跡（“館屋敷”）採集の遺物

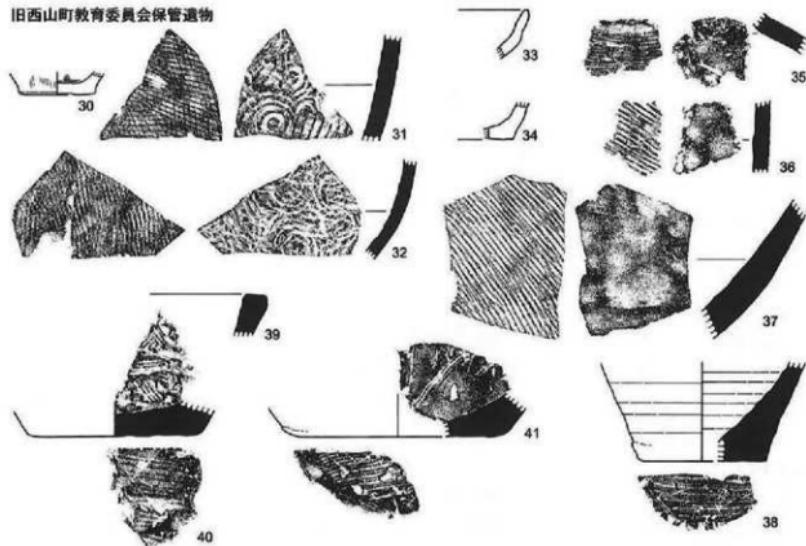
柏崎市西山町坂田字下澤田には、地元で“館屋敷”と俗称される区域がある。坂田川左岸で、現集落域よりもやや下流（南西）側に位置する。“館屋敷”的地名は、この周辺に中世の館跡があることを想起させるが、すでに鳴海忠夫氏が「坂田館跡」として紹介しているところである〔鳴海1988〕。その後、同氏は明治期の旧土地更正図をもとに館の構造を考察し、採集した遺物から存続時期を検討している〔鳴海1992〕。“館屋敷”的発掘調査は実施されていないため、実際の遺構を検出するには至っていない。しかし、遺物が多く採集されており、遺跡の状況を垣間見ることができる。本項では、旧西山町教育委員会で保管されていた過去の採集遺物と平成20年度に当市教育委員会が採集した遺物を紹介しておきたい。

### a. 鳴海忠夫氏採集遺物〔鳴海1992〕

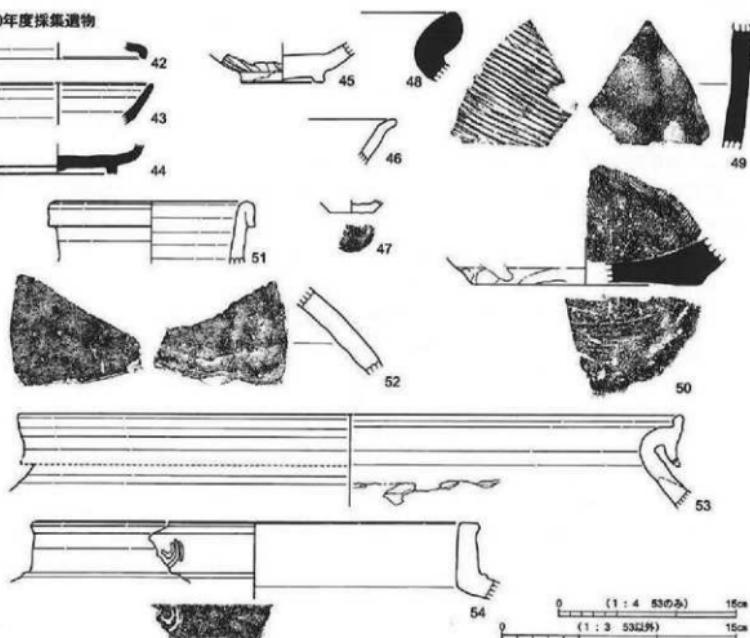
まず、鳴海氏によって採集された遺物を概観する。遺物は、古代～近世の土器・陶磁器・鉄滓など、100点以上に及ぶ。おもに館の中央～西側に分布し、東側に少ないとから、主要な施設が西側（東側に推測する門からみて奥側）にあったと想定されている。

遺物の内容は、古代の須恵器・土師器、中世の青磁・白磁・瀬戸美濃・珠洲・越前、近世の肥前などの陶磁器、そして時期不明の鉄滓である。氏の報告によれば、青磁12点（端反碗6点・笠描蓮弁文碗1点・笠線描蓮弁文碗1点・雷文帯碗1点・直縁無文碗1点・稜花皿1点・無台皿1点）・白磁4点（うち玉縁口縁の碗1点）・瀬戸美濃9点（天目茶碗2点・平碗2点・御皿1点・小皿類4点）・珠洲70点余（うちロクロ成形の壺2点・鉢10点余、珠洲系の鉢1点）・越前6点（壺・壺）・越前に類似する陶器（瓷器系カ）2点で、青花や中世土師器はない<sup>1)</sup>。これらの時期は13世紀～16世紀前半（中心は13～15世紀）と考察されている。

旧西山町教育委員会保管遺物



平成20年度採集遺物



第9図 坂田遺跡（“館屋敷”）採集土器・陶磁器

#### b. 旧西山町教育委員会保管遺物（第9図30～41・第10図i）

地元で採集され、旧西山町教育委員会で保管されてきた遺物である。現在33点が当市教育委員会に保管されている。

**概要** 一部は複数の茶封筒に収められていたようであり、「(C) 坂田出土、須恵器の(二)／昭和三九、四、二四 中村孝三郎氏の鑑定」などの記載がある。また、別の紙片には「S三九、四、二四 十四点／外二一点」ともあるので、当初は35点あったようである。『西山町の民俗と文化財』には、「坂田字下沢田西方の俗称『たてやしき』という処に、一ヘクタールの畠がある。耕作の際鉢の先から土器の破片が発見される。現在、発見されたものは 1 やよい式土器 一点 2 はじ器 五点 3 すえ器 七点 なお、畠の中ほどに鉄滓（鉄くず）、南西部地下三十粁ほどの処に直径一米位の石が埋まっている。」とある【西山町文化財調査審議会1970】。昭和44年9月1日、このうちの弥生式土器1点、土師器5点、須恵器4点が旧西山町の文化財として指定されている。現存する33点はいずれも小片であるが、弥生時代もしくは古墳時代の土器4点、須恵器6点、珠洲（系）7点、越前3点、その他陶器1点、中世土師器2点、鉄滓1点、礫石類9点といった内容である。このうち13点を図化した。

**各説** 30は、壺形土器もしくは甕形土器の底部片である。胴部内面に横位、外面に縦位の刷毛目がわずかにみられる。張紙に「ヤヨイ式」とあるが、古墳時代の可能性もあり、詳細な時期は不明である。

31・32は須恵器で、いずれも壺の体部片である。31は、内面が同心円文と平行線文の重複、外面が格子文となっている。32は、内面の当て具痕が同心円文、外面の叩き目が平行線文であるが、平行線文には木目とみられる斜位の線が入るので、斜格子状となる。

33は、中世土師器皿の口縁部片である。手づくね成形であり、中世前期のいわゆる「京都系第1波」に由来するものである。底部を画する口縁部外面の横ナデはみられるが、2段ナデなどの調整はすでに形骸化した段階と思われる。ただし、内外面とも損傷を受けており、詳細な観察はできなかった。13世紀の所産と考えられる。

34は、越前の壺もしくは甕で、底部の小片である。詳細は不明である。

35～41は、珠洲もしくは珠洲系陶器に分類される。35～37は、叩き成形による壺もしくは甕である。いずれも胴部の小片で、外面には叩き目、内面には不明瞭ながら当て具痕がみられる。35には頸部への接続部があり、小型の壺の肩部と目される。38は、クロコ成形の壺の胴部下半～底部である。内面には成形痕が明瞭で、底部切り離しは静止糸切りによる。39は、鉢の口縁部片である。器面の損傷が著しい。口縁が方頭で水平となる形態は吉岡康暢氏の第IV2期（14世紀前葉～中葉）頃に多くみられる【吉岡1994】。40は、鉢の底部片である。卸し目は、幅8～9mmの4目が1単位とみられる。底部切り離しは静止糸切りである。底部外面が内面よりも摩滅している。41は、鉢の底部片である。卸し目は幅8mmの4目が1単位となっている。底部外面には、静止糸切り痕がみられる。胎土には黒色の微粒が多く含まれ、白色粘土粒もみられる。内面は使用によって摩滅している。全体的に灰白色を呈しており、産地を珠洲に断定できないため、珠洲系陶器としておきたい。珠洲と対比すれば、第II期（13世紀前半）頃の所産とみられる【吉岡1994】。

iは、鉄滓である。一方が厚く、やや湾曲する形状から椀形鍛冶滓の破片と思われる。表面には錆

化物が部分的に付着しており、破面には気孔がやや多くみられる。メタル反応はない。

#### c. 平成20年度採集遺物（第9図42～54・第10図ii～ix）

平成20年度、市教委は新潟県中越沖地震の災害復旧事業である19災河第926号・2級河川坂田川筋 河川災害復旧工事に係る工事立会を実施した。“館屋敷”にも接する坂田川での工事であることから、周辺の現地踏査を行った際に遺物を表面採集している。現地踏査は、4月8日・16日・5月9日・19日・6月6日に実施した。

**概 要** 採集した遺物は、すべて小片であるが、合計95点を数える。種別には、須恵器18点・青磁1点・瀬戸美濃3点・株洲（系）20点・越前3点・常滑1点・瓦器1点・近世陶磁器10点・素焼きの不明土器28点・鉄滓8点である。本項では13点を図化した。

95点のうち、8割以上となる79点は、想定される館の北西部から南西部にかけての畠地で採集されているが、この状況は鳴海氏の所見とおむね一致するものといえる。館の東部には、耕作の際に不要となる礫石を集めした地点があるが、その地点から須恵器1点・青磁2点・株洲2点・素焼きの不明土器4点・鉄滓7点の合計16点が採集されている。時期の特定はできないが、8点中7点の鉄滓がその地点から採集されていることに注意しておきたい。後述するように、鉄滓は楕形鍛冶治錠と考えられ、すべて同時期の所産であれば、付近に鍛冶に関連する施設があったことが推測される。

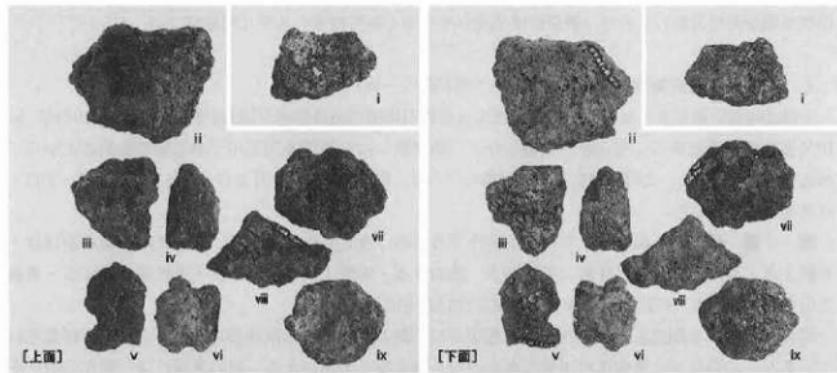
**各 説** 42～44は、須恵器である。42は、杯蓋の口縁部片である。端部のつまみ出しはやや小振りである。胎土から在地産と思われる。43は、杯頬の口縁部～胴部片である。内外面にはロクロ成形痕があり、端部は重ね焼きによって幅約8mmが黒色になっている。佐渡小泊窯産である。器形や口径から、時期は春日真実氏のV1期（9世紀前葉）頃と思われる（春日1999）。44は、有台杯の胴部下半～底部片である。高台の断面は方形で、端面が窪む。在地産である。内面が摩滅しているのは使用痕と思われるが、胴部外表面はそれ以上に摩滅しているので、再利用の可能性も考慮しておきたい。

45は、青磁の碗で、胴部下半～底部片である。胴部外表面には、片切彫の鎌蓮弁文を持つが、小片のために蓮弁の幅や間弁の有無は不明瞭である。底部は厚く、高台は断面が四角形で、疊付と高台内は露胎である。上田秀夫氏のB-I類もしくはB-I'類（13世紀後半～14世紀前半）とみられる（上田1982）。

46は、瀬戸美濃の反り皿と目される口縁部～胴部上半の破片である。大窯第1～3段階（15世紀後葉～16世紀中葉）と思われる（藤澤2001）。47は、底部の小片である。外面には回転糸切りによる切り離し痕がある。釉薬はみられないが、灰色の胎土などから瀬戸美濃の合子などが考えられる。なお、図化はできなかったが、天目茶碗の胴部下半の小片が1点ある。外面には鋸釉が施されている。

48～50は、株洲もしくは株洲系陶器である。48は、甕の口縁部片で、第III期（13世紀中葉～後葉）の形態と目される〔吉岡1994〕。49は、壺もしくは甕の胴部片である。50は、鉢の底部片である。内面は摩耗によって、御し目は不明瞭であるが、幅1.4cmに8目が観察される。焼成は不良で、胎土には白色微粒が多く含まれ、径1mmの灰色粒・白色粒などもみられる。41に類似しており、株洲系陶器としておきたい。

51～53は、株洲（系）以外の陶器である<sup>2)</sup>。51は、壺の口頸部片で、産地は不明である。近世の可能性がある。52は、越前の壺もしくは甕の胴部（肩部）片である。外面には、短い縦画（1.0cm）とその下に長い横画（2.8cm以上）の刻印の一部が観察される。53は、常滑で、甕の口縁部片である。口縁



第10図 坂田遺跡（“館屋敷”）探集鉄滓（約1：3）

部の縁帯が上下方向への拡張が進んだ形態で、幅は4cmに及んでいる。内外面は横ナデされるが、内面には粘土紐を接合した痕跡がみられる。50cm以上の口径が推計されるので、法量が大きいことが想定されるが、器形の歪みによるものである可能性も考慮しておきたい。口縁部の形態から、中野晴久氏の第7型式期（14世紀前半）の所産と考えられる（中野1994）。ただし、近年では同型式の出現は13世紀にさかのばるとの見解が示されている（中野2005）。

54は、瓦器で、風炉の口頸部である。頸部が直立する形態で、外面にはスタンプ文が施されている。文様は巴文が不明瞭になったものであろうか。胴部の形態や文様帯が不明であるため、水澤幸一氏が分類する風炉I～IV類で、14世紀末～16世紀の所産とされる（水澤1999）。

ii～ixは、鉄滓である。平坦面や緩い湾曲部分がみられたため、いずれも楕円形鍛冶滓の破片とみられる。メタル反応はない。iiは、段状で、破面には径数mmの気孔が多い。iiiは、上面が流動状で、下面には径1mmの気孔と凹凸が多い。ivは、上面に径1mmの気孔が多く、破面には径5mmの気孔がみられる。vは、破面が緻密であるが、下面に大小の気孔がみられる。viは、表面が全体的に鉄化物で覆われる。破面には径1～3mmの気孔が多い。viiは、表面に大小の気孔が多い。下面には鉄化物が部分的に付着している。viiiは、偏平な形態で、上面には径1cmほどの窪みがあり、下面是流動状であるが、径1mmほどの気孔が多い。ixは、上面が鉄化物で覆われている。下面是凹凸が多い。

#### d.まとめ

以上のような遺物から、本遺跡が弥生もしくは古墳時代・古代・中世が複合する遺跡であることがわかる。弥生・古墳時代については、遺物が少ないために今後の調査に委ねることとするが<sup>3)</sup>、古代・中世の“館屋敷”について、簡単にまとめておきたい。

**古代** 須恵器杯(43)を9世紀前半頃と推測したが、他の須恵器もそれと前後する時期の範囲に位置付けることができよう。したがって、距離をやや隔てるが、“館屋敷”と今回の発掘調査区域とは、時期的な重複があることになる。“館屋敷”における具体的な遺構などは明らかにできないが、該期における集落のあり方や開発の状況を検討する資料になり得るであろう。

**中世** 鳴海氏の報告と同じように、今回報告した遺物も13～15世紀が中心である。ただし、時

番号	種別	器種	法量(cm)	比重	色調	時期	備考
1	須恵器	杯		不良	灰白	古代	671シナフ
2	須恵器	杯		長	灰	古代	104シナフ
3	須恵器	杯		良	灰	古代	671シナフ
4	須恵器	杯	口径13.0	良	灰	古代	671シナフ
5	須恵器	杯	口径14.2	良	灰	古代	1121シナフ
6	須恵器	杯	口径14.0	良	灰	古代	671シナフ
7	須恵器	無台杯	口径11.0 武径7.5	良	灰	古代	104シナフ
8	須恵器	無台杯	口径12.0	良	灰	古代	671シナフ
9	須恵器	無台杯	口径12.0	良	灰	古代	104シナフ
10	須恵器	無台杯	口径11.8	良	灰	古代	911シナフ
11	須恵器	無台杯	口径11.8	良	灰	古代	1121シナフ
12	須恵器	無台杯	口径10.9	やや不良	淡青灰	古代	671シナフ
13	須恵器	無台杯	口径11.0 底径7.4	良	淡青灰	古代	1121シナフ
14	土器	無台杯	口径13.0	良	やや黄褐	古代	911シナフ
15	土器	無台杯	口径13.0	良	やや黄褐	古代	591シナフ
16	須恵器	金	口径8.4	良	灰	古代	911シナフ
17	須恵器	金	口径9.0	良	灰	古代	100シナフ
18	須恵器	金	口径46.0	良	灰	古代	791シナフ
19	土器	束		良	にぶい緑	古代	391シナフ
20	中世土器	束	口径12.0	良	にぶい青緑	13世紀	941シナフ
21	中世土器	束	口径10.0 高さ2.1	良	にぶい緑	13世紀	561シナフ
22	青磁	碗	口径13.0	良	(釉)灰白(輪)オリーブ灰	14世紀中葉～15世紀	1021シナフ
23	白磁	碗	高さ15.4	良	(釉)灰白(輪)灰白	13世紀	851シナフ
24	珠洲	片口鉢		良	灰白	V期	481シナフ
25	珠洲	鉢		良	にぶい緑	16世紀	841シナフ
26	珠洲	金	底径9.8	良	灰	中世	1021シナフ
27	珠洲	金		良	灰	中世	821シナフ
28	珠洲	金		良	灰	中世	851シナフ
29	糸口	外径7.0		良	褐色	931シナフ	
30	淡・深形土器	灰径4.6		良	灰	弥生～古墳	淡紙(ヤシオ式)
31	須恵器	瓶		良	灰	古代	淡紙(スエキ(一))
32	須恵器	瓶		良	灰・灰黒	古代	淡紙(スエキ(二))
33	中世土器	瓶		良	にぶい緑	13世紀	淡紙(ハジキ)
34	須洲	瓶・壺		良	にぶい緑	中世	
35	珠洲	壺		良	灰灰	中世	淡紙(スエキ(二))
36	珠洲	壺		良	灰	中世	淡紙(スエキ(一))
37	珠洲	壺		良	褐色	中世	
38	珠洲	壺	底径8.2	良	灰	中世	
39	珠洲	林		良	成	14世紀前葉～中葉	
40	珠洲	林	底径10.9	良	成	中世	
41	珠洲	林	底径13.0	やや不良	灰白	13世紀前半	淡紙(スエキ(七))
1	珠洲	板形腹沿津	5.9×4.5 厚1.7	暗青灰	(重)20.1g		
42	須恵器	杯	口径11.0	やや不良	暗灰	古代	
43	須恵器	杯	口径12.0	良	灰	9世紀前葉	
44	須恵器	有肩杯	高さ7.6	良	灰	古代	越北西部採集
45	青磁	碗	高さ7.6	良	(釉)灰白(輪)灰白	13世紀後葉～14世紀前半	東北部採集
46	須戸美濃	碗	高さ5.3	良	(釉)灰白(輪)灰白	13世紀後葉～14世紀前半	東北部採集
47	須戸美濃	子口	底径2.8	良	にぶい黄緑	13世紀	越北西部採集
48	須洲	碗		良	褐色	13世紀中葉～後葉	
49	須洲	碗・瓶		やや不良	灰白	中世	
50	須洲	林	直径14.6	不良	灰白	中世	越北西部採集
51	(不明陶器)	壺	口径12.8	良	(釉)灰(輪)暗赤褐	近世カ	越南西部採集
52	須洲	壺		良	灰灰	中世	
53	須洲	壺	口径56.6	良	にぶい緑	(13世紀～) 14世紀前半	越北西部採集
54	真然	氣炉	口径28.1	不良	(外)灰黄(内)沈茂灰	14世紀前半～16世紀	越北西部採集
8	須洲	楕円形腹沿津	8.2×7.5 厚4.0	オーリーブ黒	(重)328.0g		越東部採集
iii	須洲	楕円形腹沿津	5.2×5.1 厚3.1	オーリーブ黒	(重)118.8g		越東部採集
iv	須洲	楕円形腹沿津	5.1×3.0 厚2.8	オーリーブ黒	(重)86.3g		越東部採集
v	須洲	楕円形腹沿津	5.3×3.7 厚1.4	オーリーブ黒	(重)48.0g		越東部採集
vi	須洲	楕円形腹沿津	4.6×4.0 厚2.0	黒	(重)64.6g		越東部採集
vii	須洲	楕円形腹沿津	6.9×5.3 厚2.1	オーリーブ黒	(重)123.4g		越東部採集
viii	須洲	楕円形腹沿津	5.9×4.5 厚1.7	オーリーブ黒	(重)70.1g		越東部採集
ix	須洲	楕円形腹沿津	6.9×4.5 厚1.7	オーリーブ黒	(重)70.1g		越東部採集

第3表 坂田遺跡試掘調査主要出土遺物・「館屋敷」主要採集遺物一覧表

期を特定できた珠洲などの陶磁器類には、13～14世紀の製品に比重がある。特に、遠隔地からの流通品である常滑窯(53)は、新潟県では出土例が少なく、特筆すべきである。該期の豊富な物流の状況が推察されよう。15世紀についても、瓦器風炉(54)の存在は領主階級との関わりを示唆している(水澤1999)。坂田川の対岸で、近位置にある町口遺跡(14～15世紀)との関係などを検討する必要があろう。

## 註

- 1) 分類の名称は筆者による。
- 2) 51・53の產地については、垣内光次郎氏(財團法人石川県埋蔵文化財センター)から写真をご覧いただき、ご指導・ご助言を賜った。
- 3) 鴻海忠夫氏のご教示によれば、氏が報告した以外にも古墳時代と思われる遺物があったとのことである。弥生時代については、他の地点も含め、今のところ本遺跡では不明確である。

### 3 調査成果のまとめ

#### 1) 遺跡の概観

坂田遺跡では、平成17年度と今回の二次に渡って本発掘調査を行った。しかし、調査面積は合計で約1,080m<sup>2</sup>と遺跡全体から見れば極わずかなものであり、調査地点も遺跡範囲の縁辺部という極限られた範囲におけるものである。そのため、本報告書では、試掘調査の資料と表面探集資料を合わせて報告することにより、坂田遺跡の様相をできるだけ把握することに努めた。ここで、坂田遺跡の全体を概観し、まとめとしたい。

坂田遺跡では弥生時代以降の遺物が出土しているとされてきた。しかし、今回検討した遺物の中では弥生時代に属すると認められるものは確認できなかった。坂田遺跡で遺物が定量確認できるようになるのは8世紀後半頃からのことであり、9世紀代には、遺物量が増加するとともに集落の様相も次第に明らかとなっていく。本発掘調査で確認された遺構には柱穴と見られるピットや井戸・土坑、集落を区画する可能性がある溝、畝状構造などがある。建物の配置などの居住域の詳細は、調査区が狭小であるため明らかにはできなかったが、居住域に隣接する畑地が存在する。この居住域と畑地との間は溝によって区画されており、祭祀に用いられたと見られる土器が廃棄された。この祭祀は、農耕に関わるものである可能性が指摘される。出土した須恵器には周辺の遺跡で確認されていない胎土や調整のものが一定量確認された。当期は、郡が関与する須恵器生産が衰退する過程の時期であり、国衙勢力が関与したと見られる佐渡小泊窯跡群の須恵器が越後国にまで流通する。坂田遺跡においても佐渡産の須恵器が一般的となる中で、限定的に生産されたと見られる須恵器が出土していることから、領主層などの在地の有力者が須恵器生産に関与した可能性が想定された。別山川流域には、寺社や在地有力者に関わると見られる遺跡が見つかっており、郡司屬の衰退の裏で、肥沃な生産力を背景に力を付けてきた者がこの地域に現れてきたものと考えられる。古代の遺物は9世紀前半から中頃に最も多くなるが、今回の発掘調査区内では10世紀代以降の様相は不明瞭である。

中世では、13世紀代以降に遺物が確認できるようになり、16世紀代に至る様々な遺物が出土している。特に、館屋敷と呼ばれる地点では、地表で多数の遺物が採取されており、その質や量は坂田遺跡の他の地点とは異なる様相を示す。館屋敷では館跡の存在が指摘されてきたが、今回の検討でも、他の地点とは異質な様相を見て取ることができた。発掘調査を行っていないため遺構の状況は全く不明であり、さらに検討を要するものではある。

#### 2) まとめと今後の課題

坂田遺跡は、別山川上流域における大規模な集落遺跡の一つである。別山川流域では近年、集落遺跡の調査事例が増加している。坂田遺跡では、古代と中世の遺物が主に確認されているが、周辺の遺跡では古墳時代前期以降、様々な時代の集落遺跡の調査がなされている。特に、坂田地区に限ってみても、坂田川の対岸に位置する町口遺跡を始め、周辺で多くの遺跡が発見されて発掘調査も行われた。これらの遺跡には整理作業中のものが多いため、今後は坂田地区における遺跡の変遷やそれぞれの関係を捉えることが必要である。その上で、別山川流域における遺跡の展開、柏崎平野における位置付けなどを検討することにより、地域の歴史がさらに明らかになっていくであろう。

## 『引用参考文献』

- 上田秀夫 1983「14~16世紀の青磁罐の分類」『貿易陶磁研究』第2号 日本貿易陶磁研究会
- 柏崎市教育委員会 1999『角田一新潟県柏崎市・角田遺跡発掘調査報告書』 柏崎市埋蔵文化財調査報告書第32集
- 柏崎市教育委員会 2000『横山東遺跡群Ⅰ－新潟県柏崎市・横山東遺跡群発掘調査報告書Ⅰ』 柏崎市埋蔵文化財調査報告書第34集
- 柏崎市教育委員会 2001『宮之下遺跡群Ⅰ－新潟県柏崎市・宮之下遺跡群発掘調査報告書』 柏崎市埋蔵文化財調査報告書第35集
- 柏崎市教育委員会 2007『坂田遺跡群Ⅰ－新潟県柏崎市・坂田遺跡群発掘調査報告書Ⅰ』 柏崎市埋蔵文化財調査報告書第50集
- 柏崎市教育委員会 2008『江ノ下－新潟県柏崎市・江ノ下遺跡発掘調査報告書』 柏崎市埋蔵文化財調査報告書第52集
- 柏崎市教育委員会 2008『坂田遺跡群Ⅱ－新潟県柏崎市・坂田遺跡群発掘調査報告書Ⅱ』 柏崎市埋蔵文化財調査報告書第53集
- 春日真実 1992「越後・佐渡における須恵器生産終末期の様相」『北陸古代土器研究』第2号 北陸古代土器研究会
- 春日真実 1994「越後ににおける8世紀中頃の画面について」『北陸古代土器研究』第4号 北陸古代土器研究会
- 春日真実 1997「越後・佐渡における世纪中葉の画面」『北陸古代土器研究』第6号 北陸古代土器研究会
- 春日真実 1999「土器編年と地域性」『新潟県の考古学』高志書院
- 春日真実 2001「舟鳥・出雲崎地域における7世紀末~10世紀の土器の変遷」『一般国道116号出雲崎バイパス関係発掘調査報告書IV 梶子谷露路』(新潟県埋蔵文化財調査報告書第104集) 新潟県教育委員会・財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日真実 2005「越後ににおける奈良・平安時代土器編年の対応関係について－今池編年』・『下ノ西編年』・『山三賀編年』の検討を中心に－』『新説考古』第16号 新潟県考古学会
- 刈羽村教育委員会 1995『古木八道跡－県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』刈羽村埋蔵文化財調査報告書第2集
- 菅原正史 1997「越後重城域内の須恵器窯の推移と技術系譜の問題について」『北陸古代土器研究』第6号 北陸古代土器研究会
- 菅原正史 1999「窯業」『新潟県の考古学』高志書院
- 坂井秀努 1984『第VI章 今池遺跡群における奈良・平安時代の土器』『今池遺跡・下新町遺跡・子安遺跡』新潟県教育委員会
- 坂井秀努 1989「越後・佐渡における古代手工業生産の展開」『北陸の古代手工業生産』北陸古代手工业生産史研究会
- 坂井秀努・鶴間昭正・春日真実 1991「佐渡の須恵器」『新潟考古』第2号 新潟県考古学会
- 坂井秀努 1999「能論」『新潟県の考古学』高志書院
- 品田高志 1993『古代三鷹群と古代土器の様相』『柏崎市立博物館報』8 柏崎市立博物館
- 品田高志・伊藤啓雄 1999『角田』柏崎市教育委員会
- 品田高志 1997「前掛り遺跡における古代土器の様相」『前掛り』柏崎市教育委員会
- 田中一他 2005『竹内一坂田遺跡出土の須惠土器について』『坂田遺跡群Ⅰ－新潟県柏崎市・坂田遺跡群発掘調査報告書』柏崎市埋蔵文化財調査報告書第53集
- 中野精久 1994「赤羽・中野『生産地における編年について』『全国シンポジウム「中世常滑焼をもって」資料集』日本福祉大学知多半島総合研究所
- 中野精久 2005『常滑・瀬美』『全国シンポジウム 中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～ 資料集』同実行委員会
- 鳴海忠夫 1988『刈羽郡西山町の古城跡』『長岡郷土史』第25号 長岡郷土史研究会
- 鳴海忠夫 1992『刈羽郡西山町坂田の船跡一地図と遺物から把握した中世船跡の一例』『長岡郷土史』第29号 長岡郷土史研究会
- 鳴海忠夫 2006『上杉家臣重臣 斎藤氏の城跡について』『北陸の中世城跡』第16号
- 新潟県教育委員会 1984『上新バイパス開設跡発掘調査報告Ⅰ 今池遺跡・下新町遺跡・子安遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書 第35集
- 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 2001『国道116号 埋蔵文化財発掘調査報告書 梶子谷露路』新潟県埋蔵文化財調査報告書第104集
- 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 2005『一般国道8号 柏崎バイパス関係発掘調査報告書Ⅲ 東原町遺跡 下神北遺跡Ⅱ』新潟県埋蔵文化財調査報告書 第140集
- 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 2006『上信越自動車道関係発掘調査報告書XVI 滝寺古窯跡群 大賀古窯跡群』新潟県埋蔵文化財調査報告書 第149集
- 新潟県考古学会 1999『新潟県の考古学』高志書院
- 西山町教育委員会 2001『横山道路発掘調査報告書－県営は場整備事業北野地区に伴う発掘調査－』西山町文化財調査報告書第5集
- 西山町教育委員会 2001『井ノ町遺跡発掘調査報告書－県営は場整備事業尻沢地区に伴う発掘調査－』西山町文化財調査報告書第6集
- 西山町教育委員会 2003『宮ノ前遺跡発掘調査報告書－県営は場整備事業北野地区に伴う発掘調査－』西山町文化財調査報告書第7集
- 西山町教育委員会 2005『坪ノ内塚群・坪ノ内遺跡発掘調査報告書－県代行町道南慶寺線道路改築工事に伴う発掘調査－』西山町文化財調査報告書第8集
- 西山町福井委員会 1963『西山町誌』
- 西山町文化財調査審議会編 1970『西山町の民俗と文化財』 西山町役場
- 藤澤良祐 2001『備戸・美濃大窯製品の生産と流通－研究の現状と課題－』『戦国・繩文期の陶器流通と瀬戸・美濃大窯製品－東アジア的視点から－』 資料集。(財团法人瀬戸市埋蔵文化財センター設立10周年記念「瀬戸大窯とその時代」シンポジウム・講演会) 財團法人瀬戸市埋蔵文化財センター
- 水澤章一 1999「瓦器、その城館的なもの－北東日本の事例から－』『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第9集 帝京大学山梨文化財研究所
- 吉岡康樹 1994『中世須恵器の研究』吉川弘文館
- 和島村教育委員会 2003『下ノ西遺跡Ⅳ－県営圃場整備事業(鶴島桜原地区)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』和島村埋蔵文化財調査報告書第14集
- 和島村教育委員会 2005『八幡遺跡Ⅳ－一般国道116号バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』和島村埋蔵文化財調査報告書第16集

遺構属性表

遺構番号	種別	グリッド	規模			表面覆土	所見・きり合い	出土遺物	備考
			長軸	短軸	深度				
2	ピット	Y-7-6	28	27	21	暗褐色粘土			
3	ピット	Y-7-16	26	25	28	黒褐色粘土			
4	ピット	Y-7-17	27	25	20	暗褐色粘土			
5	ピット	Y-7-17	35	33	14	暗灰色粘土	土		
6	ピット	Y-7-17	26	20	8	暗褐色粘土	土		
7	ピット	Y-7-17	17	13	4	黒褐色粘土	土		
8	ピット	Y-7-17	24	19	8	暗褐色粘土			
9	ピット	Y-7-18	35	30	21	暗灰黄色粘土	10-11→9		
10	ピット	Y-7-18	15	13	5	暗灰黄色粘土	10-11→9	土	
11	ピット	Y-7-18	41	25	17	暗褐色粘土	10-11→9		
12	ピット	Y-7-18	27	23	8	暗褐色粘土			
13	柱穴	Y-7-18	27	15	15	暗灰色粘土			
14	ピット	Y-7-18	13	12	8	暗褐色粘土			
15	ピット	Y-7-20	31	30	5	灰黄色土	須・土		
16	ピット	Y-8-16	31	30	25	暗灰色粘土			
19	ピット	Y-8-11	23	23	4	暗灰褐色粘土	20→19		
20	ピット	Y-8-11	21	19	6	暗褐色粘土	20→19		
22	ピット	Y-8-12	29	12	16	暗灰黄色粘土			
25	柱穴	Y-8-13	33	26	22	暗褐色粘土			
26	ピット	Y-8-13	36	33	26	暗褐色粘土			
27	ピット	Y-8-13	32	27	13	暗灰色粘土	土		
28	ピット	Y-8-14	24	23	12	暗褐色粘土			
29	柱穴	Y-8-14	25	23	46	暗青灰色粘土			
31	ピット	Y-8-9	29	26	19	暗青灰色粘土			
32	ピット	Y-8-9	31	24	25	灰黄褐色粘土	33→32		
33	ピット	Y-8-9	34	24	19	暗褐色粘土	33→32		
34	ピット	Y-8-14	30	28	37	暗褐色粘土	35→34		
35	ピット	Y-8-14	20	15	26	暗褐色粘土	35→34		
36	柱穴	Y-8-14	35	33	29	灰黄色粘土			
37	ピット	Y-8-15	22	20	12	暗褐色粘土	38→37		
38	ピット	Y-8-15	28	21	13	暗褐色粘土	38→37		
39	ピット	Y-8-14	31	21	34	灰黄褐色粘土	40→39	土	
40	ピット	Y-8-14	35	25	18	暗青灰色粘土	40→39		
41	ピット	Y-8-15	24	18	9	暗褐色粘土			
42	ピット	Y-8-10	57	50	30	暗褐色粘土	43→44→42		
43	ピット	Y-8-10	24	13	26	暗褐色粘土	43→42		
44	ピット	Y-8-10	50	19	59	暗褐色粘土	44→42	断面崩落のため詳細不明	
45	柱穴	Y-8-10	25	24	25	灰黄色粘土			
47	ピット	Y-8-15	23	22	37	暗褐色粘土		SB-1P2	
48	柱穴	Y-8-15	22	12	21	暗褐色粘土			
49	柱穴	Y-8-10	26	23	16	暗灰黄色粘土			
50	ピット	Y-9-6	24	20	11	暗褐色粘土			
51	ピット	Y-9-6	27	27	28	暗褐色粘土			
52	ピット	Y-9-6	28	25	36	暗褐色粘土	53→52		
53	ピット	Y-9-6	25	23	37	暗青灰色粘土	53→52	SB-1P3	
54	柱穴	Y-9-11	91	31	52	暗灰色粘土			
56	柱穴	Y-9-6	35	28	39	暗褐色粘土	土		
59	井戸	Y-9-17	134	112	119	暗褐色粘土	須・土		
60	ピット	Y-9-7	23	23	28	暗青灰色粘土		SB-1P4	
63	柱穴	Y-9-7	34	32	35	暗褐色粘土	64→63		
64	ピット	Y-9-7	29	23	21	灰黄色粘土	64→63		
65	溝	Y-11-8	190	88	20	暗赤褐色粘土	65→66	須・土	
66	ピット	Y-11-8	31	30	10	暗赤褐色粘土	65→66	須	
67	ピット	Y-11-8	31	30	16	黑褐色粘土			
68	ピット	Y-8-13	25	22	23	暗褐色粘土	土		
69	柱穴	Y-8-16	-	34	30	黑褐色粘土			
70	柱穴	Y-8-15	-	33	32	黑褐色粘土			
71	溝	S-14-20	104	71	6	黄灰色粘土			
72	ピット	S-14-19	27	25	38	黑褐色粘土			
73	溝	Y-9-9	210	21	8	黑褐色粘土	137→73	須	
74	柱穴	Y-9-9	42	30	47	暗褐色粘土	73→74		
75	溝	Y-9-9	55	21	5	暗褐色粘土			
76	土壙	Y-9-14	161	82	41	黑色粘土		須・土	
78	溝	Y-9-5	33	38	8	褐色粘土		須・土	
79	ピット	Y-9-5	27	26	12	暗褐色粘土			
80	ピット	Y-9-5	39	37	40	黑褐色粘土	土		
81	ピット	Y-10-1	25	16	10	暗褐色粘土		須・土	
83	ピット	Y-10-7	45	39	13	褐色粘土	157→83	須・土	
84	ピット	Y-10-1	36	35	16	褐色粘土			
85	溝	Y-10-10	310	115	13	黑褐色粘土		須・土	
86	柱穴	Y-10-6	30	21	62	灰色粘土			
87	柱穴	Y-10-2	36	36	22	黑褐色粘土			
88	ピット	Y-10-2	20	17	29	暗褐色粘土		須	

遺構番号	種別	グリッド	規模			表面覆土	所見・きり合い	出土遺物	備考
			長軸	短軸	深度				
89	ビット	Y-10-3	30	27	61	暗褐色粘土			
90	ビット	Y-10-3	17	15	12	暗褐色粘土		須・土	SB-3P4
91	溝	Y-10-3	273	21	10	暗褐色粘土	92→91		2区SD6と繋がる
92	溝	X-10-23	72	28	29	灰黃褐色粘土	92→91		
93	井戸	X-10-25	284	152	129	黑色粘土		須・土	墨書き墨出し土
94	ビット	X-11-17	50	36	28	灰黃褐色粘土			SB-2P1
95	ビット	X-12-13	16	16	14	暗褐色粘土			SB-2P2
96	ビット	X-11-18	21	16	14	暗褐色粘土			
97	柱穴	X-11-18	24	23	34	黑色粘土			
99	溝	X-11-18	138	27	11	暗青灰色粘土	99→100→101		
100	ビット	X-11-19	38	33	15	暗青灰色粘土	99→100→101		SB-2P3
101	溝	X-11-19	330	22	12	暗褐色粘土	99→100→101	須	
102	ビット	X-11-19	24	20	11	灰黃褐色粘土			SB-2P4
103	溝	X-11-19	230	32	15	暗青灰色粘土	103→101・104		
104	ビット	X-11-15	28	24	59	黑褐色粘土	103→101・104		
105	溝	W-13-3	126	40	12	暗青灰色粘土		須・土	2区SD17bと繋がる
106	土壙	W-13-4	60	52	18	暗褐色粘土		須	
108	柱穴	V-13-19	34	33	28	黑褐色粘土	137→107→108		
109	ビット	V-13-18	28	28	17	黑褐色粘土			
111	ビット	V-13-19	21	20	10	褐灰色粘土			SA-1P4
112	ビット	V-13-15	26	24	21	褐灰色粘土			SA-1P3
115	ビット	V-13-15	21	18	14	褐灰色粘土			
116	ビット	V-13-15	33	30	21	暗褐色粘土		土	
117	ビット	V-13-10	40	33	22	灰褐色粘土			SA-1P2
118	ビット	V-13-5	32	30	39	灰褐色粘土			
119	ビット	V-13-10	19	18	5	褐灰色粘土			
120	ビット	V-13-10	33	31	16	褐灰色粘土		須・土	SA-1P1
121	柱穴	V-14-19	39	34	56	褐灰色粘土			
122	ビット	U-13-25	34	31	36	次褐色粘土			
123	ビット	U-13-25	19	16	6	褐灰色粘土			
127	溝	U-13-20	75	25	6	褐灰色粘土			
128	ビット	U-13-16	30	25	10	褐灰色粘土			
129	ビット	U-13-16	26	25	7	褐灰色粘土			
130	ビット	U-14-11	37	34	6	灰黃褐色粘土			
134	ビット	V-13-19	30	11	18	褐灰色粘土			SA-1P5
136	柱穴	W-13-3	31	16	23	暗青灰色粘土		須・土	
137	溝	U-13-15	488	38	16	オリーブ色黒粘土			
139	溝	X-12-11	130	48	12	暗緑灰色粘土			
140	ビット	X-11-15	40	24	12	黒褐色粘土			
141	溝	X-12-6	86	142	34	灰色砂質土		須	
143	ビット	X-12-7	31	29	35	暗青灰色粘土			
144	溝	X-12-7	102	48	26	黑色粘土			
145	井戸	X-12-8	158	112	175	黑色粘土		須・土・白・木	
147	溝	X-12-3	160	36	22	灰色粘土		土	
148	ビット	X-12-4	22	16	18	黑褐色粘土			
149	ビット	X-12-4	23	10	10	暗青灰色粘土			
150	溝	W-12-25	83	48	10	綠灰色砂質土		土	
151	溝	W-12-25	88	38	16	オリーブ色黒粘土		須・土	
152	溝	W-13-21	36	22	6	綠灰色粘土			
154	溝	W-13-21	82	42	5	暗青灰色粘土		土	
155	塵	W-13-21	50	28	5	綠灰色粘土		須・土	
157	溝	Y-10	186	342	36	オリーブ色黒粘土		須・土	
158	溝	X-11-20	200	340	16	暗緑灰色粘土	158→93・159	須・土	2区SD3と同一
159	ビット	X-11-21	27	11	21	黒褐色粘土	158→159		
160	溝	X-11-24	96	25	12	暗青灰色粘土			
161	ビット	X-11-24	25	22	27	黑色粘土			
162	ビット	X-11-25	22	14	41	褐灰色粘土			
163	柱穴	X-11-20	21	20	31	黑色粘土			

遺物觀察表

No.	出土地點	種別	形態	法量(cm)			含有物	色調	分類	規成	調整等	備考
				口径	底径	高さ						
1	S-120	須恵器	無台杯	-	-	(2.1)	白色・透明・骨針	灰		躍元・良	内外面:ロクロナダ 底部:ヘラケヌリ	
2	S-93	須恵器	有台杯	12.8	-	14.9	白色・透明	灰		躍元・良	内外面:ロクロナダ	
3	S-93	須恵器	無台杯	11.6	7.2	2.7	白色・透明	灰	D	躍元・良	内外面:ロクロナダ 底部:ヘラカヌリ	鉄分吹き出し
4	S-93	須恵器	無台杯	12.2	6.8	3.3	白色・透明	灰	A	躍元・良	内外面:ロクロナダ 底部:ヘラカヌリ	
5	S-93	須恵器	無台杯	12.2	-	(2.6)	白色・透明・骨針	灰	A	躍元・良	内外面:ロクロナダ	鉄分吹き出し
6	S-93	須恵器	無台杯	12.2	-	2.9	白色・透明	灰	D	躍元・良	内外面:ロクロナダ	
7	S-93	須恵器	無台杯	13.4	-	(2.7)	白色	灰白	D	躍元・やや不良	内外面:ロクロナダ	
8	S-93	須恵器	無台杯	-	8.6	(1.2)	白色	灰	D	躍元・やや不良	内外面:ロクロナダ 底部:ヘラカヌリ	
9	S-93	須恵器	無台杯	-	6.7	(1.6)	白色・褐色	灰 赤褐色	B	躍化・良	内外面:ロクロナダ 底部:ヘラカヌリ	
10	S-93	須恵器	無台杯	12.8	6.7	3.3	白色	黄灰	A	躍元・不良	内外面:ロクロナダ 底部:ヘラカヌリ	墨書き「鏡口」
11	S-93	土師器	無台碗	12.6	-	(3.10)	白色・褐色・黑色	褐		躍化・良	内外面:ロクロナダ	体部調査剥離
12	S-93	土師器	無台碗	-	4.9	(1.1)	白色・褐色	黄棕		躍化・良		
13	S-93	土師器	無台碗	15.6	6.2	5.6	白色	黄棕		躍化・良	内外面:ロクロナダ	墨書き「口」
14	S-93	須恵器	長頸瓶	-	8.8	(18.6)	白色・黑色	灰		躍元・良	内外面:ロクロナダ	
15	S-93	須恵器	長頸瓶	-	-	(3.5)	白色・透明	灰		躍元・良	内外面:ロクロナダ	
16	S-93	須恵器	甕	-	-	-	白色・透明	黄灰		躍元・良	外面:平行叩き 内面:同心円	
17	S-93	須恵器	甕	-	-	-	白色	灰		躍元・良	外面:平行叩き 内面:同心円	焼成前に枝状の压痕
18	S-93	須恵器	甕	34.0	-	(10.3)	白色・透明	灰		躍元・良	環部:ロクロナダ 体部外面:平行叩き 体部内面:同心円あて具	焼成が激しい
19	S-93	土師器	罐	42.0	-	(12.2)	白色・褐色 黑色	外面部に赤い褐色 内面部白		躍化・良	内外面:ロクロナダ 外面:格子叩き 内面:同心円あて具	外面媒付者
20	S-93	土師器	長甕	-	-	(2.1)	白色・透明 骨針	灰棕		躍化・良	内外面:ロクロナダ	
21	S-145	土師器	甕	-	5.8	(2.6)	白色・透明	灰棕		躍化・良	底部:赤褐色	外面媒付者
22	S-145	白磁	甕	12.0	5.6	3.6	黑色	灰白				
23	S-145	須恵器	有台杯	-	8.2	(2.3)	白色・透明	灰		躍元・良	内外面:ロクロナダ 底部:ヘラ切羽	
24	S-145	須恵器	長頸瓶	-	-	(5.5)	白色・黑色	灰		躍元・良	内外面:ロクロナダ	
25	S-76	須恵器	無台杯	12.0	-	(2.10)	白色	灰	A	躍元・良	内外面:ロクロナダ	
26	S-76	須恵器	無台杯	13.0	8.0	3.1	白色・透明	灰	A	躍元・良	内外面:ロクロナダ 底部:ヘラ切羽	
27	S-76	須恵器	無台杯	12.6	7.4	3.1	白色	灰	D	躍元・不良	内外面:ロクロナダ 底部:ヘラ切羽	2区N31と同じ
28	S-76	須恵器	無台杯	-	6.6	(1.1)	白色	灰	A	躍元・やや不良	内外面:ロクロナダ 底部:ヘラ切羽	
29	S-76	土師器	甕	-	-	-	白色・透明 褐色	灰 褐		躍化・やや不良	外面:平行叩き	
30	S-76	土師器	長甕	-	9.8	(3.0)	白色・褐色 黑色	灰黄褐		躍化・良	外面:平行叩き	外面堆积者
31	S-75	須恵器	無台杯	13.2	-	(3.0)	白色	灰	D	躍元・良	内外面:ロクロナダ	
32	S-166	須恵器	有台杯	13.0	-	(2.1)	白色	灰白		躍元・良	内外面:ロクロナダ	
33	S-65	須恵器	有台杯	10.2	5.8	5.1	白色・透明 褐色・骨針	灰		躍元・良	内外面:ロクロナダ 底部:ヘラ切羽	鉄分吹き出し
34	S-65	土師器	長甕	-	9.4	(4.0)	白色・透明 黑・褐色	灰 黑		躍化・良	内外面:ロクロナダ 底部:赤褐色	
35	S-66	須恵器	有台杯	12.5	-	(1.6)	白色・黑色	灰		躍元・良	内外面:ロクロナダ	鉄分吹き出し
36	S-158	須恵器	有台杯	13.0	-	(4.0)	白色	灰		躍元・良	内外面:ロクロナダ	
37	S-158	須恵器	無台杯	11.4	7.9	2.4	白色	灰	D	躍元・良	内外面:ロクロナダ 底部:ヘラカヌリ	
38	S-158	須恵器	無台杯	12.8	9.1	2.7	白色	灰	A	躍元・良	内外面:ロクロナダ 底部:ヘラ切羽→ナダ	
39	S-158	須恵器	無台杯	13.2	-	(2.6)	白色・透明	灰	A	躍元・良	内外面:ロクロナダ	
40	S-158	須恵器	無台杯	13.4	8.0	2.8	白色・黑色	灰白	D	躍元・不良	内外面:ロクロナダ 底部:ヘラカヌリ	
41	S-158	須恵器	無台杯	-	7.0	(2.0)	白色	灰白	C	躍元・不良	内外面:ロクロナダ 底部:ヘラカヌリ→ナダ	
42	S-158	須恵器	無台杯	-	7.6	(2.0)	白色・骨針	灰白	B	躍化・良	内外面:ロクロナダ 底部:ヘラカヌリ→ナダ	

No.	出土 地点	器種	寸法(cm)			断面	地質	断成	調整等	備考	
			外径	内径	厚さ						
53	S-158	須恵器	無台杯	13.0	7.6	3.1	白色	灰	A	還元・良 内外面:ロクロナデ 底部:へラ切り	墨書き「猪口」
54	S-158	須恵器	無台杯	13.0	7.6	3.8	白色・骨針	体部:灰白 底部:浅黄相	B	酸化・良 内外面:ロクロナデ 底部:へラ切り→ナデ	墨書き「主」
55	S-158	須恵器	無台杯	13.2	8.3	4.2	白色・透明	底部:灰白 体部:灰白	B	酸化・良 内外面:ロクロナデ 底部:へラ切り	墨書き「主」
56	S-158	須恵器	無台杯	13.6	8.0	3.8	白色・褐色	底部:灰白・褐色 体部:灰白	B	酸化・良 内外面:ロクロナデ 底部:へラ切り	墨書き「猪口」
57	S-158	須恵器	無台杯	13.2	7.6	3.8	白色・骨針	体部~口縁:灰白 底部:褐色	B	酸化・良 内外面:ロクロナデ 底部:へラ切り	墨書き「口」
58	S-158 包含層	須恵器	無台杯	—	7.5	(1.2)	白色・骨針	腹部外面:明視灰 体部:灰	B	酸化・良 内外面:ロクロナデ 底部:へラ切り	墨書き「H」
59	S-158	須恵器	無台杯	—	8.0	(2.4)	白色	灰	A	還元・やや不 内外面:ロクロナデ 底部:へラ切り	良
60	S-158	土師器	無台碗	—	5.6	1.6	白色	橙	C	酸化・やや不 良	
61	S-158	土師器	小盤	10.9	8.6	8.6	白色・褐色	内面:灰黃 外面:にらい褐色	C	酸化・やや不 良 内面:ロクロナデ	外側輪行巻
62	S-157	須恵器	杯蓋	(10.6)	—	(1.8)	白色・透明	灰	D	還元・良 内外面:ロクロナデ	
63	S-157	須恵器	杯蓋	14.2	—	(2.2)	白色・透明	灰	D	還元・良 内外面:ロクロナデ	
64	S-157	須恵器	無台杯	12.2	7.2	3.4	白色・透明	灰	D	還元・良 内外面:ロクロナデ 底部:へラ切り	
65	S-157	須恵器	無台杯	—	7.5	(1.0)	白色・骨針	灰	D	還元・良 内外面:ロクロナデ 底部:へラ切り→ナゲ	
66	S-157	須恵器	無台杯	13.0	8.6	2.7	白色・透明	灰	A	還元・良 内外面:ロクロナデ 底部:へラ切り→ナゲ	墨書き「口」
67	S-157	土師器	無台碗	12.2	6.0	2.7	白色・褐色	橙	C	酸化・良 内外面:ロクロナデ 底部:茶きり	
68	S-83	須恵器	有台杯	(14.5)	—	(5.8)	白色	灰	D	還元・良 内外面:ロクロナデ	
69	S-83	須恵器	無台杯	—	8.1	(1.0)	白色・透明 黑色	灰白	C	還元・不良 内外面:ロクロナデ 底部:へラ切り	
70	S-101	須恵器	無台杯	13.2	9.0	3.5	白色	灰	D	還元・良 内外面:ロクロナデ 底部:へラ切り	
71	S-107	須恵器	甌	—	—	—	白色	灰	D	還元・良 外側:基部押き	
72	S-141	須恵器	杯蓋	(15.4)	—	(1.9)	白色・黒色	灰	D	還元・良 内外面:ロクロナデ 天井部:ロクロケツリ	
73	S-155	須恵器	無台杯	—	7.8	(2.8)	白色	和諧:灰 底部:にじみ・黄緑	B	酸化・良 内外面:ロクロナデ 底部:へラ切り	
74	S-97	須恵器	甌	—	—	—	白色	灰	D	還元・良 外側:半行押き 内面:カキメ	
75	S-15	須恵器	杯蓋	(14.6)	—	(2.0)	白色・透明	灰	D	還元・良 内外面:ロクロナデ 天井部:ロクロケツリ	
76	S-88	須恵器	甌	—	—	—	白色	灰	D	還元・良 外側:半行押き 内面:カキメ	外側羽状化氣泡
77	S-81	須恵器	有台杯	12.8	—	(3.4)	白色・透明	灰	D	還元・良 内外面:ロクロナデ	
78	包含層	須恵器	杯蓋	—	—	(1.1)	白色	灰	D	還元・良 内外面:ロクロナデ	
79	包含層	須恵器	杯蓋	—	—	(0.9)	白色・黒色	灰白	D	還元・良 内外面:ロクロナデ 天井部:へラケツリ	
80	包含層	須恵器	杯蓋	15.0	—	(2.0)	白色・黒色	灰白	D	還元・良 内外面:ロクロナデ	
81	包含層	須恵器	有台杯	—	7.8	(1.8)	白色	灰白	D	還元・良 内外面:ロクロナデ	
82	包含層	須恵器	有台杯	—	7.2	(2.1)	白色	灰白	D	還元・良 内外面:ロクロナデ 底部:へラ切り	
83	包含層	須恵器	有台杯	—	(9.0)	(0.8)	白色	にじみ・赤褐	C	酸化・良 内外面:ロクロナデ 底部:へラ切り	
84	唐土	須恵器	有台杯	—	(2.1)	7.0	白色・透明 骨針	黄灰	D	還元・良 内外面:ロクロナデ 底部:へラ切り	
85	包含層	須恵器	無台杯	12.2	7.4	2.9	白色・透明	灰	A	還元・良 内外面:ロクロナデ 底部:へラ切り	
86	包含層	須恵器	無台杯	12.0	7.4	2.5	白色・透明	灰	A	還元・良 内外面:ロクロナデ 底部:へラ切り	鉛分吹き出し
87	包含層	須恵器	無台杯	12.4	—	(2.0)	白色	灰	A	還元・良 内外面:ロクロナデ 底部:へラ切り	鉛分吹き出し
88	包含層	須恵器	無台杯	12.0	8.6	2.9	白色	灰	A	還元・良 内外面:ロクロナデ 底部:へラ切り	
89	唐土	須恵器	無台杯	12.1	7.4	3.4	白色	灰	A	還元・良 内外面:ロクロナデ 底部:へラ切り	
90	S-155	須恵器	無台杯	12.8	7.9	2.7	白色・褐色 骨針	灰	A	還元・良 内外面:ロクロナデ 底部:へラ切り	
91	S-155	須恵器	無台杯	—	6.7	(1.8)	白色・骨針	灰	A	還元・良 内外面:ロクロナデ 底部:へラ切り→ナデ	
92	包含層	須恵器	無台杯	—	8.0	(2.0)	白色	灰白	D	還元・やや不 良 内外面:ロクロナデ 底部:へラ切り	
93	包含層	須恵器	無台杯	—	7.8	(1.5)	白色	灰	D	還元・良 内外面:ロクロナデ 底部:へラ切り→ナゲ	
94	包含層	須恵器	無台杯	12.0	7.8	2.9	白色	黄灰	A	還元・良 内外面:ロクロナデ 底部:へラ切り	墨書き「末」

No.	出土 地点	種別	器種	測量(cm)			断土	土性	構成	調査等	備考
				口径	底径	高さ					
95	築土	須弥壇	無台杯	-	7.0	6.6	白色・黒色	灰	D	還元・良	内外面:ロクロナデ 底盤:ハラ切付
96	包含層	土師器	無台碗	11.8	-	6.5	白色・褐色	灰白		酸化・良	内外面:ロクロナデ
97	包含層	土師器	無台碗	14.2	6.2	3.8	白色・褐色	淡黄褐色		酸化・不良	外表面:ロクロナデ 底盤:ハラ切付
98	包含層	土師器	無台碗	-	4.9	4.2	白色	灰		酸化・不良	内表面:ロクロナデ 底盤:ハラ切付
99	包含層	須弥壇	真頃瓶	-	-	10.4	白色・黒色	灰		還元・良	内表面:ロクロナデ
100	包含層	須弥壇	壺	-	-	-	白色	黄灰		還元・良	外表面:平行叩き
101	包含層	須弥壇	壺	-	-	-	白色	淡黄褐色		酸化・不良	外表面:平行叩き 内表面:同心円あて具
102	包含層	土師器	壺	-	-	-	白色	灰		還元・良	外表面:平行叩き 内表面:同心円あて具
103	包含層	土師器	壺	-	-	3.7	白色・褐色 黒色	淡黄褐色		酸化・不良	
104	表探	須弥壇	真頃瓶	-	-	-	白色・黒色	灰白		還元・良	内外面:ロクロナデ
105	包含層	珠鋼	壺	-	6.0	4.3	白色・黒色	灰		還元・良	内表面:ロクロナデ 体部外表面:クリガキ 底盤:系引き
106	包含層	珠鋼	壺	-	-	-	白色・黒色	灰		還元・良	外表面:平行叩き
107	包含層	珠鋼	壺	-	-	-	白色・壺	灰		還元・良	外表面:平行叩き
108	包含層	珠鋼	壺	-	-	-	白色	灰		還元・良	外表面:平行叩き
109	包含層	珠鋼	片口鉢	26.0	-	4.4	白色・透明	灰		還元・良	内外面:ロクロナデ 内表面:オロシメ
110	包含層	珠鋼	片口鉢	24.8	-	4.6	白色・黒色	灰		還元・やや不良	内表面:ロクロナデ
111	包含層	肥前	壺	11.0	-	12.12	白色	筋土:にぶい 輪:灰		酸化・良	内表面:オロシメ 外表面:ロクロナデ

編番 番号	出土地点	器種	測量(cm)			木取り	制作痕等の所見	備考
			長さ	幅	厚さ			
21	S-93 縫沢色土	板状木製品	32.7	17.6	5.3	芯去り	分割材、上下切り落とし	
22	S-93 縫沢色土	棒状木製品	61.9	16.2	5.3	芯去り	分割材、上下切り落とし	
23	S-93 縫沢色土	板状木製品	59.3	6.8	6.0	芯去り	分割材、上下切り落とし	
24	S-93 縫沢色土	板状木製品	74.1	12.4	7.1	芯去り	分割材、下部切り落とし	
25	S-93 縫沢色土	板状木製品	87.7	25.8	4.8	芯去り	分割材、下部切り落とし	
30	S-145 下削	板状木製品	19.9	10.5	1.8	紐目	加工痕あり。下部・右側欠損	
31	S-145 下削	板状木製品	19.9	10.5	1.7	紐目	加工痕あり。下部・左側欠損	
32	S-145 下削	板状木製品	48.6	8.8	1.9	紐目	加工痕あり。上・左欠損	
33	S-145 下削	板状木製品	19.0	3.6	3.8	紐目	左右中央に痛み状の傷みを作る	
34	S-145 下削	内盤状木製品	27.6	31.6	2.8	紐目	加工痕あり。裏面櫻化	

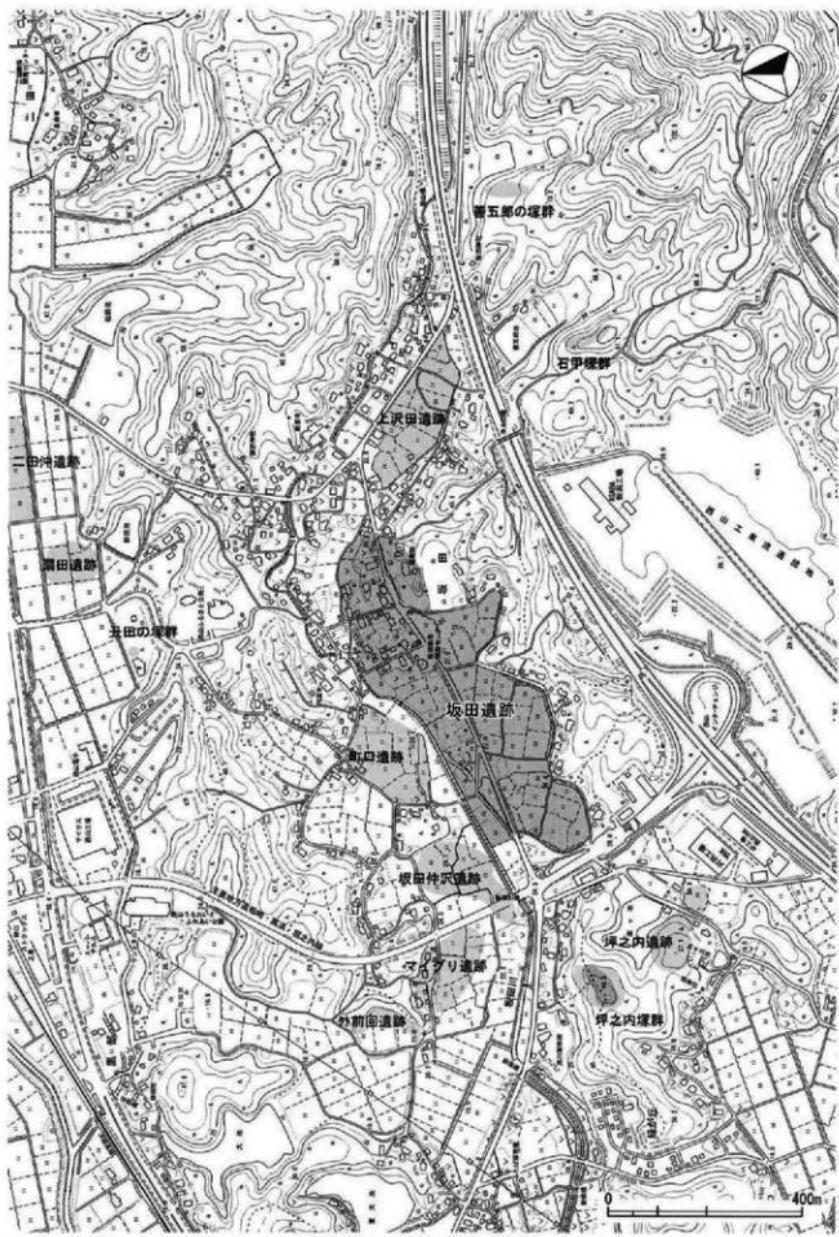
報告 番号	出土地点	種別	測量(cm・g)				備考
			長さ	幅	厚さ	重量	
112	X-12-12	壺	7.9	2.6	0.3	17.0	
113	w-12-12	用途不明	11.6	1.3	0.5	29.0	
114	w-13-1	洗淨	5.3	3.8	3.0	42.0	

# 図 版

## 凡 例

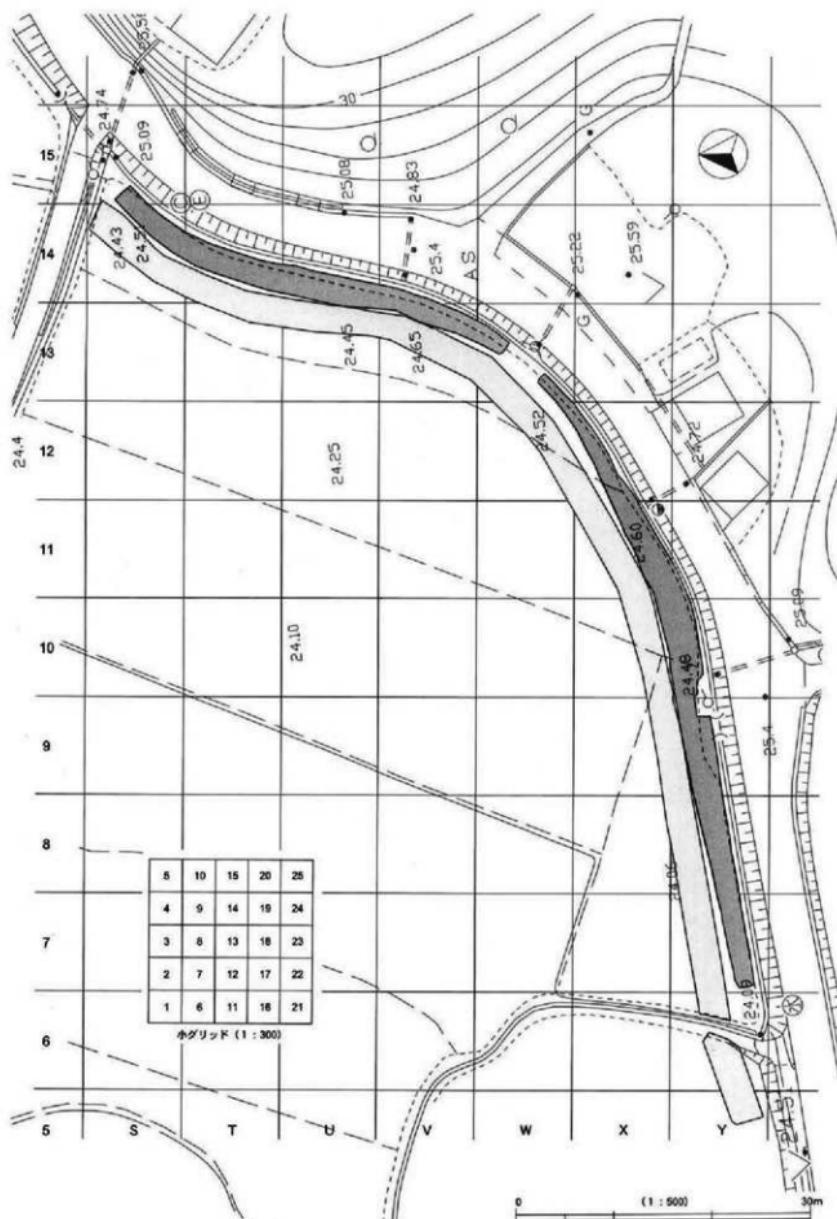
1. ここには、遺跡全体及び遺構・遺物に関する実測図と写真を収める。図面図版と写真図版に区分されるが、図版は通し番号となっている。
2. 図面図版には、方位と縮尺を付した。方位は全て真北である。
3. 写真図版に示した方位は、対象物に向かった方向を大まかに示したものである。



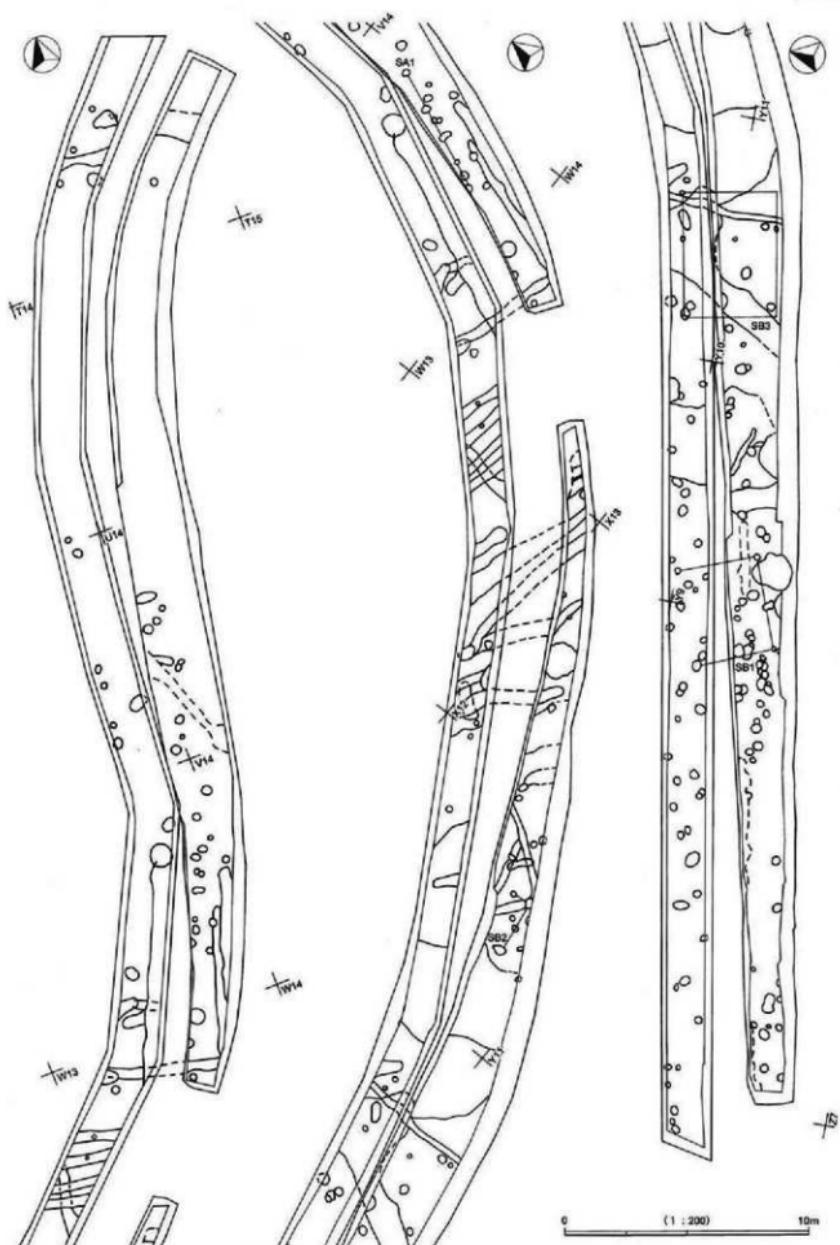


坂田遺跡の位置と周辺の地形

図版 2

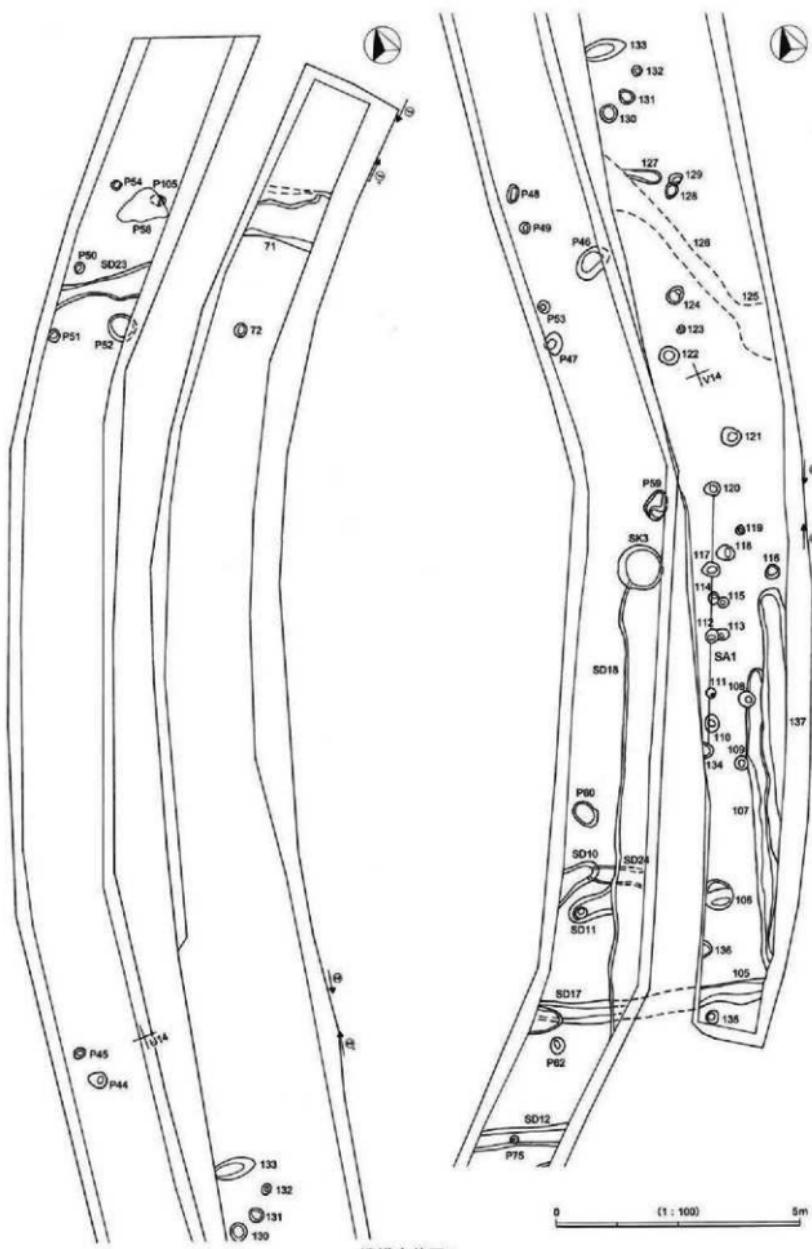


### 調査区の位置とグリッド配置図



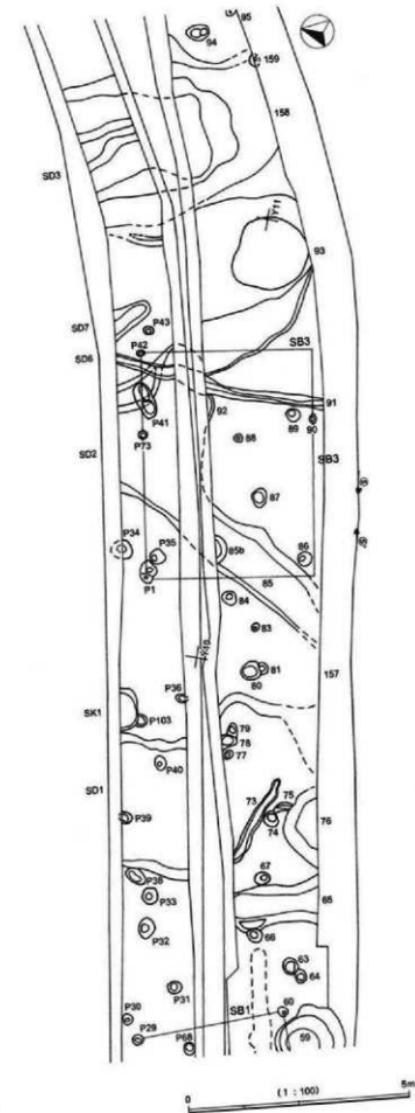
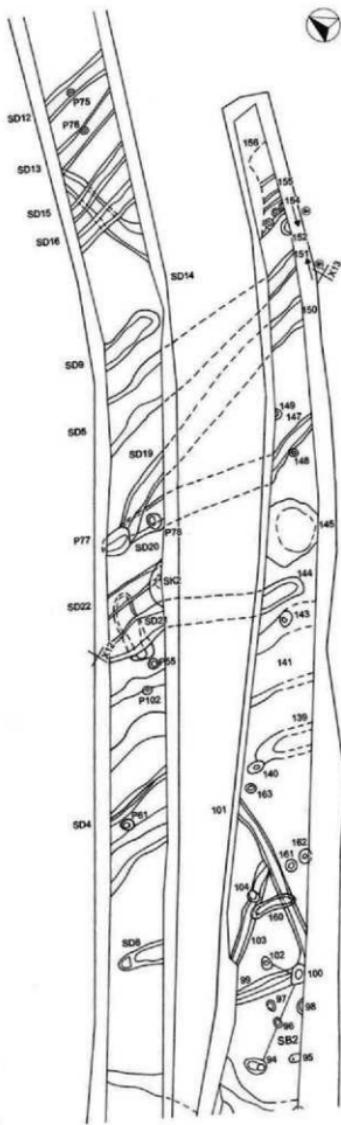
遺構全体配置図

図版 4

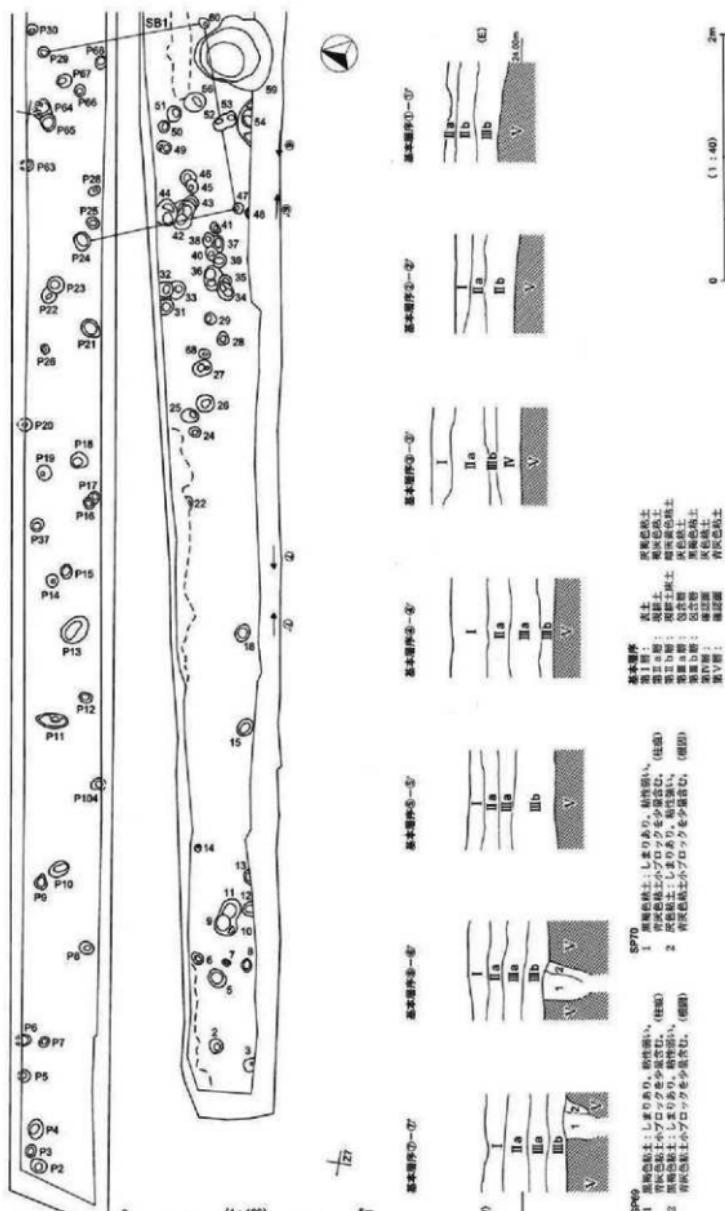


造構全体図 1

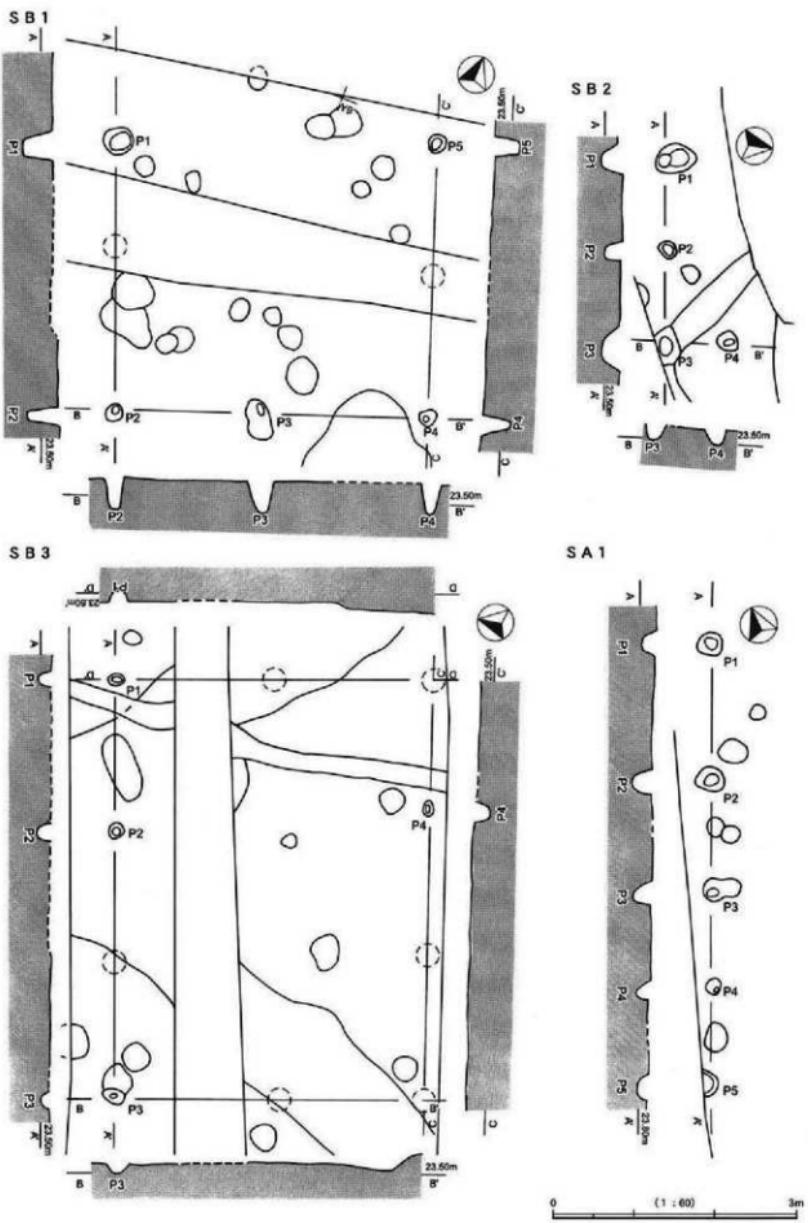
図版 5



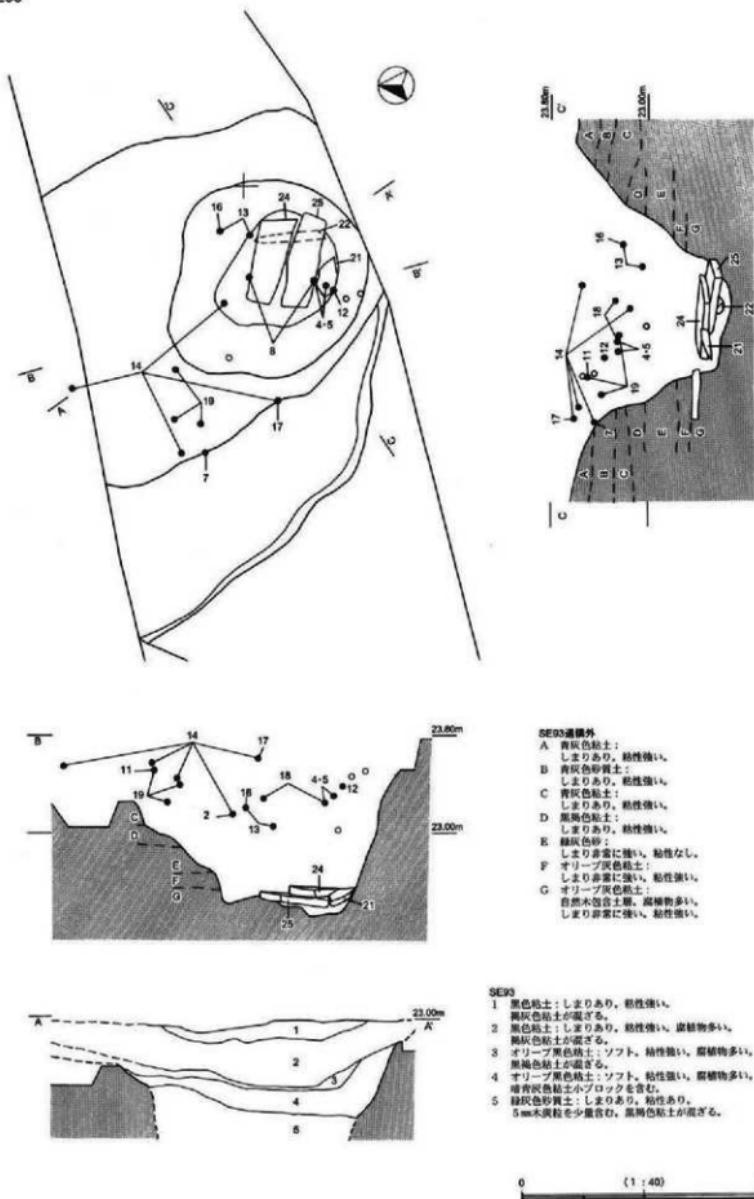
造構全体図 2



遺構全体図 3・基本層序

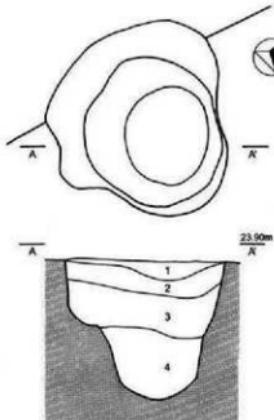


遺構個別図 1

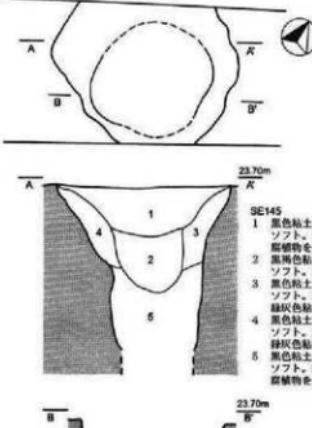


造構個別図2

SE59



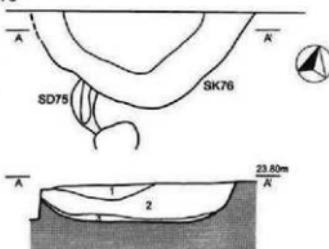
SE145



SE59

- 褐色粘土：しまりあり。粘性弱い。  
本鉄粒を極少量含む。褐灰色粘土を少量含む。
- 褐灰色粘土：しまりあり。粘性強い。  
本鉄粒を少量含む。灰色粘土小ブロックを少量含む。
- 褐色粘土：しまりあり。粘性弱い。  
灰色粘土小ブロックを多量含む。
- 褐灰色膠質土：しまりあり。粘性強い。本鉄粒を少量含む。

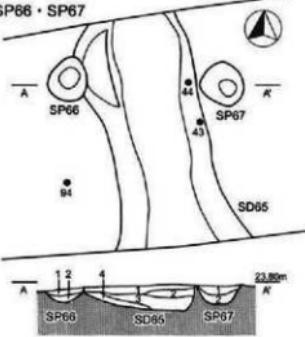
SK76



SK76

- 褐色粘土：しまりあり。粘性強い。5mm木炭を少量含む。
- 黒色粘土：しまりあり。粘性強い。5mm木炭を少量含む。
- 暗褐色粘土：しまりあり。粘性あり。やや軟質。

SD65・SP66・SP67



SP66

- 褐色粘土：
- しまりあり。粘性弱い。  
木鉄粒を極少量含む。
- 褐灰色膠質土：
- しまりあり。粘性弱い。
- 褐色粘土：
- しまりあり。粘性弱い。
- 褐灰色粘土：
- しまりあり。粘性弱い。
- 褐灰色粘土：
- しまりあり。粘性弱い。

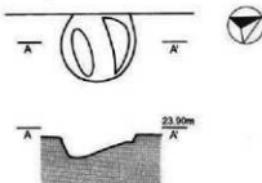
SD65

- 褐色粘土：
- しまりあり。粘性弱い。
- 褐色粘土：
- ややソフト。粘性弱い。
- 褐色粘土：
- ややソフト。粘性弱い。

SP67

- 褐色粘土：
- しまりあり。粘性弱い。
- 褐色粘土：
- しまりあり。粘性弱い。
- 褐色粘土：
- しまりあり。粘性弱い。

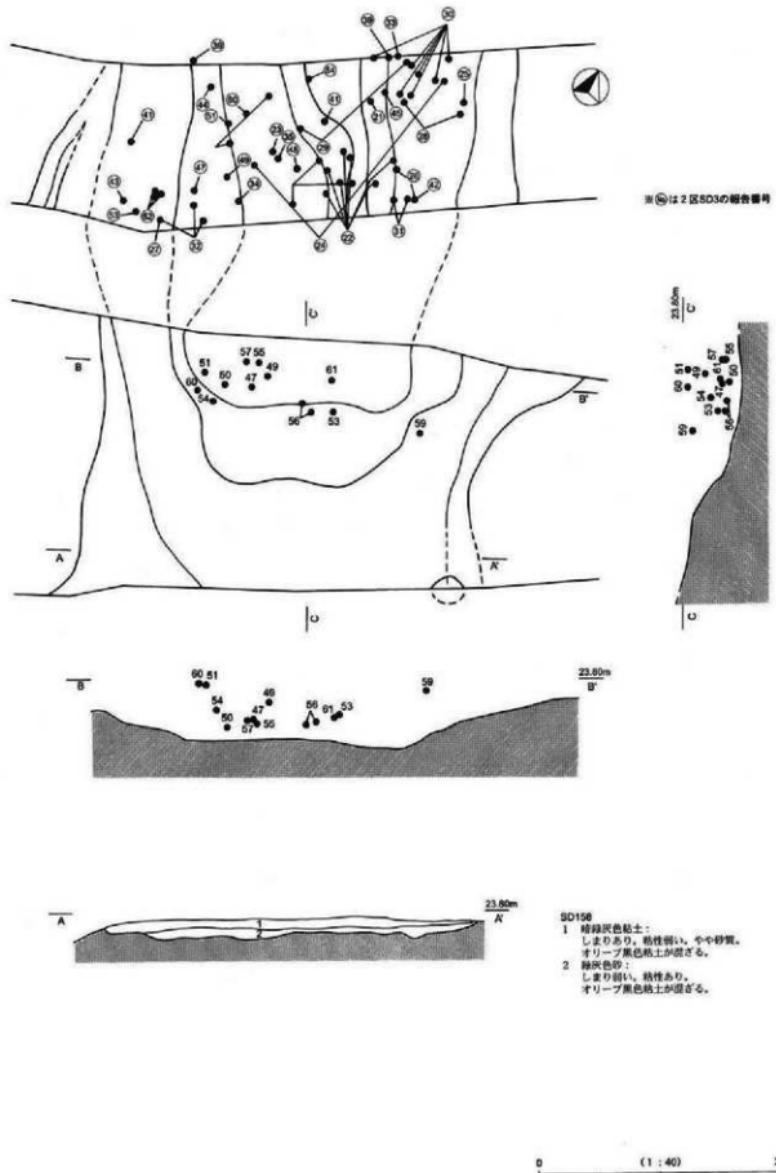
SK106



造構個別図 3

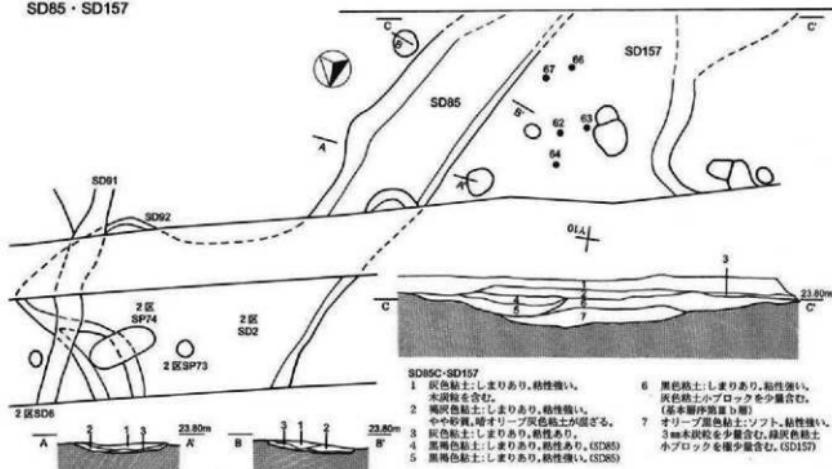
図版10

SD158



遺構個別図 4

SD85・SD157



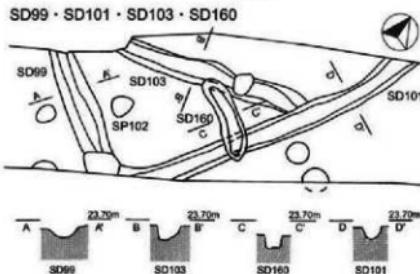
SD65A

- 1 黒褐色粘土；  
しまりあり。粘性弱い。
- 2 黑褐色粘土；  
しまりあり。粘性強い。
- 3 黑褐色粘土；  
しまりあり。粘性強い。  
やや砂質。

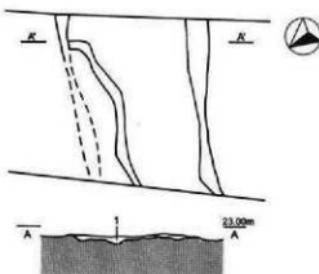
SD65B

- 1 黑褐色粘土；  
しまりあり。粘性弱い。
- 2 黑褐色粘土；  
しまりあり。粘性強い。
- 3 黑褐色粘土；  
しまりあり。粘性強い。
- 4 黑褐色粘土；  
しまりあり。粘性強い。  
やや砂質。

SD99・SD101・SD103・SD160

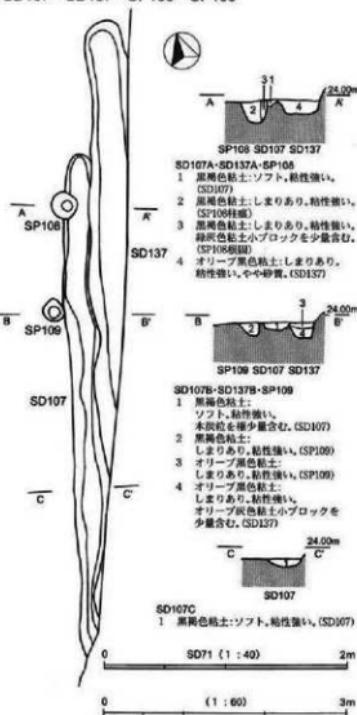


SD71



- 1 黄褐色粘土；しまりあり。粘性強い。  
黒褐色粘土小ブロックを少量含む。

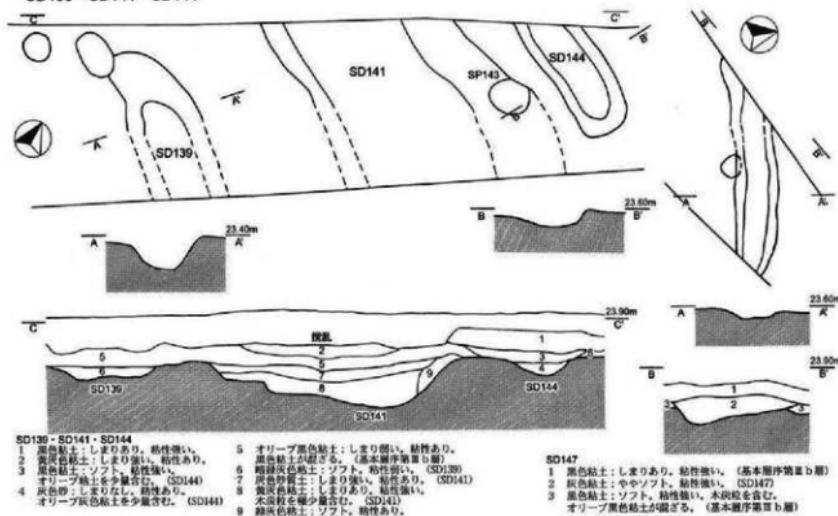
SD107・SD137・SP108・SP109



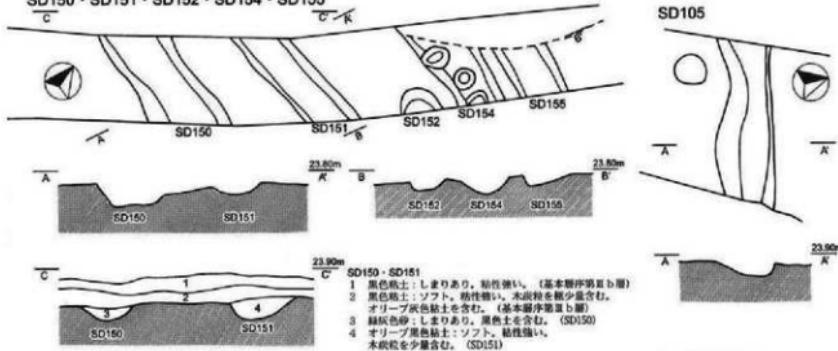
遺構個別図5

図版12

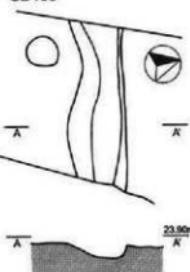
SD139・SD141・SD144



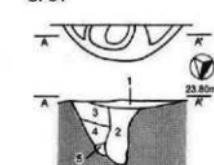
SD150・SD151・SD152・SD154・SD155



SD105



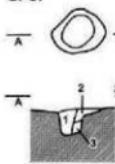
SP54



SP54

- 1 黄褐色粘土：しまりあり。粘性弱い。
  - 2 黄褐色粘土：しまりあり。粘性弱い。
  - 3 黄褐色粘土：しまりあり。粘性弱い。
  - 4 綿状灰色粘土：しまりあり。粘性弱い。(柱状)
  - 5 黄褐色粘土：しまりあり。粘性弱い。
- 黒褐色粘土をアバロックを  
少量含む。(柱状)

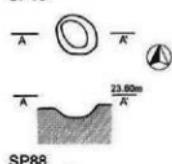
SP87



SP87

- 1 黄褐色粘土：しまりあり。粘性弱い。(柱状)
  - 2 黄褐色粘土：しまりあり。粘性弱い。
  - 3 黄褐色粘土：しまりあり。粘性弱い。
- 黒褐色粘土が混ざる。(柱状)

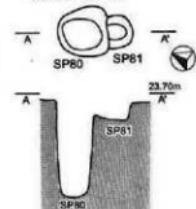
SP15



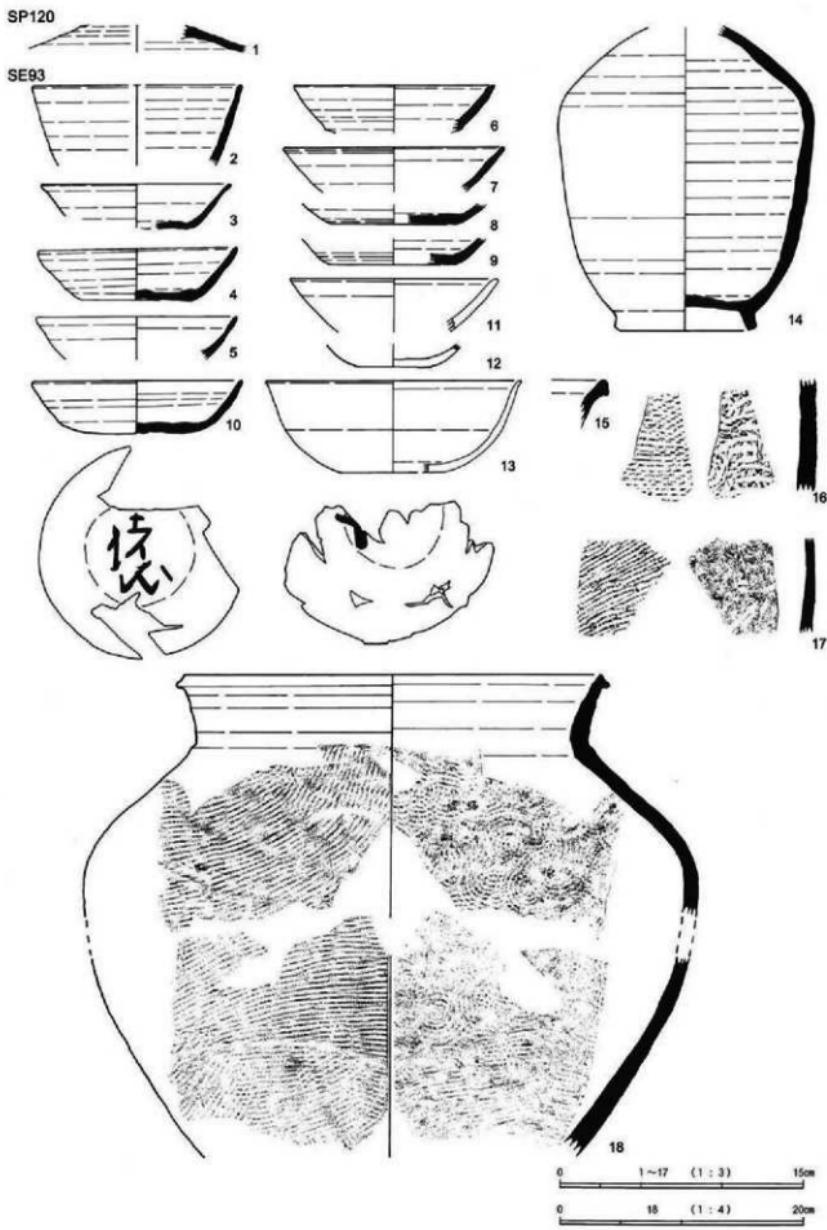
SP88



SP80・SP81

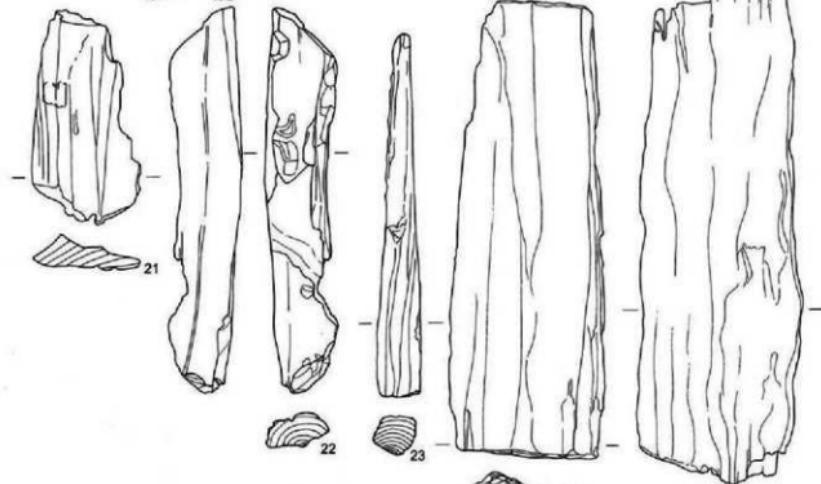


遺構個別図 6

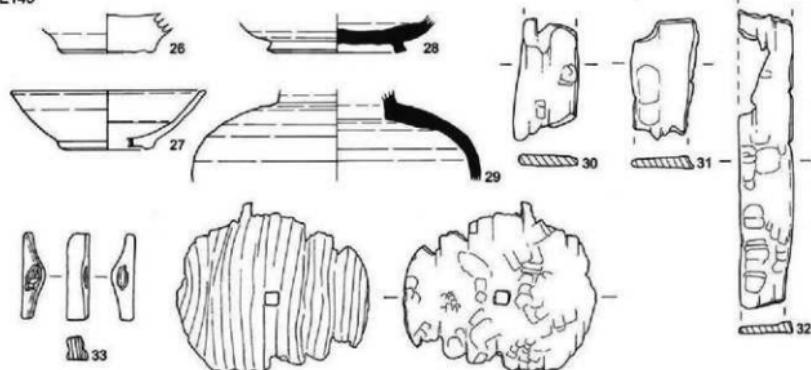


図版14

SE93



SE145

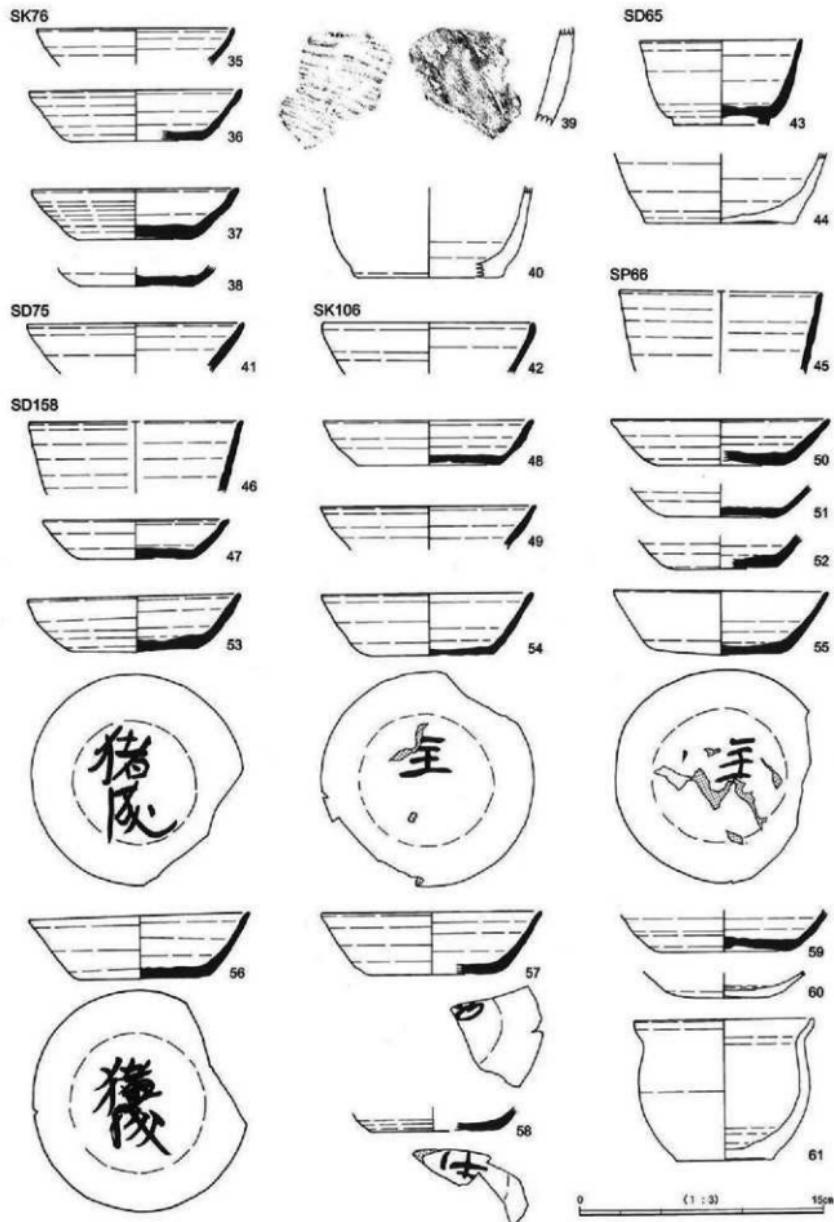


0 20・26~29 (1 : 3) 15cm

0 19・21~25・30~32 (1 : 4) 20cm

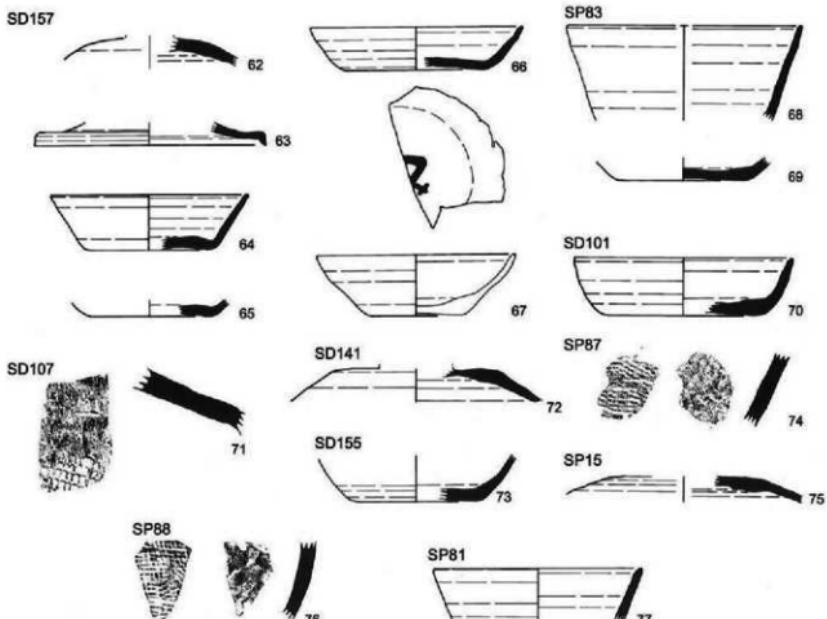
0 33・34 (1 : 8) 40cm

遺物実測図 2

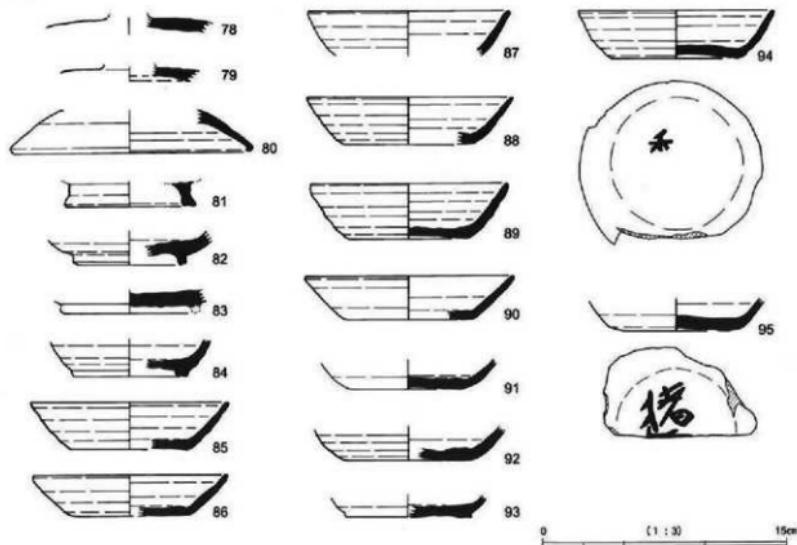


遺物実測図 3

図版16



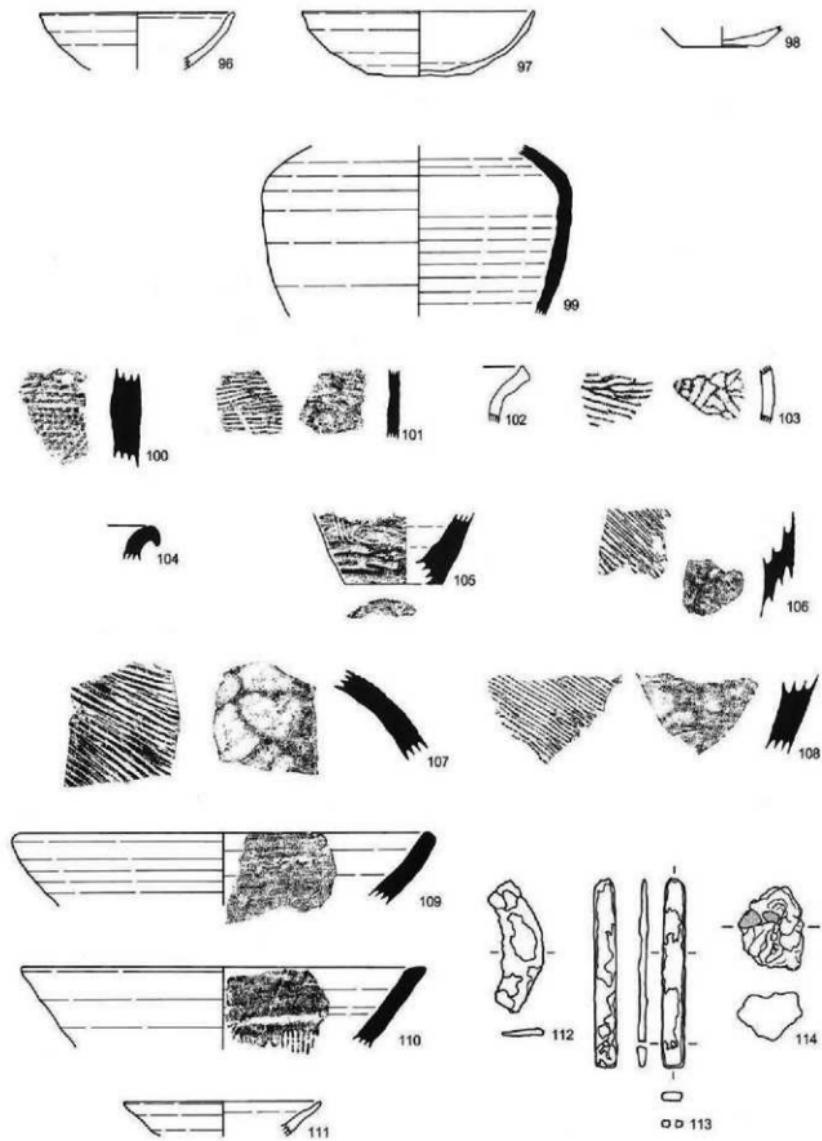
包含層



遺物実測図4

0 (1 : 30) 15cm

## 包含層



遺物実測図 5

0 (1 : 3) 15cm

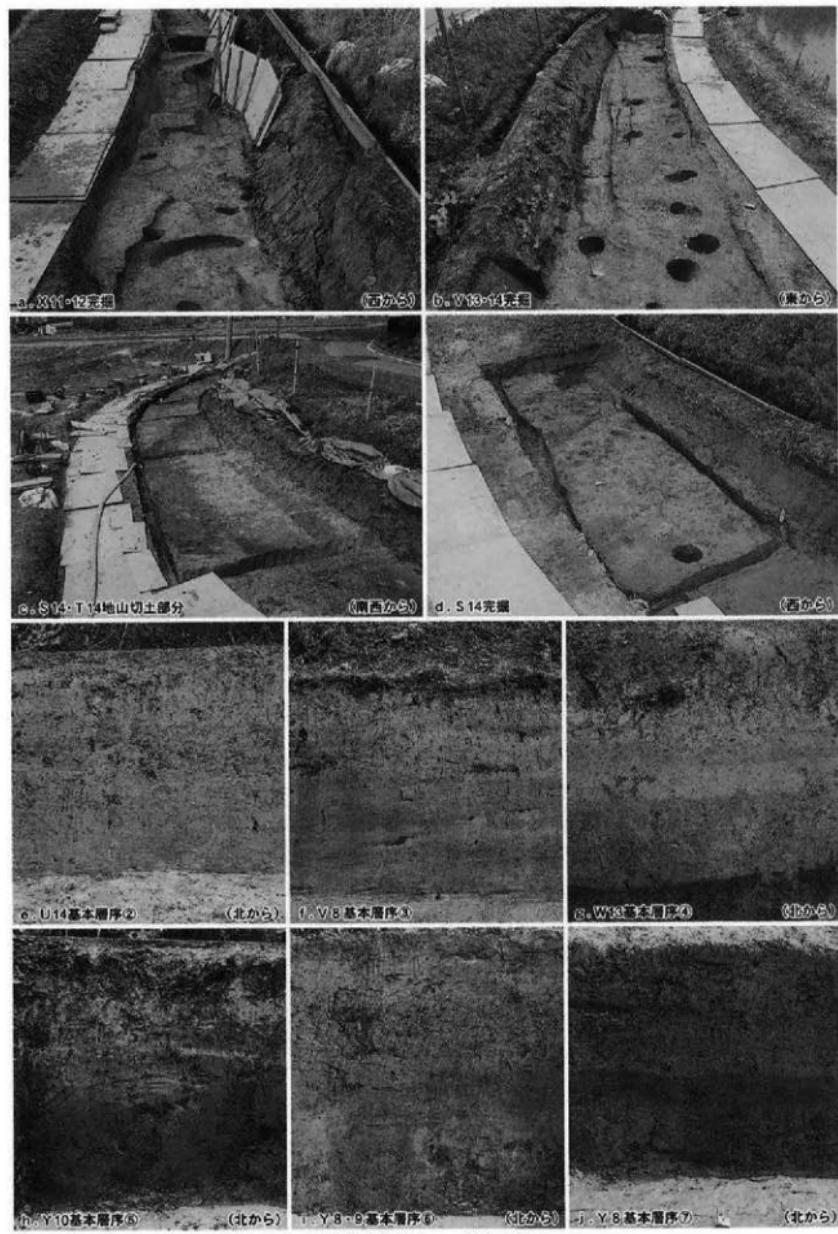
図版18



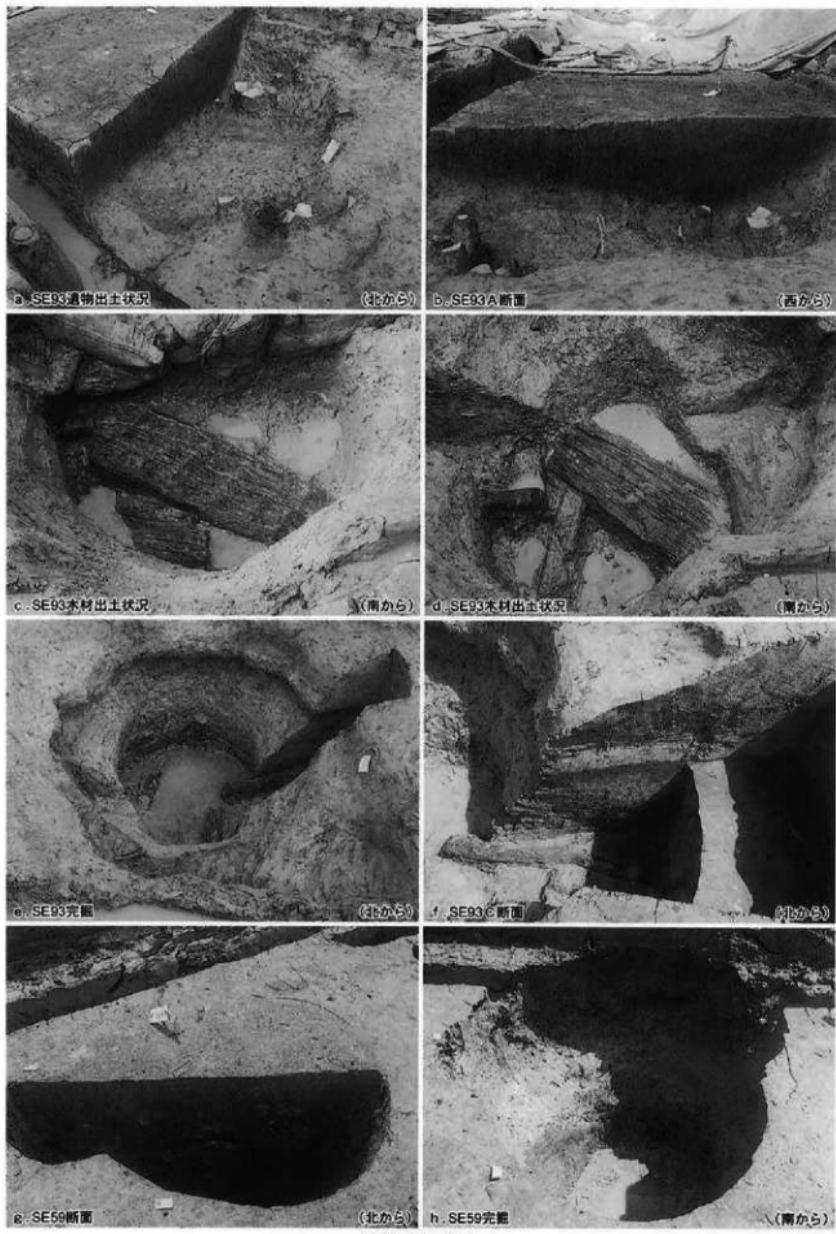
坂田遺跡周辺空中写真〔国土画像情報（カラー写真）国土交通省 昭和50年度撮影〕



造構完撮写1

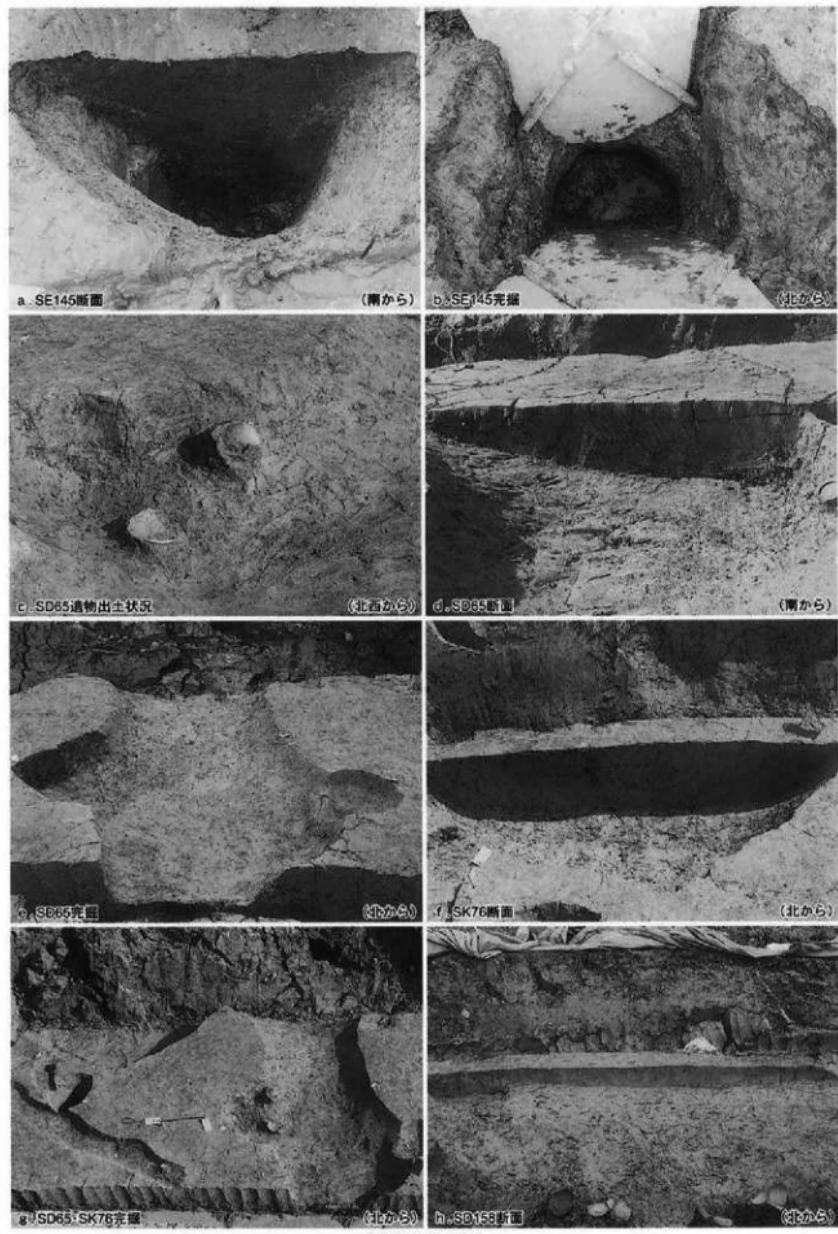


遺構完掘写真2・基本層序

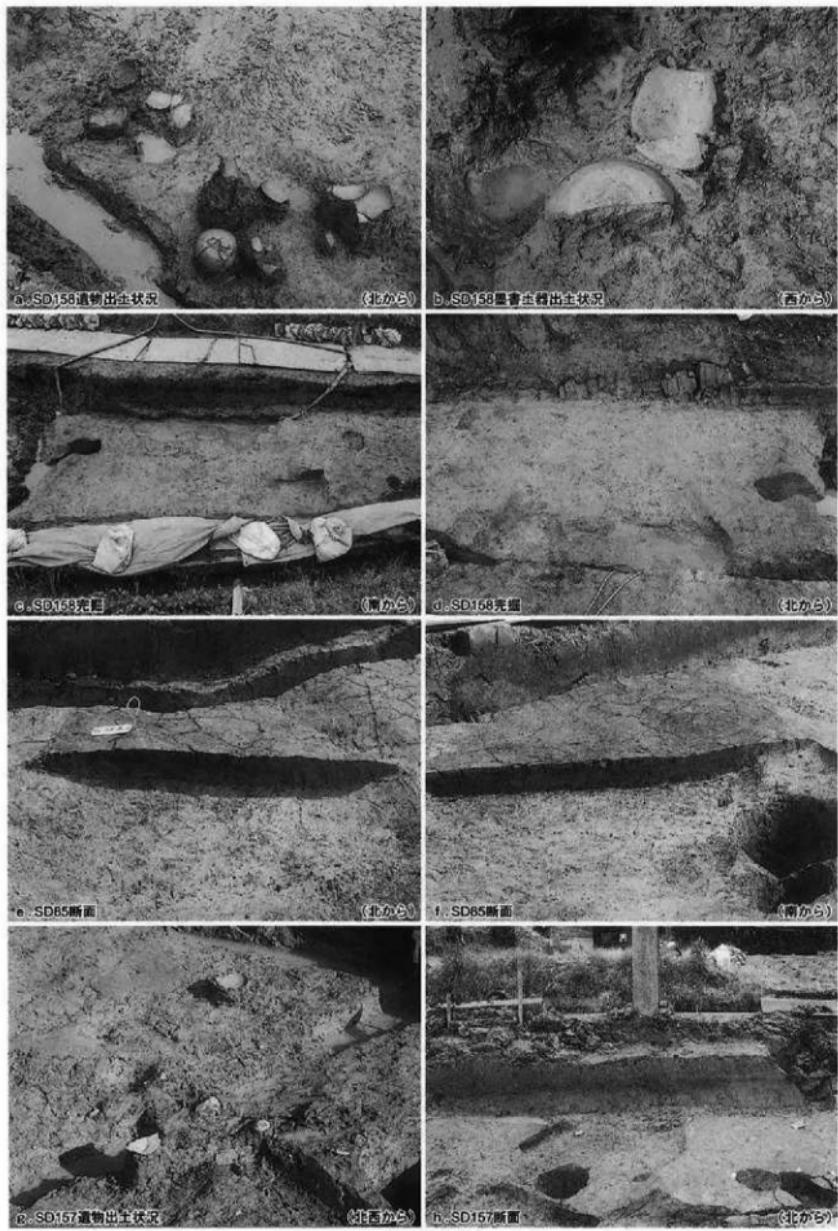


遺構個別写真1

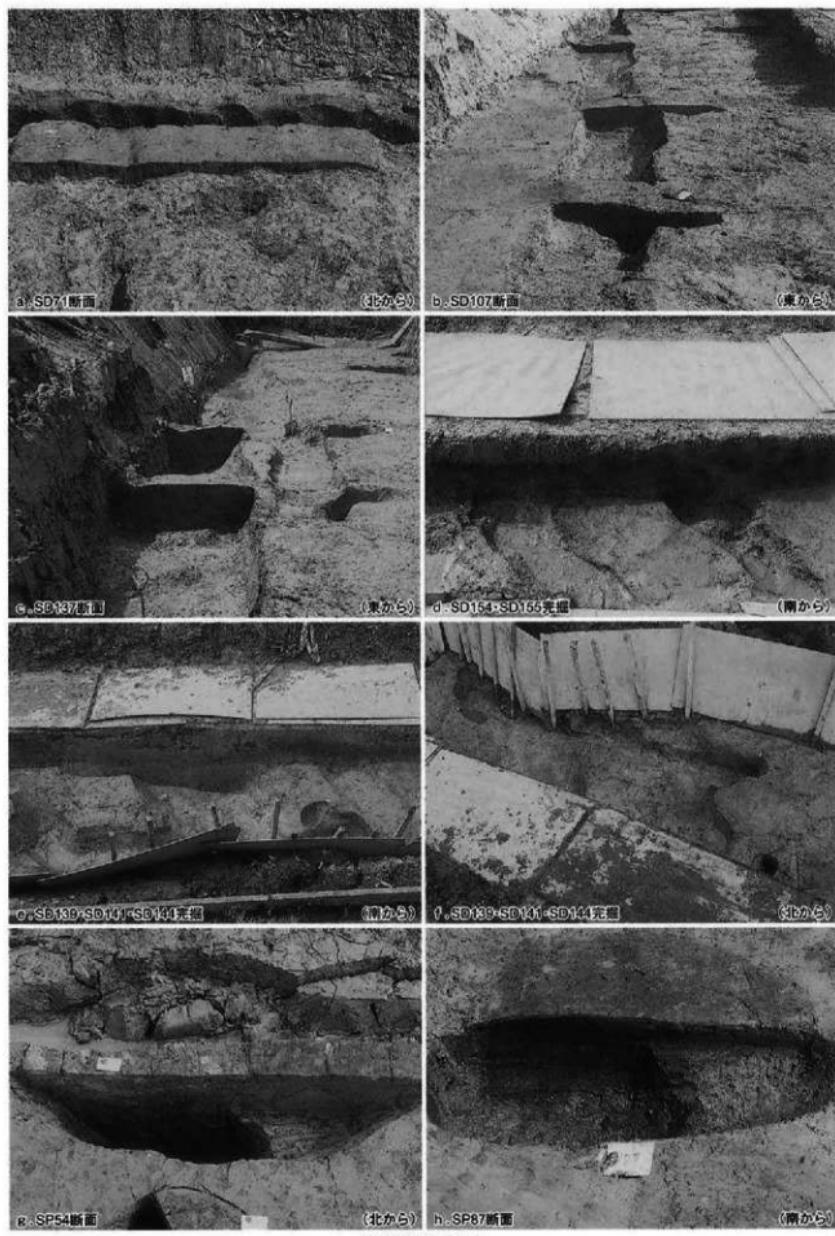
図版22



遺構個別写真 2

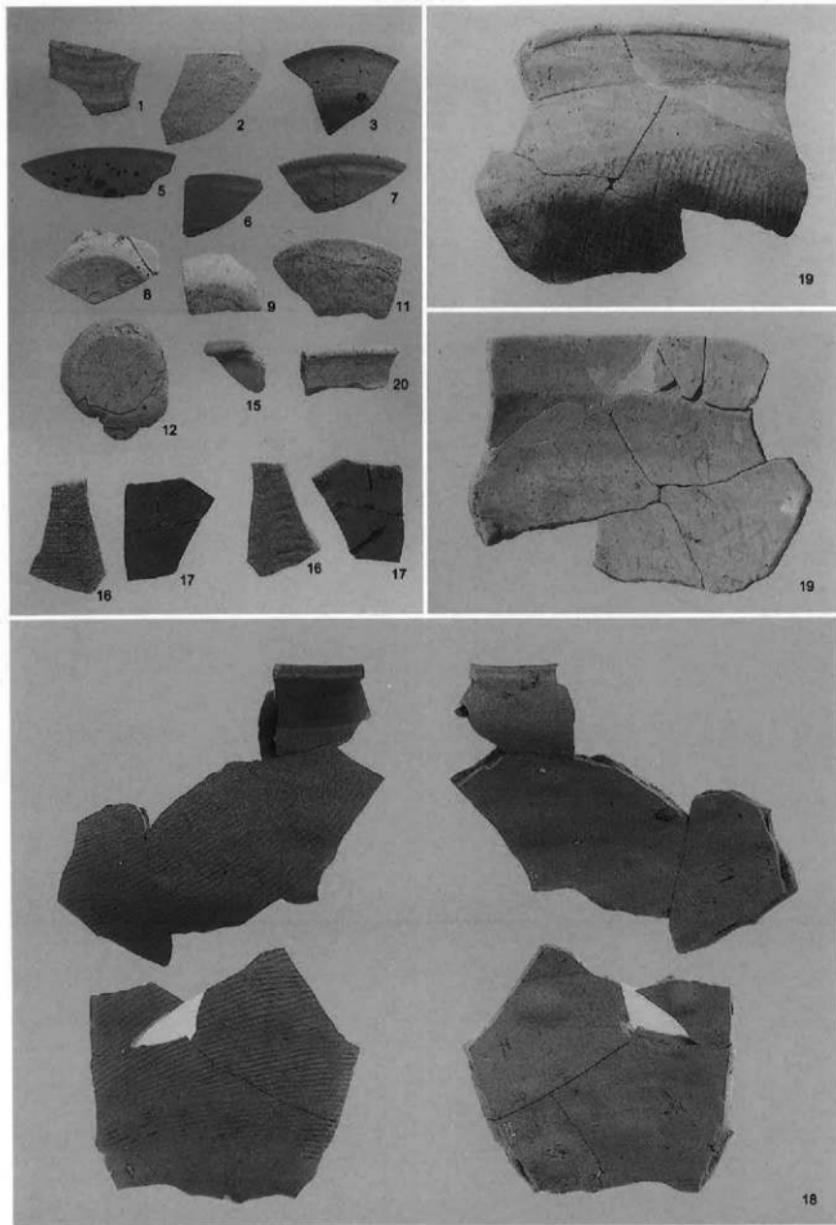


遺構個別写真3

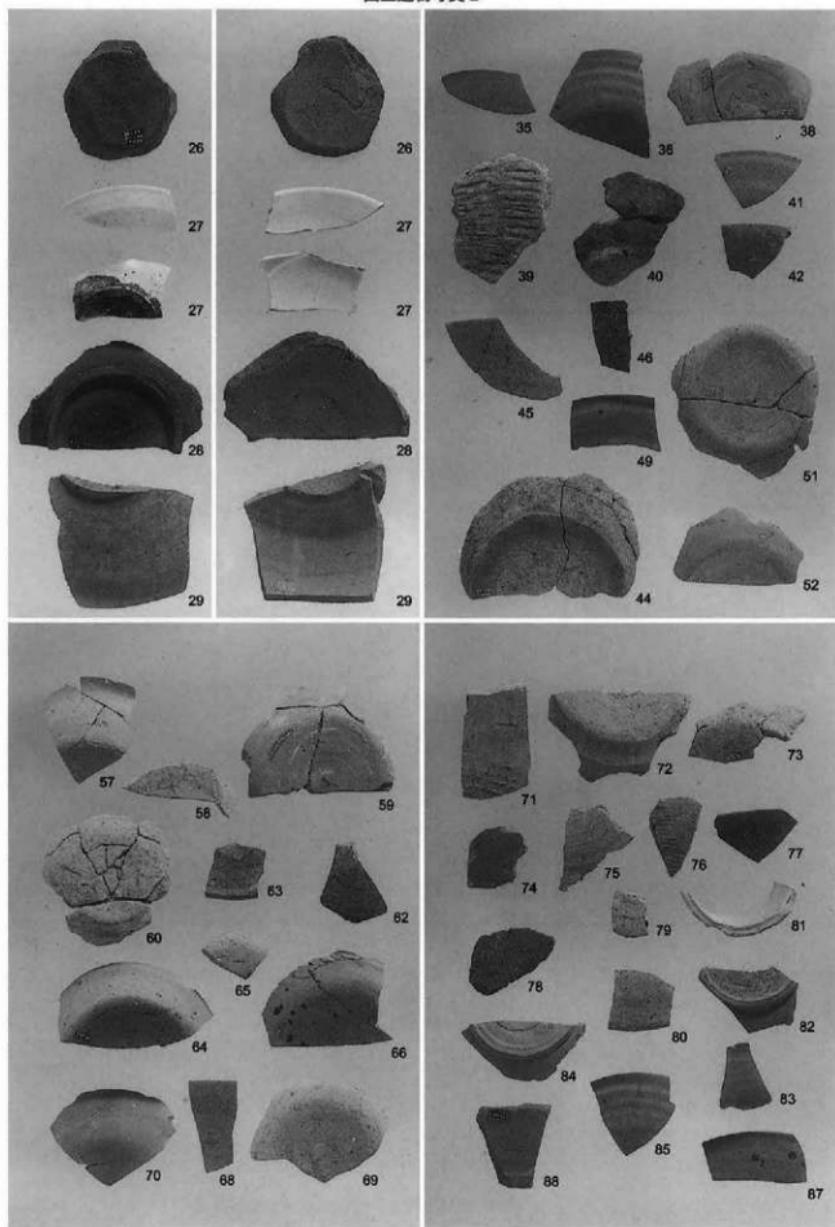


遺構個別写真4

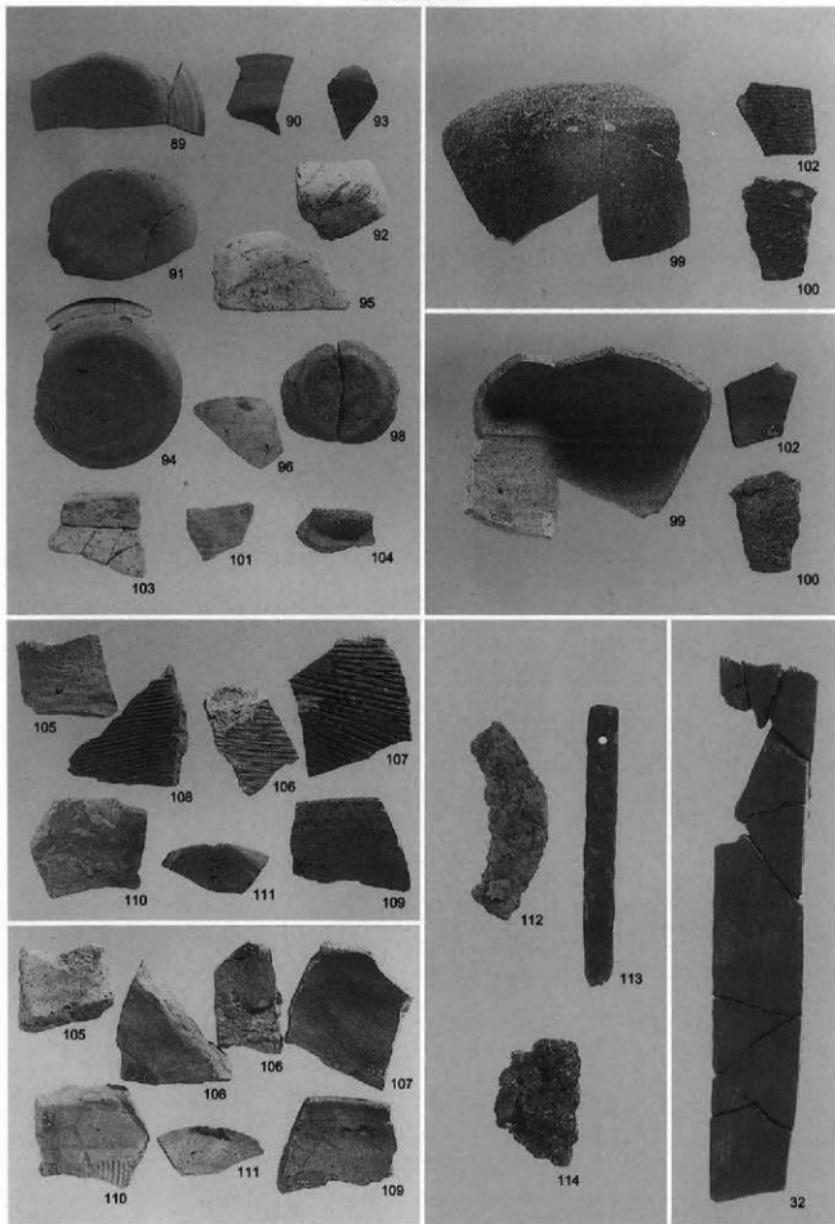
## 出土遺物写真1



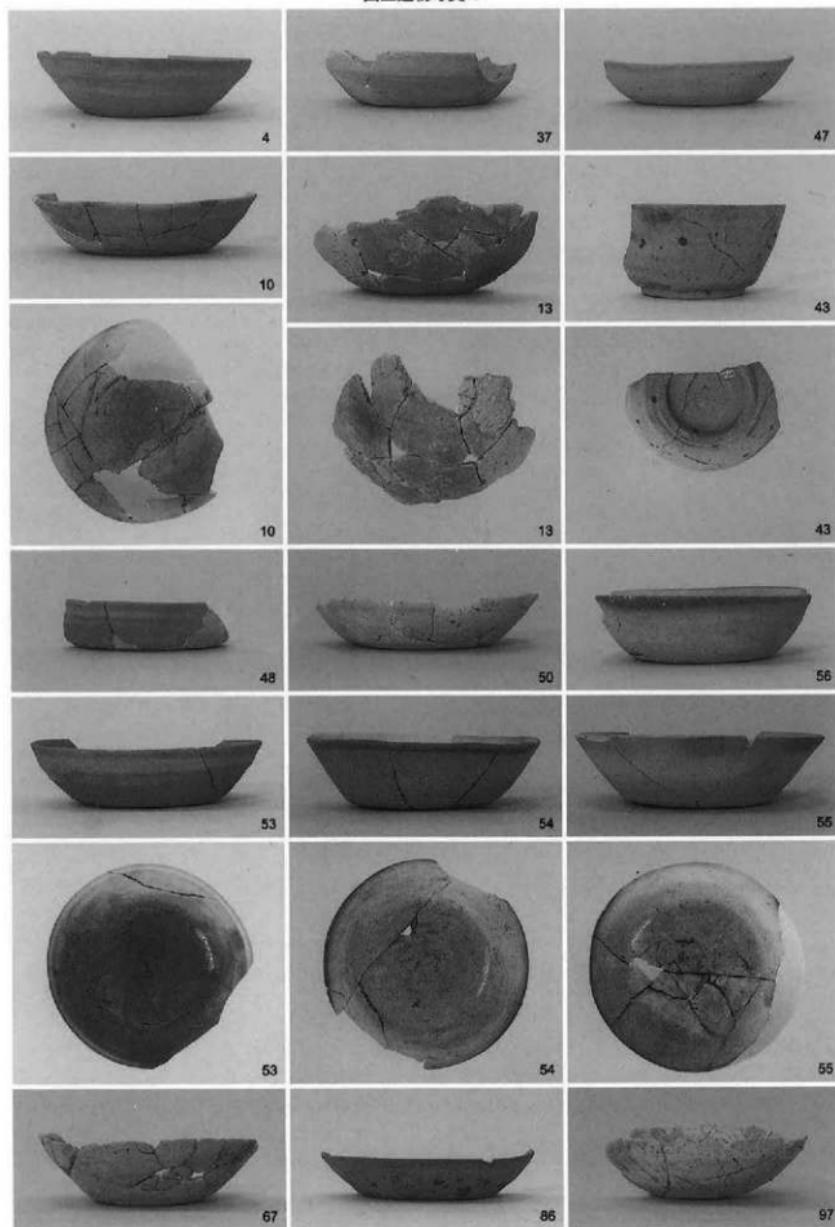
## 出土遺物写真2



## 出土遺物写真3



## 出土遺物写真4



## 出土遺物写真 5



61



14



30



31



33



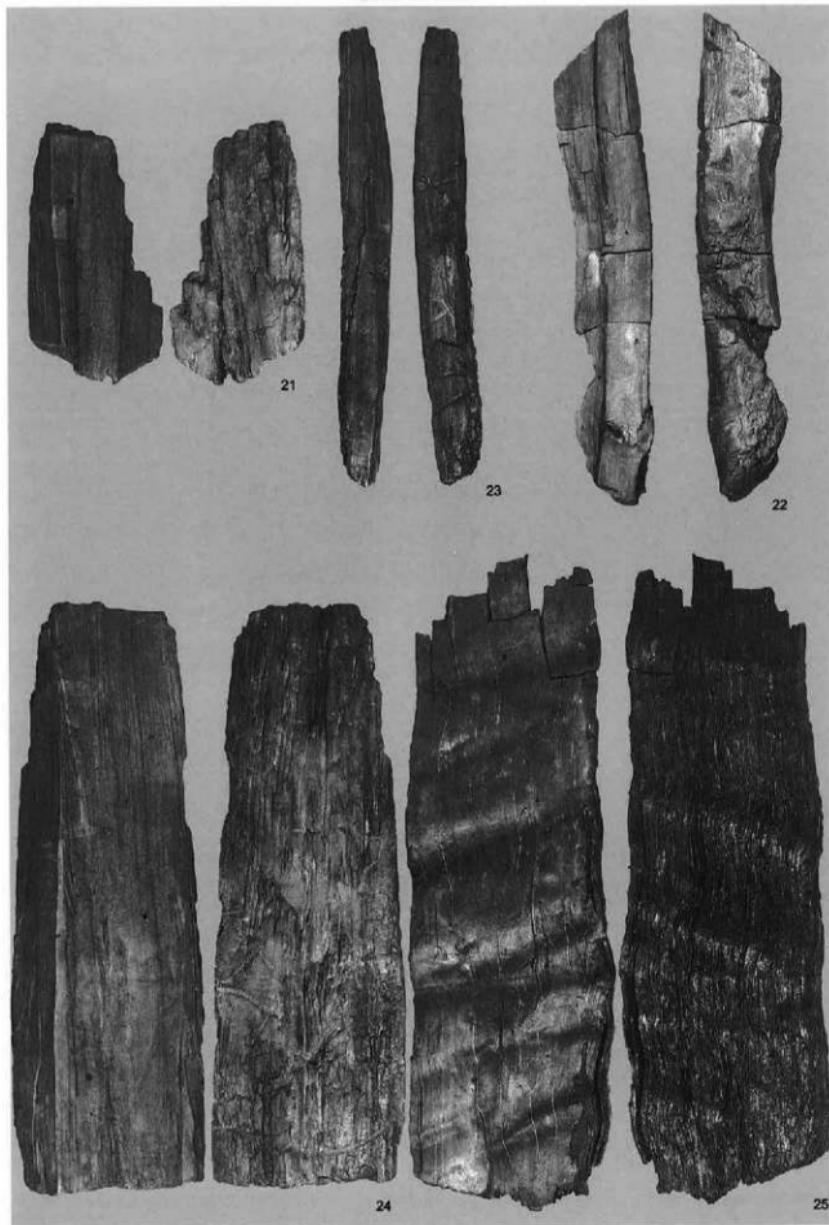
34



53



56



報告書抄録

ふりがな	さかた						
書名	坂田						
副書名	新潟県柏崎市西山町坂田・坂田遺跡発掘調査報告書						
巻次							
シリーズ名	柏崎市埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第 56 集						
編著者名	中島義人・室屋尚史・伊藤啓雄						
編集機関	柏崎市教育委員会 教育総務課 柏崎市遺跡考古館						
発行者	柏崎市教育委員会						
所在地	〒945-8511 新潟県柏崎市中央町 5-50 TEL 0257-23-5111						
発行年月日	西暦 2009年3月10日						
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯	東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
坂田遺跡	新潟県柏崎市 西山町坂田学 塾町他	15205	37 度 970	138 度 26 分 42 秒	20080408 ~ 20080612	278	市道柏崎杉本 線道路改良工 事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
坂田遺跡	集落跡	古代 中世	柱穴・溝・井戸・土坑	須恵器・土師器・珠洲焼 越前焼・白磁・鉄洋・鉄 製品・木製品・近世陶磁 器			

柏崎市埋蔵文化財発掘調査報告書 第58集

## 坂 田

—新潟県柏崎市西山町坂田・坂田遺跡発掘調査報告書—

平成21年2月27日 印刷

平成21年3月10日 発行

発行 柏崎市教育委員会 新潟県柏崎市中央町5-50

編集 柏崎市遺跡考古館 新潟県柏崎市小倉町7-18

印刷 有限会社わかい印刷 新潟県柏崎市田中16-15